
ガルディア大陸物語

流離人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガルディア大陸物語

【NZコード】

N82120

【作者名】

流離人

【あらすじ】

ガルディア大陸、ここは数千年前の大災害により人類の8割が死に絶え大地も荒れ、さらには文明が崩壊した。

その後どこからともなく「魔導士」が現れ、人々に「魔法」を伝えた。

多くの国が起き、廃れ、数多の戦争や災害により大きな国が4つとく「ギルド」を残すのみとなり早300年の時が経つた。

こことは違う世界から来た、と名乗る1人の青年がいた。彼は他の

年代と自分を比べ、次第に高慢になつていった。彼は強いつもりだつた。彼は才能があるつもりだった。彼は一番であるはずだった。彼は・・・・・。

ガルディア大陸には異様な人物がひつそりと暮らしていた。歴史に名を残すことはないものの、時が経とうとその姿は変わることがない。彼は強かつた。彼は才能があつた。彼は優しかった。

彼は・・・・・。

この二人が出会う時、悠久の平和が待つてゐる筈だったこの大陸に新たな時代の風が吹き抜ける。

PVアクセス35000超え！ ユニークアクセス8000人超え！

皆様、いつもご愛読ありがとうございます m(-_-) m

#1 最強？旅立ち & apo.・出会い（前書き）

作者の性格によりこの小説に「ラブコメ」というものはおそらく存在しません。

また、作者は更新速度が亀並みに遅いので末長くお付き合いください。

流離人は大阪人のため、関西弁が交じることがあります。予めご留意ください。

追記：

稚拙すぎる始まりですがいつか改定版でも出したいものです。
ですのでミス以外での編集はしない方針です。

#1 最強？旅立ち&amo・出発

「はあ・・・」

ある畠下がり、制服姿の青年はため息をついていた。

「何でこの御時世に武術なんてする必要があるんだよ。それに俺はもうだれにも負けないぐらい強くなつたっていうのに。でもそんなこと言つたらじいちゃんにぶん殴られるしな・・・はあ・・・どうしよう、寄り道して帰ろつかな。そうだな、そうするか。」

そう言つて青年は角を曲つた。その時だ。まばゆい光が田の前に飛びこんできた。

「うわっ！なんだなんだ！？」

彼が一瞬目を閉じ、ゆっくりと田を開けると・・・・・・・・・森にいた。

- - - - SIDE? ? ? - - -

「しつかしこのあたりも物騒になつたなあ。この森林にはEクラスの魔物ぐらいしかいなかつたのにな〜んでロクラスがいるんだ？まだつかからこの森林を侵略しに来たんだろうが俺に会つたのが運のつきだな」

その青年は大きな岩に座つていた。否、それは岩などではなく大きな生き物の頭蓋骨のようだつた。そして青年の前には大きなかがり火で焼いたこれまた大きな肉の塊があつた。どうやら捕まえた魔物

を食べる飯のようだ。

「ちい、ちりそろいいかなー、つと。お?上出来だな。それじゃ、食べるとするか。・・・・・ん?誰だおまえさんは?」

彼の前には見たこともない服を着た一人の青年が無防備に立っていた。

「もう一度聞くぞ?おまえさんは誰で、何の用だ?」

青年はその問いには答えず、ただ一言呟いた。

「・・・おなかすいたあ」

#1 最強？旅立ち＆アドバイス（後書き）

はい、短いですね。これからだんだんと長くしていきたいですが予定は未定です。しかし、短くともおそらく量は書くと思いますので前書きにも書きましたが末長くお付き合いくださいませヨ（ - - ）
m

「はあ、食つた食つたあ」

「・・・お前、食い過ぎだらひつ」

ひきついた顔で笑みを浮かべながら続けて言った。

「せつかく一〇日分ぐらうの食糧にはなると思つてたのに向で一食で無くならなきやならねえんだよ」

「まあそつ言づなつて」

「・・・はあ。で、改めて聞くがお前さんは誰だ?」この辺の村の格好じやあねえし、何より見たところ得物も持つちゃいない

「得物?」

「武器のことだよ。もしかしてお前はその拳で戦うのか?それとも魔法士か?いや、なら一人でいるわけがねえな・・・」

後半はぼそと言つたために風にまぎれて消えてしまっていた。

「武器?武器なら刀が使えるぞ。それに拳でも結構いけるぜ」

「刀?まあいい。それじゃ、次の質問だ」

目を少し細め、威圧しながら言った。

「お前まだじから来た」

「えいひて・・・！」せせせせじだっ・

「・・・」

「俺は『氣がついたら』いたんだ。かつあまで住む街こいたのに」

「・・・」

「ほ、本当だつて。だからそんなに睨むなよ
(眼を見る限り嘘をついてるよつには見えないな。記憶喪失か? そ
れとも記憶が混乱してゐのか。それにしては言葉ははきはきとして
いるな)

「名は?」

威圧を消しそう聞いた。

「え?」

「名だよ。名前。何て言つんだ?」

「俺の名前は川崎琢磨かわさきたくま」

聞きなれない名前に少し目をしばたき、

「カワサキ タクマ?」

「ああ。あなたの名前は?」

「俺の名はガルム＝グランベルツだ」

「ガルム＝グランベルツだ。」

琢磨は頭が回つていなかつた

かたむ・・・・・くさんへん?

カルムは憤然とした顔で琢磨を睨みつけた。

爵領だ」

「え・・・うて・・・日本だよね?」

ガルムは真顔で言い返した。

(え、ええええええええええええ。なんだ?何がどうなつてやがる。ガルディア?シャルベ?ミン?何の夢だこれは。ま、まさかこいつて)

琢磨は驚きを隠そつともせずにガルムを一目見

？」

「驚いているところ悪いがきちんと説明してくれ」

「え、ええと、俺が異世界から来たと言つたら信じる？」「琢磨はしじみむじみになりながらも説明しました。

「ふむ、異世界……か。ありえん話ではないな。聞きなれぬお前さんの名前」

「琢磨だ」

「そう、タクマ。それと日本とかいう国ね。世界を旅してゐる俺でも見たことがないその格好。全てを総合して考へると、まあ納得できなくはないな」

腕を組み、目を閉じながら思案顔をしながらそり語つた。

「そ、そつか。信じてくれるのか」

ガルムは少し笑んだ顔で言つた。

「まあな、嘘をついてる田でもないしな」

琢磨は怒った顔で言い返した。

「当たり前だ、俺は嘘なんてつかねえ。弱い証拠だからな」

「弱い証拠、か。まいい。」

「何か引っかかる言い方だな。で？」

「ふふふ、気にするな。お前は俺の食糧を食つちまつたわけだしな。

俺の食糧集めを手伝え。その駄賃としてこの世界で不自由のないぐらいの常識を教えてやるつ

琢磨は驚いた顔で言った。

「ええ、タダで教えてくれよ。・・・まあいいか。一宿一飯の義務って言うしな。いいぜ、手伝つてやるよ。ただ、何か武器ないか?出来れば刀、なければ剣がいいんだが」

「ふむ。なかなか若くして殊勝な言葉を知つてるな。刀とやらは無いが剣はこれを貸してやろう。それと肉をばぎ取る際にはこのナイフを使うといい。その剣ほどではないがそれでも結構な切れ味があるからな。気をつけて使えよ。それと絶対なくすなよ」

琢磨はガルムから剣とナイフを受け取り、こう返事した。

「若いって、お前もそう変わんないじゃねえか。それにさつきも言つただろ、俺はかなり強いぜ。お前よりもでかくてうまい肉を捕まえてきてやるよ。そういうえば剣借りちまつたけど、ガルムは武器あるのか?」

「はつはつは。安心しろ、俺には剣があと2本ある。それにしても楽しみだな。では私も精進するとしようか。では、一手に分かれて1時間後にこの場所で落ち合おつ」

琢磨はにやりとこつ言つた。

「俺が運べないぐらい大きな獲物を捕まえた場合は?」

「はつはつは。ならその時のためにこの火の魔精石をやるつ。使い方はわかるか?」

「いや、わかんねえ。どうやって使うんだ?」

「」の魔精石を握りしめてこう呟け、
「ファイアーハード

琢磨はその言葉を聞き、魔精石を凝視した。

「無論、これが使い方の全てではないが、それも含めてまた後で教えてやるよ」

「やつか、じゃあまた1時間後に」

「ああ、1時間後、また会おう」

二人はそう言いながら握った拳をぶつけ合い、お互に背を向けて
緑鮮やかな葉を宿す木々の間に消えて行つた。

#2 (後書き)

次回からついに戦闘がはじまります。

名前は語感を中心に選択しておりますので、発音しにくい名前はあまり登場しません。

ちなみに、この1話2話で既に伏線がいくつも仕掛けけてあります。鋭い皆様の目からすれば一目瞭然でしょう。

今回の文章でおわかりかと思いますが流離人は「え」「…」を多用します。

見にくい文章ではあるかと思いますが実際の言葉の感じをイメージしながら書いてありますのでどうかご容赦ください。

感想・誤字・脱字報告 お待ちしております（^-^）ノシ

追記：行間1行空けた方が読みやすいですかね？

追記：行間空けることにしました

#3 初戦闘、そして・・・

----- SIDE ガルム -----

ガルムは木々が生い茂る中で少し開けた場所に立っていた。ガルムの周りには緑色の液体をまき散らした植物が数多く倒れ伏していた。

「ふう・・・これで10体目か。さつきはあんなにでかい奴が狩れたのに、今度は植物の魔物が多いな。もしかしてさつきのやつがここの大だつとかいう落ちじゃないだろうな。もしそうなら無駄足どころか散財じゃねえか。木の実や果実だけでも食つていけるがどうせなら肉食いたいしなあ」

そう言いながらガルムは魔物を踏み潰しながら奥へ奥へと歩いてゆく。

次第に周りの景色が葉の生い茂る木々から枯れた木になっていく。「そもそも最近の肉は高すぎるんだよ。一食分で銅貨10枚なんて誰が買えるんだよ。肉一食で3人家族を2日養えるとか・・・・。ん?何でこのあたりの木は枯れてるんだ?夏も近いのに・・・・」

ガルムは木の一本一本を丁寧に見て回る。

「病気つてわけじゃない。虫もない。」

今度はしゃがんで土を手に絡ませる。

「土は・・・悪いどころかこんなに養分のある土も珍しいな。なら何でだ?・・・これは?」

何かを手に収めて立ち上がり、腕を組み目を伏せ考える。どうやらこれがガルムの考えるときの癖らしい。

その時、ガルムは勢いよく横に跳躍した。

スタリと着地すると、先程まで立っていた場所には全長3mを超える巨大な鳥が爪をとがらせて羽ばたいていた。どうやら獲物を捕まえ損ねて怒つたらしい。そのまま再び空に舞い上がり、巨体な羽を大きく広げ襲ってくる。

ガルムはこれを軽々と避け続けながら不思議そうな顔をしてこう呟いた。

「やつぱりこの緋色の羽はロック鳥だつたか。・・・こここの新たな主か？いや、さっきのDクラスのベアファングが主だとしても倒してから3時間ほどしか経っていないぞ。それにロック鳥はBクラスだ。格が違う。くそつ。いつたい何が起こつてやがる。仕方ない、食糧集めは中止だ。いますぐタクマと合流して森を出た方が無難だな」

そう言いながら剣を振り、ビュウやつたのかはるか上空にいるロック鳥を叩き落とした。

「剥いでる時間ももつたいないな。タクマは・・・無事だといいが・・・」

ロック鳥には目もくれず、ガルムは来た道を猛烈な勢いで引き返し走った。それはもはや跳躍に近かつた。

----- SIDE 琢磨 -----

琢磨は先程ガルムから貰つた剣を鞘から出し、眺めていた。
その剣はすらりと鞘から抜け、微弱ながらも光を放つているように見える。

「剣についてはあんまり詳しくないけど、素人の俺にもこの剣の凄さはわかるな。それに、他人の剣なのに俺の手によく馴染む。装飾が少ないのでその代わりに実用さを追求した剣なんだろうな。長さ

は1㍍ぐらい。これがロングソードってやつか

その剣は重すぎることも軽すぎることもなかつた。

琢磨はそれを両手で持ち正面に構えて2度3度と振つてみた。

「へへ、早くこの剣を使ってみてえな

その時、右後ろの草むらが、がさがさと揺れる音を聞いた。

「お、早速獲物か、さあ来い。天才剣士琢磨様がお前を肉塊に変えてやるぜ」

がさがさ、がさがさがさがさ

草を分ける音がだんだんと近づいてくる。

ぴょいん、ぼてぼてぼてぼてぼてぼて・・・

草むらから現れたのは気持ち悪い怪物でもライオンのような猛獸でもなく、一羽のかわいらしいピンクのウサギのような生物だった。それは琢磨を警戒し近づかないようにしながら、来た方とは逆の方に向へ駆けて行つた。

続けて、2㍍ほどの大きな狼のような生き物が三匹、琢磨を囲うように現れた。

「よし、ウサギが来たときは拍子抜けしたが、お前たちには満足だ、さあ来い。来ないなら行くぞ」

口先だけでなく琢磨は戦いといつもの心得ていた。つまり先手必勝である。

琢磨は一番近い狼を袈裟切りをくらわせ、さうこもつ一匹も逆袈裟切りを与えた。

「はつはー。やつぱり俺つて凄いぜ。でもこの剣の切れ味は本当に凄いな。剣の特性から脳しんとうでも起こせばいいと思つたが一匹とも真つ一つだ。ま、俺の技術があつてこそだけどな」

そう言つている間に残りの狼は身を低くし襲いかかってきた。

しかし琢磨は冷静であつた。ぐるりと回るように狼の身体を受け流し、そのまま狼を後ろから横に真つ二つに切り裂いたのだ。

「よつし。楽勝。剣についた血糊を拭き取つて・・・よし。貰つたナイフで剥ぐとするか」

最初は意氣揚々と狼を剥いでいくが、すぐに顔を青くしていた。無理もない。琢磨は何度もケンカこそしていたが、身を剥ぐことはおろか、動物を殺したこともないのだから。

琢磨は吐き気をこらえながらも、何とか剥ぎ終え、予め教えてもらつていた部分だけを袋に入れて歩きだした。

「あ・・・俺はこれから生きて行くためにこんなことを屁にも思わなくなるぐらい慣れるんだろうな。凹んでいても仕方ない。ガルムよりも大きい獲物を捕まえて驚かせてやるんだ」

琢磨はそう言つて奥へ奥へと歩き始めた。
やる気だけはあつたが疲れもたまつっていた。

暫く歩いても獲物は見つからず、少し開けた場所で疲れをとるために切り株に座つて貰つた水を飲んでいた。剣は提げるのをやめ、しかしすぐ取れるように脇へ置いていた。

「ふう。ガルムはどうしてるかな。大きいのとれたかな。そういうえ

ば、この世界で大きいつてどれぐらいなんだ？しまった、聞き忘れたな。まあいい、2mの狼三匹を狩れたんだ。もつと大きいのだとて俺の手にかかるは楽勝だな。・・・ん？気のせいかな？何か向こうの方で何か聞こえたような。そつ、鳴き声のような・・・」

琢磨はこの時点ではいつものように高慢でいた。それもそのはず、先の戦いで勝利を収めていたからだった。しかし、琢磨はここでは引き返すべきだったのだ。

琢磨はまた道なき道を剣を提げながら歩いてゆくと、そこには大きな蜥蜴の様な生物がいた。

「まさか・・・あれはドラゴン？おおお！きたぜ、初ドラゴン。あれを狩つたらガルムに勝つたも当然だ。俺の技術に加えてこの剣もあるんだから楽勝だ。それでも・・・一応様子を見ておくか」

琢磨は呟くと、草むらに隠れるようにしゃがみ様子を見ていた。実は、それはドラゴンではなく亜種のワイバーンという生物であつたが、琢磨がその名を知るわけもなく、また、強さがBクラスで素人が手を出してはいけない魔物だということも知る由もなかつた。ワイバーンはどうやら、琢磨も先程戦つたベアウルフを捕食しているようだった。

やがてワイバーンが動きを変えた。

(捕食が終わつたんだろうか)

琢磨はよく見ようと、顔を上げた。上げてしまつた。
琢磨はワイバーンと目が合つてしまつた。

その後、琢磨は左へ飛んだ。これが功を奏した。ワイバーンは右

回転しながら炎を吐いたのだ。

もし琢磨が右に飛んでいたのなら今頃丸焦げだつただうつ。

琢磨は先の戦いと同じように先手必勝と考えて、剣を構えて叫びながら突っ込んでいった。

「ああああああああ！」

しかし、琢磨は剣の使い方を知っている訳でもないために剣に無駄な力が入り、ワイバーンの鱗にはじかれてしまった。琢磨はあわてて剣を見ると細かいひびが幾つも入ってしまっている。

「つ」

琢磨は高慢な性格とガルムとの勝負が災いし、逃げるという選択肢を思い浮かばなかった。

その間にもワイバーンからの幾度もの炎を避け続けていた。

しかし琢磨の体力は限界であった。ついに完全に避けきれず左腕に火が付いてしまった。あまりの熱さに琢磨はのたうちまわるしかなかつた。

「うわああああ」

何とか水で火を消したものの、ワイバーンがその隙を見逃すはずもなく噛みつく為に突進してきた。

琢磨の体は極度の疲労と緊張で動けなかつた。

(俺は・・・死ぬのか？こんなところで？嫌だ！死にたくない！ガルム！助けてくれガルム！)

「タクマ！剣を盾にして目をつぶれ！」

「ガ、ガルムか？でも剣にひびが！」

「かまわん、早くしろ！」

琢磨は何とか剣を盾にするように前へ、そしてギュッと目を閉じた。するとすぐに衝撃が体を突きぬけ剣が碎けるのを感じた。

琢磨はそこまで感じて視界が暗転した。

（ガルム！ガルム。ガル・・・ム・・・）

#3 初戦闘、そして・・・（後書き）

流離人の技術、じゃこれぐらいしか書けない！
神様、どうか哀れな私に文才を下さい！

といつわけで初戦闘シーン

中々長く書いたつもりだけどこんなものなのか・・・
長く書くのってこんなにも難しいんですね。
いや、今話も長く書こうと思えば書けるんですが、ちょうどいいの
で戦闘シーンで終わっておきます。

#4 新たな出会いと決意

(「…………」は……?)

琢磨の意識が戻った時、しつかりしたベッドに寝ていた。

(俺はいったい。あ痛つ、そうか。俺は異世界へ来て、ガルムに会つて、そして……そして負けたんだ。俺は負けたんだ……)

琢磨の頬に一筋の涙がつたつた。

「…………あ。ああ。そうだ。だから……5人ほど。ん?……なら一人寄越してくれ。……別にかまわんが、どこまで出来るかわからんぞ」

(ガルムか?誰と話しているんだ?)

ガルムは光る石を手に持つて誰かと話していた。

「ああ、なら良い。……ん?すまないが切るぞ。連れが起きたみたいだ。…………さつき言つただろ?迷子の少年だよ。……・・そこら辺は本人に聞くよ。ああ、じゃあな」

ガルムは琢磨の寝ているベッドへ近づきながら、光らなくなつた石を懷に入れた。

「よひ。やつと田代めたか。痛いところはあるか?」

琢磨は体中を動かし始めた。そして、ぶすっとした様子で言った。

「体中が痛い」

「はつはつは。そつかそつか。だがな、痛みを感じることは治ると
いつ詰拠だ。痛こままは辛いだろう。今痛みを抑えられる奴を呼んでこよひ。おーい、アショール！おーい！」

「はーーー」

「コツコツコツコツコツコツ

元氣の良い返事とともに誰かが近づいてくる。
部屋に入ってきたのは中性的な顔をした、自分と同じぐらいの年齢の女の子だ。
髪は後ろでひとつくつこしてある。

「呼びました？ガルム様。・・・あら、お連れの方、お見覚えになつたのですね？」

「ああ。だからコウの奴を呼んできてくれないか？」

「はい。わかりました。少々お待ち下さい」

「コツコツコツコツコツコツ

琢磨は何とか体を起し、

「なあ、ガルム。こほんなんだ？」

「こほんか？こほんは昨日、お前から言わせねばだらうが、まあ俺たちがいた森があるだろ？そこから一番近い町。キーリヒの町にあるギルド支部だ」

「ギルド？」

「ああ。そちら辺はまた後で教えてやるよ。約束だしな。それよりもタクマ」

ガルムの様子が一変し真剣な様子になった。
自然と琢磨も背筋を伸ばす。

「すまなかつた」

ガルムは両手を膝に当て、座つたまま深く頭を下げた。

「え？」

「俺はあの時お前の実力を知らないのに一人で行かせ、そして傷を負わせた。それは明らかに俺のミスだ。謝つて済むとは思つてはない。だが謝らせてくれ、すまん」

「ちょ、ちょっとまってよー！」

琢磨は謝られるとは思つてなかつた。

なぜならあの時自分は強いと思わせるような言動をとつていたし、琢磨自身一人で行けると思つていたからだ。そして、迷惑をかけたのは自分であり謝るべきなのも自分であるはずだ。それにもかかわらずガルムに謝られ、気が動転してしまつていた。

「俺こそ、迷惑をかけてごめん」

お互ひ、頭を下げるつた。

コッコッコッコッコッコッ
パタパタパタパタパタ

「一つの足音が近づいてきた。

（一人はさつきのアシェルって女の子だろ？もう一人はだれだ？）

「呼びましたか？ガルムさん」

ガルムと琢磨が振り向くと、そこには動きやすそうな格好をした豊満な女性が立っていた。先端に白い宝石のついた杖を握りしめている。

「すまんなユウ。連れが起きたんでな。白魔法で治療してくれないか？」

「わかりました。どこが痛いんですか？」

「全身だつてや」

琢磨はガルムとユウの会話が耳に入つていなかつた。なぜなら、

（白魔法？魔法が見れるのか？）

・・・わくわくしていた。

「では、服を脱いで下さい。ああ、もちろん全部ですよ」

ユウは笑顔で琢磨に言い放つた。

「…………え？」

「服を脱いで下さい、全部。アシェルは外に出ていなさい。タクマ君も年頃の男の子なんだから恥ずかしくて脱げないでしょ？」

「はーい」

そつ言つてアシェルは部屋から出て行こうとする。

「じゃあまたね。ガルム様？」

コッコッコッコッ

（え？え？ええ？待つて待つて待つて待つて？え？脱ぐって、下着も？）

「あら？ああ、大丈夫よ。私は何回も男の人の裸を見ているから」

琢磨はそうではないと、首をぶんぶんと横に振り手をばたつかせた。ガルムはそんな二人を見て微笑み、そばの机に置いてあつたコートと武器を持ち、

「さて。俺も行くか

「あら？ガルムさん、どこかへお出かけですか？」

「さつきギルドのお偉いさんこここの森の異常の報告と応援を呼んだんだが、応援が到着するまで俺が適当に片づけることになつてな

「俺も行く

琢磨は何も考えず条件反射でそう言った。

「ダメだ」「ダメです」

「怪我してお前を連れて行くわけにはいかねえ

「でも…」

「ガルムさんの心内も理解してあげて下れ。これ以上琢磨さんが傷ついて欲しくないんですよ」

「…・・・」

「それに今あなたが言つたとしてもガルムさんの足を引っ張るだけですよ？それでも行きますか？」

琢磨は俯きながら小さく首を横に振った。

ガルムは琢磨が背伸びをしていることに気付いていた。
琢磨もまだまだ子供なのだ。そんな琢磨の頭をなでながら

「お前はしつかり傷を癒しなさい」

ガルムは優しく、諭すように言い聞かせた。
そして「一トを羽織り剣を提げ、出て行け」とした。

「…・・・こつてらっしゃい」

ぽつりとつぶやくつむか琢磨は言つた。

「……こつてきまく」

ガルムは微笑みながら、優しい声ではつきつとそつ返した。

ガルムはギルドを出て自分の体調を確認した。

（タクマを助けた時に少し左腕を痛めたか。それでもタクマの治療が終わる前に帰らなきゃならん。また心配させることになるから。・・それにあの異常現象も心配だ。）

「鈍らないようにたまには本氣を出すとするか」

ぼつりと咳き、その声の余韻が消える頃にはガルムの姿は忽然と消えていた。

-----1時間後-----

「ふう。終わりましたよ。お疲れ様でした、もう服を着てもいいですよ」

タクマの顔は真っ赤に染まっていた。年頃であるのに女性に裸を見られたため当然の反応だった。

そしていそいそと服を着ると、コウも少し疲れた様子に見えた。

「ありがとうございました」

「いえいえ、白魔法を使えるものとして当然の行為をしたまでです。しかし、あと3日は安静にして置いて下さいね？さもないと今の治

療をもう一回しないといけなくなりますから」

「は・・・はい」

さすがに無理に動いてもう一度同じ治療を受ける勇気はなかった。
(ガルム、大丈夫かなあ)

「ねえ」

「え?」

気がつくとユウはいなくなり、その代わりにアシェルがいて此方を覗き込んでいた。

「ねえってば!」

「あ。何?」

ガルムのことを考えている間に少女の言葉を無視していったようだった。

「あなた、あのガルム様とどうこう関係?」

「どうこうって。別になんの関係もないよ」

アシェルはその言葉に納得がいかなかつたのか声を大きくした。

「そんなの嘘!じゃあなんで一緒にいるの!?」

「あそこ」の森で会つたんだ」

タクマは顔をしかめながら正直に本当のことを見つた。

(声がでかくて耳が痛い)

ようやく納得したのか、落ち着いた声で話し始めた。

「ふうん、やっぱりね。あんたみたいなBランクの魔物すら倒せないやつがあのガルム様と一緒にいるなんておかしいと思ったのよ。」

その言葉を聞いて琢磨は驚いた。

(え? ガルムって本当はとても強いのか?)

「な、なあ。ガルムって何者なんだ?」

「あなたは森で初めてガルム様に会つたんだったわよね。なら知らないで当然か。ガルム様はS級ランクの冒険者よ。分かる? S級ランクよ?」

ランクについて詳しく知らない琢磨ははつきりと分からなかつたが、アシェルの次の言葉で愕然とした。

「知ってると思うけど、S級ランク以上、S級・SS級・SSS級はこの大陸でも30人しかいない。つまりガルム様はこの大陸の最高戦力の一人と言つても過言ではないのよ。・・・ま、私もさつきガルム様が支払いの時に、出したギルドカードがプラチナだつたら分かつたんだけどね」

(ガルムが・・・最高戦力? それに比べて俺は・・・)

琢磨は体を乗り出し、

「な、なあ・・・」

「ごんつ

拳がアシェルの頭の上に落とされた。

「つ、痛う〜〜。誰よーいつたい！」

そこにいたのは呆れ半分に怒り半分のガルムだった。

「お前なあ。確かにギルドカードを見せたのは俺のミスだったかもしれない。だからと言つて個人情報を漏らす奴があるか！」

アシェルは突然現れたガルムに口をぱくつかせていた。

「〜〜。いつこからこ？」

「今だ！」

「「」、「めんなさい」です〜〜」

アシェルは何度も頭を下げる。

「ふう。分かつたならもういい。さて、タクマ。今からこの世界の常識について教えようか？それとももう休んで明日にするか？どうせ2・3日かかるんだろ？」

琢磨は体を戻し、

「3日だって。・・・」「めん、明日にしてくれないか？少し

考えたいことがあるんだ」

「分かった。考えるなら俺たちは邪魔だな。考え込むのもいいが、お前の体はお前が思つてる以上に疲労してるんだ。しつかりと休めよ。おやすみ」

「わかったよ。ありがと・・・おやすみ」

そういうとガルムとアショルは部屋を出て行き、部屋には琢磨一人となつた。

（俺は最強じやなかつたのか？精神だけでなく実力さえも最強にはほど遠い。俺とガルムの何が違つんだ！俺はこの世界じやどれくらいの強さなんだろう。俺はこれからこの世界で生き抜くことができるので？俺は・・・俺は・・・。そうだ。この方法で！なら今日はもう休もう。とても疲れた・・・から）

#4 新たな出会いと決意（後書き）

琢磨苦惱す ですね

井の中の蛙大海を知らず。蛙が大海を知つたら、普通ならばショック死や憤死してもおかしくないと思いますが、こういう点では琢磨は強いですね。

流離人では無理だという自信があります。
皆様はどうでしょうか。

#5 決心。そしてお勉強（前書き）

とこりわけで世界観についての話となります。

- ここでは基本的なことだけを掲載し、
- 詳しいことは本編にて明らかにする
- 裏設定を番外編として掲載する
- 物語進行の際に、その都度軽いおさらいをしていく。

の3通りで掲載いたします。

では、本編をどうぞ

設定はかなり長いため、理解し辛いと思った方は本編半分を呼んだ後、本編最後の整理したものをご覧ください。

#5 決心。そしてお勉強

ガルム・琢磨・アシェルは琢磨の病室で朝食を取ると、

「ふう、食つた食つた。さて、勉強を始めるとするか」

「ガルム、勉強の前に少しいいか？」

琢磨の真剣な様子を感じ取ったのか、ガルムも顔を引き締め、

「何だ？」

「頼みがある。俺をガルムの弟子にしてくれ！」

「・・・理由を言え」

「俺は弱い。前の戦いでそう確信した。俺は強くなりたいんだ」

ガルムはその言葉に目を細め声を低くして尋ねた。

「何のためだ」

「俺はこの世界を生き抜きたいんだ！何のために俺はこの世界に飛ばされて、これから何をすればいいのか、それを知りたいんだ！だから、だから俺を弟子してくれ！」

「この世界？あなた何を言つてているの？」

事情を知らないアシェルは琢磨が何を言つているのかわからなかつ

た。

仕方なく琢磨はすべてを説明した。

「へえー。そうだったんだ。ってそういうじゃない。ガルム様！私も、私も弟子にして下さい。理由は言えませんが私は強くならないといけないんです！」

ガルムはアシェルの方を向き、

「その必死さ、復讐か」

アシェルは一瞬言葉に詰まつたが

「確かに私は復讐もしたいです。でもそれ以上に小さい頃にガルム様の剣技を見たことがあるんです。私はユウ姉さんの妹ですからいろいろな方の剣技を見てきました。しかしガルム様ほど綺麗で、でも見た目だけじゃ無い剣技は見たことがありません。私はどうしても剣を極めたいんです！」

「本気のようだな、だが却下だ」

「何故！？」 「何でですか！？」

ガルムは軽く息を吐き、腕を組み一人の顔を交互に見て言った。

「ここの際だ、何で俺が弟子をとらないのか教えてやろう。俺は今まで数十人の弟子をとつてきた。

アシェルは口に手を当て驚きの声を上げた。

「えつー！」

(そんな話、聞いたことないー。)

「どうした？」

「い、いえ。なんでもないです。すみません」

「そうか、だつたら続けるぞ。俺は剣士を目指す奴も、槍士を目指す奴も、斧や拳や魔法を極めたい奴も弟子として取った。俺は教え下手だ。だから俺は実践をもつて育てるんだが、お前らも知つての通り俺はS級冒険者だ。どうしても危険な依頼も出でくる」

「足手纏いなんかにはなりません！」

ガルムは小さく首を横に振つた。

「足手纏いを悪いとは思わない。弟子を守るのは師匠の義務だ。だが、そんな環境は人を殺す。肉体的にも、精神的にも」

もう一度一人の顔を見て、

「結果、今まで俺のもとを旅立つた弟子は10人もいない」

「それでも！」「それでもお願ひします！」

「・・・せつか。そこまでか。良いだろう、俺がお前らを育ててやるよ。どこに出しても恥ずかしくないぐらい、な。弱音を吐こうが腕や足がそれようが鍛え上げてやるぞ。いいな！」

一人は声を合わせて真顔で言った。

「はいー。」

「時間を見つたな。勉強は昼飯を食つてからにするか」

外を見ると太陽が真上に来ていた。

意外にも時間は経っていたようだつた。

「じゃあ一緒に昼飯をもつてこようか、なあコウ?」

その言葉にアシェルは勢い良く振りむいた。

コウは部屋に入つてきて肩をすくめた。

「やつぱりばれていますか。何時から?」

「最初からだよ」

アシェルは辛そうな様子で、

「お、お姉ちゃん。あ、あのね・・・」

「別にかまわないわよ、行つて。出来れば姉として復讐はやめて欲しいけど、それはその時のあなたの判断に任せるわ。ただし!」

アシェルは笑顔になつたが、あわててすぐに真剣な様子に戻つた。

「絶対に無事で帰つてきてね。父さんも母さんも死んで、あなたまでいなくなるなんて私耐えられないから・・・分かった?返事は?」

アシエルはユウに抱きつき泣きながら

「うん。うん。必ず帰つてくるから。必ず・・・」

暫らく経つて一人はおいしそうな香りがするのに気づいた。

「邪魔しちゃ悪いと思つてな。厨房に行つて取つてきたぜ。ユウも俺らと食つよな？」

ユウは涙を手で拭いて、

「はい、お邪魔します。ガルムさん」

ガルムは机を並べ、4人分の昼食を置きながら

「ん~?」

「妹を、アシエルをよろしくお願ひしますね」

ガルムは振りかえり、

「ああ、任せる」

その後、4人で楽しく昼食をとつてユウはギルドの仕事へと戻つた。

「よし、勉強始めるぞ」

ガルムは何枚かの紙とペンを用意していた。

「まずはこの大陸と国について簡単に説明するぞ。この大陸はガル

「ディア大陸。そしてこのガルディア大陸をでかい長方形だとしよう」

そう言ってガルムは横長い長方形を書いた。

「次は国だ。まず最初にガルディア大陸には2つの王国と1つの帝国、1つの連合、そして自由自治都市がある。大陸の歴史は戦いの歴史だ。そして今ある5つの領土に分かれたわけだが、各トップは長い時間話し合い、それぞれの国家間に誰の領土でもない部分を作りだした」

そういうと大陸を9等分する線を引いた。

「大陸の北西にはシャルベ王国、北東にはクラリー王国、南東にはギリウス帝国、南西にはハルナ商連、そして中央には自由自治都市を置いた。各国には互いに接する部分はなく、逆に自由自治都市は各頂点の部分に各国が接する。自由自治都市はその4か所と各辺の中央部分4か所、計8か所に閑所を造つて人を出入りさせている。そして残る空白の部分はブレイドゾーンと呼ばれ、誰でも行き来することができる」

琢磨はガルムに尋ねる。

「つまり公領つてことか？そこに第3者が新たに街を作ることはできるのか？」

「今までそんな輩が出たことはないから確証は持てんが、おそらく他の4国1都市はそれを許さないだろう。それではブレイドラインを作った意味がなくなるからな。」

一拍置き、

「……」まで何か質問はあるか？」

琢磨は少し考え、

「大丈夫だ」

「よし、次は各国の特徴を説明するとして。まずはシャルベ王国。ここは賢王と謳われるオディアーノ王が治めている。彼は剣術が得意で建国の祖である三英雄の一人、勇者ベルズンクの血を受け継いでおり剣王とも呼ばれている。シャルベ王国は学問が盛んで巨大な教導院を3つ持っている。……何か質問は？」

「教導院ってのは？」

「教導院は基本的には魔法を教えている。もちろん魔法だけじゃなく武術も教えているがな」

「そうか。わかった

「次はクラリー王国だ。この国を説明するために、まずはこの大陸の宗教について説明しよう。名はナバルディ教。簡単に言えば平和を謳う宗教だな、別に特殊な行動は必要ないから作法を覚える必要もないから安心しろ」

(そうなのか、良かつたあ。作法なんて覚えられねえよ)

「ナバルディとは三英雄の一大賢者ナバルディのことだ、クラリーエ王国の建国の祖でもある。クラリー王国のトップはレオール教皇だ。彼は温和な性格から陽王とも言われている。クラリー王国は

ほとんどが平地であり、国歴史は1000年を超える。これは現在の国の中では最も長い

「そして、ギリウス帝国は武術に秀でた国で、ルンドベルク皇帝が治めている。建国の祖はヒルデグリムで、ルンデベルクは彼とは親族ではあるものの直接血はつながってはいない。しかし、武術に優れていたため彼の生まれ変わりであるとすら言われ、別名を健王という。この国は山が多い。また、武術に秀でたものが多く集まるようだ」

「最後に、ハルナ商連は複数の大商団が集まって議会を形成して運営している。現在の議長はアルトという若者が頭は切れるらしい。彼は軍師とも呼ばれている。ハルナ商連は少しの大陸と数多くの島々が領土で、各島に各商隊があるらしい」

また一拍置いて

「どうだ、分かつたか？」

琢磨はいっぺいいっぺいだった。

「うへへ。何とか」

ガルムはそんな琢磨をみて微笑み、

「今日はこれぐらじこじよつ。あとで自分で整理してみるといい

「ああ、分かつた」

本編はこれで終わりです。
少し整理してみましょう。

国名・位置・トップ・トップの別名・建国の祖

シャルベ王国・北西・オーティアーノ王・賢王（剣王）・ベルズング

クラリー王国・北東・レオニール教皇・陽王・ナバルディ

ギリウス帝国・南東・ルンドベルク皇帝・健王・ヒルデグリム

哈尔ナ商連・南西・アルト議長・軍師・不明

#5 決心。そしてお勉強（後書き）

ブレイドゾーンはイギリス（だつた筈）の議会に実際にあるソードラインをモテルにしています。
さて、次回も世界観について掲載します。

#6 (前書き)

前回同様ラストに整理したものを付けました。
飛ばしても問題ありませんが、可愛い琢磨君が見たい方はどうぞ本編へ。

「さて、今日も勉強会するぞ。昨日何教えたつけ?」

アショルはすぐさま答えた

「4国についてですよ、お師匠様」

「師匠つてお前なあ」

ガルムは呆れ気味に言つた。

そんなガルムにアショルはふすっとした顔で口を尖らせて言い返した。

「良いじゃないですか、実際に私たちの師匠なんですから。ほらー! タクマからもお師匠様に言つてやつてよー!」

タクマは急に話を振られてつい本音を滑りじつしまった。

「師匠・・・良いこと思ひ」

呟くような言い方だつたがその言葉は部屋に響き渡つた。すぐに失言だったと気付きたくまは俯いた、耳まで真っ赤にして。

「タクマまでかよ。まあ良こせ。好きなよしだ呼ぶといー」

ガルムは諦めた。だがその半面、タクマの精神成長を感じて嬉しく思っていた。

それ故ガルムは満面の笑みである。親バカならぬ師匠馬鹿なガルムだった。

「さて、じゃあ今日は自由自治都市からだな。」ヒは当初は都市など存在せずに昨日説明したブレイドゾーンの一部であるはずだったんだ。しかし当時からギルドは大陸全土に影響力があった。それ故、4国はギルド本部を大陸北にある島に移す計画を立てた

「師匠、ギルド本部は昔はどうにあつたんだ？」

ガルムはそれを聞き、微笑んだ。

「どうやら無意識にガルムのことを見たらしい。

「本部はシャルベ王国の北西、今の領土なら中央辺りに存在してた。しかしだ。この計画に反対する者がいた。それがギルド総裁イシュリードだ。こいつは4国を相手取り、いろいろな種族と手を結び、大陸中央部を領土とする自由自治都市の建国を認めさせた」

「お師匠様。イシュリード様は具体的にどうやつたんです？」

「知るか。どうせ交渉というと聞こえは良いがやつたことは相手の弱みでも握つて脅しでもかけたんだろうよ。奴は腹黒いからな」

「お師匠様はイシュリード様のことを嫌いなんですね。どのような方だったのですか？」

「なに言ってやがる。タクマはともかくお前は奴を知つていいだろうが。奴は歳800歳の竜人族で初代総裁にして現総裁だぞ？」

「ええ！？ そうだったんですね？」

「せうだつたんですか、つてお前。それでも本部にランクの冒険者
なのかよ」

ガルムは完全に呆れている。

「だつて私はこの町を中心に活動してるんですよ？本部のことなん
て全然知りませんよ」

琢磨はギルドについてほとんど知らないために会話に入れなかつた。

「ガルム、聞きたい」とが・・・」

「歸匠つて呼べ、弟子よ。わざも俺のことをつ呼んでくれただろ
？」

ガルムはついつい琢磨をからかつてしまつた。
それに対して琢磨は・・・

「師匠、ギルドのランクについて教えてくれ

余りに素直に呼んだのでガルムは面食らつてしまつていた。
(まさか呼んでくれるとは・・・)

「な、なんだよ。ちゃんと言つたる」

琢磨は再び耳まで真っ赤にしていた。
ガルムはそれを見て微笑みながら

「すまんすまん。ランクについてだな。まず・・・」

その時ガルムはアシュルまでこいつの話を待っているのに気がついた。
(いや、お前は知ってるだろ・・・。よし、ここはひとつ)

「まず・・・アシュルから説明してもいい」

「ええっ！私ですか？」

ガルムは名案とばかりに腕を組み何度もうなづきながら言った。

「そうだ、先輩冒険者として教えてやれ。師匠命令だ」

「うう、わかりました。では失礼して、ランクには下から言うとHからSSSまであります。ただ、Hは薬草や木の実・果実などの採取でGは鉱石採取。Fは討伐依頼の練習つてところで危険度の低い魔物の討伐となります。EからAまではあらゆる依頼であり、違ひは危険度だけです。例えば未開地や魔物の巣の中にある を取つてくる、などです。S～SSSも危険度だけの違いですがAとは難しさの格が違うそうです。魔物のランクはギルドランクが同等の者が時間がかかったとしても一人で討伐できる強さを表します。ランクの昇格はポイント制で、一定以上になると昇格されます。依頼は自分のランク+1以下の依頼が受けられます。例外はチーム登録をすることでチーム員1人が何か依頼を受けた時、普通なら依頼を受けられない人であつても特別に受けることができ、当然のことながらポイントも加算されます。・・・以上です」

「・・・90点だな。誇つていいぞ」

アシュルの顔に花が咲いた。

「あ、ありがとうございます！残りの10点は何ですか？」

「2階級特進、例えばF級の奴がチーム討伐でA級依頼を達成したとしてもDランクにはならずEランク昇格となる。またAランクがS級依頼を受ける際には、Sランク者が「援護要請」を出した場合に限る・・・これが残りの10点分だ。蛇足としてSランクに昇格するにはSランク以上からの推薦が10点以上貯まり、実力検査の結果が良かつた場合のみ昇格する。点数というのはSランク者1人につき1点・SSランク者は5点・SSSランク者は10点加算される仕組みだ」

「へえそれは知らなかつたです」

(なるほど。・・・待てよ？自分のランク＝魔物の強さならAシールの強さはDランク。なんだ、結局こいつもBランクには勝てないのか)

琢磨はアシールよりも弱いと思っていたがそれはどうやら勘違いだつたと知つて安堵した。

そして、

「師匠、新しくギルドに入るとしたらHランクからになるのか？」

「ん？言つてなかつたつけ？最初はだれであれFクラスから始まる。ただしBランク以上の者の推薦があるならば上位ランクからのスタートも可能だ。他に何かあるか？」

「いや、質問はもうない」

「では次に移るが。次は先程も話に出たがこの大陸にいる種族につ

いてだ。人口が多い順に言うと、人間族・亜人族・ドワーフ族・エルフ族・竜人族だ。琢磨のいた世界にはどんな種族がいたんだ？」

「人間族しかいなかつたよ。でも大体分かる。ドワーフは鍛治が得意でエルフは弓とか装飾とかの纖細なことが得意なんだろうで、おたがいの種族は仲が悪い。亜人や竜人についてはよくわからないけど……」

「人間族しかいないのにそこまで知つてるなら十分だ。説明の手間が省けるしな。ただし訂正するなら、仲が悪いのではなくそりが合わないってだけだ。好き嫌いは特はない。亜人というのとは外見はほとんど人間なんだが各所が違う。例えば手が長かつたり足が速かつたりなんかで、人間よりも寿命の長い長寿族なんかもいる。竜人族は外見は人間だが本質は竜である種族だ。彼らは自由に竜になることができるが、ほとんどの竜人はしない。どうやら人間の姿の方が楽らしくてな。寿命の長さは人間とドワーフが100年ほど、長寿続は200年ほど、エルフは500年、竜人族に至つては1000年以上生きる者もいる」

琢磨は1000年と聞いて固まつっていた。

「1000年も！？」

「そうだ、だからエルフ族や竜人族の知識は深く人間は及びつかないが、人間族に有つて彼らには無いものがある。何だかわかるか？ タクマ」

(俺たちに有つてエルフや竜人にはないもの。全く想像がつかない)
琢磨は首を横に振った。

「アシェル。お前はどうだ？」

「・・・分かりません、お師匠様」

「それはな、創造力だ。人間の寿命は長くない、しかしその分密度が濃いんだ。だから発明のほとんどは人間がする。まあ、実際に作るのは人間だつたり彼らだつたりするがな」

はつはつは、ガルムは笑いながらそう言った。

「さて、タクマ。種族に関して何か質問は？」

琢磨は少し考え、

「大丈夫」

と短く答えた。

「よし、あとは通貨と魔法に関してだな。魔法は明日に回すとして、今日は最後に通貨を教えておこう」

そう言うとガルムは懐から袋を取り出し、その中から何枚かのコインや直方体の金属の塊を取り出し、並べ始めた。

「これで全部だ。通貨は大陸共通であり安い方から教えるぞ。左から順に、銅貨・銅板・銀貨・銀板・金貨・金板・白金貨・白金板・キーヴル記念硬貨だ」

それから通貨の説明が行われ、2日目の安静日が過ぎていった。

本編はこれで終わりです

通貨は書くとそれだけで理解が追いつかないと思います（流離人も含めて）ので省略しました。

それでは、今話も整理してみましょ。」

自由自治都市について

- ・トップ：イシュリド総裁（竜人族）
 - ・場所：大陸中央部
 - ・蛇足：

都市にはギルドだけでなく各国の大使館や商業施設が数多くあります。ただし、都市のトップはイシュリドとなつております。

種族について

- ・人間族・亜人族・ドワーフ族・エルフ族・竜人族が存在します。
 - ・魔物は動物扱いで、種族ではありません。
 - ・平均寿命：竜人 エルフ 亜人 > ドワーフ 人間
 - ・特色：人間・寿命は短いので人生の密度が濃い。創造力に長ける。

ドワーフ：

豪快な性格で彼らの半分は戦士、半分は鍛冶師である。矜持を大切にする。

エルフ：

纖細な性格で寿命が長いので気楽に生きる。知識が深く、手先が器用なため、彼らの半分は弓矢を用いて戦い、半分は魔術に生きる。矜持を大切にする。

竜人：

寿命がとてもなく長いので、何事に対しても寛容に取る。過程や矜持よりも結果を取り、常に先のことを考えて行動する。俗世を厭う傾向が種族を通してある。

亜人：

種類が多いため省略。出てきたその時々に説明いたします

・蛇足：各種族の中は悪くないが、エルフとドワーフ、人間と竜人はそりが合わない。

（省略した）通貨について

（覚える必要はないです。ただ一応設定としてこうなっています）

- ・使用範囲：大陸全土
- ・貨幣種類：銅貨・銅板・銀貨・銀板・金貨・金板・白金貨・白金板・キーヴル記念硬貨
- ・価値：白金板1枚＝白金貨10枚
- 白金貨1枚＝金板10枚
- 金板1枚＝金貨10枚
- 金貨1枚＝銀板10枚
- 銀板1枚＝銀貨100枚
- 銀貨1枚＝銅板10枚
- 銅板1枚＝銅貨100枚
- 白金1枚＝金貨100枚＝銀貨10万枚＝銅貨1億枚

蛇足？：3人家族の一食：銅貨5枚

3人家族年収：銀貨12枚

3人家族支出（年）：銀貨8枚

3人家族税金（年）：銀貨2枚

蛇足？：青銅製の武具：銀貨1枚以下

鉄製の武具：銀貨2～3枚

蛇足？・記念硬貨：希少なキーヴル鉱石によって300年前に大陸平和記念に作られた

価値：白金板5枚（ただし収集家は最低白金板10枚で買
い取ってくれる）

#6（後書き）

琢磨がついにガルムに『テレました。

琢磨は最初、反抗期でしたが次第にガルムに心を開いていきます。
ガルムはそんな琢磨を愛息子の様に見ています。

「タクマ、悪いけど勉強会は昼からでいいか?」

ガルムは一緒に朝食を食べているタクマにそう言った。
タクマはEランクの魔物であるコカトリスの卵で作った目玉焼きを
飲み込んでから、

「別にいいけど、何かあるのか?」

ガルムは猛烈な勢いで胃に朝食を流し込み、口に食べ物を入れたま
ま、

「ああ、今思い出したんだが確か今日ギルドから応援が来るんだ。
だからその迎えと詳しい情報を教えとかなくちゃならないんだ」

同じく朝食を食べているアシェルは、

「お師匠様、口に物を入れたまま喋るなんて行儀が悪いですよ」

言っていることは正しいがアシェルの食べ方はとても汚く、二人は
(お前の食べ方のほうが行儀悪いわ!)
と思っていたが言つたところで直すことはないとわかつていたため、
口には出さなかつた。

こんこん

「お食事中失礼します。ガルム様、ギルド本部からお客様がいらし
てますわ」

ノックとともに部屋へ入つて来たのはアショルの姉であるコウである。

「ああ、今行く」

ガルムは壁にかけてあつたコートと壁に立てかけてある2本の剣を腰に提げると、机においてあつた袋をタクマに投げた。

「その袋にはギルドが作成した魔物図鑑が入つてゐる。イラスト付だからわかりやすいだろ? それを見て勉強しておけ。お前の強さはおそらくDランクからCランクだ。どの敵まで相手に出来てどの敵からは勝てないかを知識として知つておけ。自分の限界を知ることは悪いことじやない、諦める事は自分を強くする第一歩だ。それを覚えておけ」

ガルムはそいつで部屋から出て行つた。

ギルド受付へ行くと真面目そうな青年と、不真面目そうではあるが隙のない壮年の男がいた。青年は装飾こそ多いが実用性の高い剣を腰に下げ、壮年の男は何も持っていない。

(青年はプライドが高く、壮年の方はかなりの実力者だな)

「ガルム=グランベルツ殿でいらっしゃいますか?」

壮年の男はそう聞いてきた。

「ああ。そうだ。お前たちは?」

青年は一步前へ出で、

「私はアランク冒険者、アラン＝ルーティンと申します」

アランは一步下がる。今度は壮年の男が一步前へ出で、
教えていただけますかな?」

「同じくアランク冒険者、オルド＝ランディスと申すものです。この付近の森にて異常が発生したとお聞きしたのですが詳しい情報を教えていただけますか?」

アランとオルドの表情が一気に真剣なものへと変わる。

「それはいつのことですか?」

「前者2匹は3日前、後者の複数匹は2日前だ。その時は森全体を回って全滅させたが一応と思つてな」

「成る程、事態は把握しました。予想以上に事態は深刻なようですね。早速その森へ連れて行つて貰つてもよろしいですか?」

ガルムはうなずいて、3人はキーリエの森へと歩いた。

-----キーリエの森-----

「ところでガルム殿、腰の剣はなぜ紐で封印されていらっしゃるの

で？」

ガルムは自分の腰にある紐でぐるぐる巻きにされた剣を一瞥すると、「この剣は概念武装の剣でな。無意識で抜いて振るうと周りに尋常もない被害が出るのでな。それを防ぐためにこうやって抜けないようしている」

ほう。二人から思わず感嘆の声が漏れる。

「何の概念が籠められているのかお聞きしても？」

ガルムは別になんともないような様子で、

「別に構わんが知つたら後悔するか消されると思うが、それでもいいなら教えるが？」

二人の表情は固まつた。消される、誰が誰になんて聞くまでもないことだつた。ガルムはギルドに属している。計算高いギルド総裁がギルドランクの高いガルムのことについて知らないはずがない。ならば当然この剣の事も知つているのだろう。そうなると、消されるのは自分たちで、消すのはギルドの「裏」の者たちである。ギルドの後ろめたい部分すべて背負うく裏）。その実力はランクにも劣らないらしい。

（ガルム＝グランベルツ。ランクS以上の者でもほとんど持つてい
ない概念武装。一体？）

（好奇心は猫を殺す、か。一度戦つてみたいものだ。久々にこの槍
が疼くわ！）

不審そうな顔をするアランと、ヒルな笑顔を浮かべるオルド。

(わずかにプロだな。引き際を心得てる。これは期待できそうだ)

「 …… 」の場所で Bリンク と であつた場所は全てだ」

アランとオルドは今日何度もわからぬ衝撃を感じていた。

(何でここにはぽつかり穴が開いたように更地なんだ？何かの魔法か？しかしそれにしては回りの木々は何か余波を受けた様子もない。いつたいこの男は何をしたというのか ……)
やつとのことでオルドは声を絞りだした。

「 …… ありがとうございます。ここから先は全てギルドが受け継ぎます。ご協力感謝いたします」

ガルムはそんな二人を見てもただ事務的に、

「頼む」

そういうてガルムはタクマとアシヘルの待つギルド支部へと帰つていった。

——キーリエの町。ギルド支部——

「 よう。帰つたぞ～ 」

「 お帰りなさい、お師匠様 」「 お帰り、師匠 」

ガルムは一人の言葉を聞き、疲れていなかつたが疲れが癒された気分だつた。

(やっぱり弟子ってかわいいなあ)

「さて。昼飯も食つたことだし、最後の勉強会やるぞ。今日は魔法についてだ！」

ガルムは元氣よく言った。

「ま、そういうても教えることなんか殆ど無いがな。魔法の種類と魔法士のランクについて教えるのみだ。まず魔法は＜通常魔法＞＜召喚魔法＞＜空間魔法＞＜古代魔法＞の4種類に分かれる。通常魔法はさらに3種類に分かれる。まずは＜属性魔法＞だ。これは雷・水・炎・樹・地の5属性のことで、雷は水に強く、水は火に強く、炎は樹に強く、樹に地に強く、地は雷に強い。2つ目は＜光魔法＞。3つ目が＜闇魔法＞だ。闇魔法は属性魔法に強く、光魔法は闇魔法に強い」

ガルムはここで一悶々タクマを待つ。

「タクマ。理解したか？」

「大丈夫だ」

「次は召喚魔法についてだ。前提として魔法というのは精靈から力を借りるんだが、召喚魔法はその精靈を具現化させることが出来る。空間魔法は空間を捻じ曲げて瞬間移動したり相手の体自体を捻じ曲げることで破裂させることも出来る」

アシヒルはそのストレートな言い方に眉をひそめた。

「ずいぶんと強い魔法だな。対処方法はあるのか？」

「あることにはある。魔法による空間干渉を察知してすぐに避けることだ。しかしこれは慣れないとまず無理だから会わない事を祈つとけ。最後に古代魔法だが、今では使い手のいなくなつた魔法全般を指す。たとえば相手を一瞬で殺したり支配したりする魔法だ。蛇足として「禁忌魔法」というものもある。これは威力が高すぎるために使用が禁止された魔法のことで、属性魔法の格属性にも2～3種類の禁忌魔法が存在し、古代魔法の8割ほども禁忌魔法だ」

「最後に、魔法士自体にもランクがある。下から順に魔術士見習い、魔術士、魔法士、魔導師、魔極師の5段階だ。魔導師は賢者、魔極師は大賢者とも呼ばれる。上位2つのランクはギルドや各国から下賜される。別に特権は無いから名誉職つてことになるな」

「「コウお姉ちゃんは光魔法の魔導師なんだよ。すごいでしょう」

アシヒルは自分のことのように歎嘆した。

「殆どものは魔法士であり、魔導師は殆どいないんだ

タクマは感心したように

「へえ、それじゃあコウさんはすこいんだ。師匠はどうなんだ？」

ガルムは一瞬迷った顔をし、

「あ～。まーお前らには言つていいか。あんまり他の奴には言つた
よ」

アシュルは輝いた顔になつてはしゃぎだした

「お師匠様も、まさか魔導師だつたりするんですか？」

「・・・俺は通常魔法・空間魔法の魔極師だ」

二人は目を丸くして

「え？ 魔極師つて・・・魔法使いの一一番上の位ですか？」

「まあな。俺の弟子だから言つたんだ。言いふらさんでくれよ」

ガルムは頭をがりがり搔きながら、弟子たちに釘を刺しておいた。

「す、」「いじやないですか！ 何で黙つてるんですか！？」

「あのなあ。別に俺は望んでその地位を手に入れた訳でもないし、
田立ちたくもない」

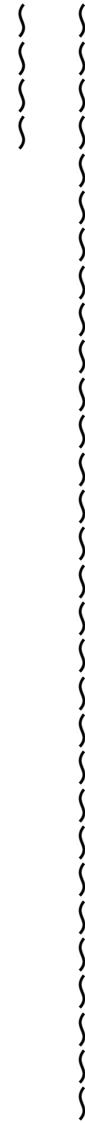
「師匠つてす、」「いんだな・・・」

ガルムは困つた風にしながらも微笑んでいた。

(この弟子たちが言いふらさないか心配だが、こいつらの尊敬の眼
差しを受けられたから善しとするか)

アシュルの騒がしい声が部屋に響いてガルムはそれに冷静に返し、

琢磨は淡々と話をする。最後の安靜田の夜はそつやつて更けていった。



本編はこれで終了です。また世界観の話も今話で終了となります。それではまた整理してみましょう。

魔法・全ての魔法は精靈から魔力を借り受けて発生をせる。

魔法の種類：<属性魔法><通常魔法><召喚魔法><空間魔法><古代魔法>

通常魔法：<属性魔法><光魔法><闇魔法>

- ・属性魔法の種類：雷・水・炎・樹・地
- ・属性魔法の相性：雷>水>炎>樹>地>雷
- ・光魔法：主に治癒魔法が多い
- ・闇魔法：主に攻撃魔法が多い
- ・通常魔法の相性：光魔法>闇魔法>属性魔法

召還魔法：精靈を具現化できる

- ・召還対象：小精靈・中精靈・大精靈・精靈王（右に行くほど召還は難しくなる）

空間魔法：空間に魔法を掛けることで空間を意のままに操る

- ・魔法例：瞬間移動・空間分断による物体破壊

・古代魔法：古代人が使用していた魔法。使えるものは殆どいない。

・魔法例：呪^{デス}殺魔^{チャーミー}法・強制支配等

魔法士：魔法を使用する者の名称。

・魔法士の数：

魔法のみを使用する者は殆どが魔法士、
武術+魔法を使用するものは魔術士が多く、総じて魔術士の方が多
い。
しかし魔法を専門に扱う魔法士の方を一般的には総称として呼んで
いる。

・称号：

ギルドや各団に下賜される称号は魔導師と魔極師のみで、
それ以下の称号は個人で名乗る為嘘をつく者も少なくない。

#7（後書き）

次回から本筋へと戻ります

次回予告：

ガルムと弟子たちのお買い物 i ノキーリエの町

琢磨の服もぼろぼろになつてますから異世界の服へモデルチェンジです。ついでに武器も購入予定、もちろんアシェルも一緒にお買い物します。

「はい。もう動き回っても大丈夫ですよ」

「そう光魔導士コウは琢磨に言った。

「やつた。やつと修行が受けられるー。」

琢磨はガツツポーズをしながらそう呟んだ。

その様子に微笑をもらしたコウはガルムのほうへ向き直り、

「ガルムさん、治ったといつても暫くはじきを上げなによつこして
ください。また悪化するかもせんから」

ガルムもそんな琢磨を横目で見て微笑みを零しながら、

「了解した。気をつけるとしよう。ほら、タクマ喜んでばかりいな
いでコウにきちんとお礼を言つておきなさい」

「あ、はい。ありがとうございます。コウさん」

「いえいえ、完治して私も嬉しいですし、これも仕事ですから」

コウはやつと並んで、一礼して部屋から出て行った。

「わい、タクマの怪我も治つたことだし今日は買い物に行こう」

琢磨とアシェルはキヨトンとした顔で、

「買い物?」「何を買つんですか?お師匠様」

「ん?お前らの装備に決まつてんだろ。まさかそんな軽装備で旅するのも思つてたのか?」

その通りだと思つてアシェルはあわてて、

「そ、そんなはず無いじゃないですか?」

二人は呆れ顔で、

(やつぱりか) (図星かよ・・・旅?)

「師匠!旅つて何だ?」

(そんな話聞いてないぞ?)

ガルムは首をかしげ、

「あれ?言つてなかつたっけ?これから俺とお前とアシェルで大陸中を回るんだよ。いわば社会勉強だな。そのついでにお前らを強くする。少なくともAランクぐらいには強くしてやるよ。そのためにはお前に合つた武具と長旅をしても大丈夫なくらい丈夫な防具がいる。今日はその買い物だ。わかつたらさつさと準備しろ」

「師匠、準備つて何をしたら良いんだ?」

今度はタクマが首を傾げて尋ねる。

「着替えろ」

そつ一言言つとガルムは部屋の外へ出て行つた。

―――武器屋―――

「まずは、タクマの武器だな。お前は剣でいいのか?ほかに得意な武器はあるか?」

「ない。剣だけしか使えない」

琢磨はフルフルと首を振る。

「わかつた。てな訳で剣を見せてくれ。ああ、ショートソードとロングソードだけでいい」

「大量にあるから右の扉の先にある鍛錬場で待つてくれ。すぐに持つて行つてやるよ」

店主は3人の左後ろにある扉を指差し、そして店の奥へと消えていった。

鍛錬場は広かつた。おそらく100人が剣を振り回してもまだ余裕があるのでなかろうか。

どうやら先客がいたらしく、4~5グループがそれぞれの得物を振り回し感触を確かめていた。

ガルムたちは彼らから十分距離をとつた一角に陣取つて店主を待つことにした。

暫くすると入つてきた扉とは逆の扉から50本以上はある剣を持つ

て店主が向かってきた。

店主はそれら全てを地面に置くと、

「これで全部だ。全部で70本ほどだな」

ガルムはそれらの内の2~3本を手に取って眺める。

「相変わらず仕事がいいな。タクマ、この中から自分に合った剣を2本選び出せ。自分が納得いくまで振り続けて探すんだ。その2本がこれからお前の命を支える大事なものだ。絶対に手を抜くなよ!」

「はい!師匠!」

続けてガルムは持っていた剣を置くとアシェルの方を向く。

「次はお前のダガーとナイフだな。よし親父、案内してくれ」

「ああ、じつちだ。一人ともついて来い」

-----SIDEアシェル-----

廊下は薄暗くひんやりとしていた。

廊下を進み、今度は階段を下つていった。

ようやく着いた所にはいくつもの扉があつた。

店主はそのうちの1つの扉の鍵を開け、重苦しい音を響き渡らせながら扉を開いた。

「ここにあるので全部だ。存分に選んでくれ、俺は先に上がってるぞ」

店主はそういって出て行った。ガルムは軽く手を上げ、

「ああ、ありがとな」

アシェルは実用さを追求した芸術的なダガーやナイフに顔をほころばせていた。

そんなアシェルに、ガルムは真剣な様子で、

「アシェル、ダガーやナイフにある欠点を言つてみろ」

アシェルは慌ててガルムへ向き直り、顔を引き締める。そして

「はい。射程が短いことです。またそのため力負けをしやすくなります！」

「その通りださらにお前は女というハンデも常に持つていて。これはどうやっても覆せないことだ。わかるか？」

アシェルは、それを実感しているのだろう。俯いて歯を食いしばり、

「はい・・・」

そう呟いた。

そんなアシェルにガルムは、

「顔を上げないか！この馬鹿が！」

急な怒声にアシェルはパッと顔を上げる。

「女である事を恥じて一体お前になんの得がある！恥じて悲しみ悔しがる暇があるなら何故そのハンデを埋めようとしない！アシェル！力というハンデを埋めるにはどうすればいいんだ、お前は何をするべきいいんだ。さあ答えてみる！」

「は、はい！力を加えやすく技を掛けやすい武器を使います。更には私に出来る最高の動きを身につけることでハンデを埋められます！」

ガルムは小さく頷き、

「その通りだ。どんな時でもその時に出来る最高の動きをとれ。それこそが冒険者としての基礎であり、境地もある。片時もそれを忘れるな」

「はい！」

「そしてこれからここにある大量の武器の中での、お前の最高の武器を選び出す。心して掛かれ！」

「はい！お師匠様！」

アシェルはこのとき、未熟な自分を嘆き、偉大な師匠を誇っていた。アシェルは流れそうになっていた涙をふき取って、一本一本感触を確かめていった。

琢磨はよつやく10本まで絞込んでいた。そこへ3人組の男たちがやってきて、

「おいおい、お前みたいな子供がここに来るなんてまだ早いぜ。家に帰つて木の枝でも振つてな」

（昔の俺ならすぐ突つかつてただろうな。でも今は師匠の教え通り剣を選ぼう）

琢磨は彼らの言葉を無視して剣を振り続けた。それが癪に障つたのだろう。彼らは琢磨の周りの剣をあちこちへ投げ始めた。

これには流石に琢磨も怒り、制止しようと口を開きかけたそのとき、

「やめ「貴様らわしの剣に何してやがるー。」

店主の怒声が鍛錬場に轟いた。

そのあまりの大きさに、男たちは竦み上がった。
しかし人数差があつたため、

「うるせえ！これは俺たちの問題だ！年寄りは引っ込んでろー！」

「じゃかましいわー！」

店主は一番近くにいた男の頬を殴り飛ばし、壁に叩きつけた。男は2・3回痙攣した後、ピクリとも動かなくなつた。それを見て仲間の男は、

「か、囲めー」「お、おつー！」

2人は投げようとしていた剣を鞘から抜いて構えた。店主は真剣な様子でそれを見ながら、

「坊主、こいつらの持つとる剣はお前の目に適つた剣か？」

「あ、ああ。そうだけど」

「そりが、じゃあ折るわけにはいかねえな」

二人の男は琢磨の存在を思い出し、

「そ、そうだ。元はといえばお前が悪いんだ。おい！ その剣折っちゃえ！」 「ああ！」

2人は地面に叩きつけるため剣を振りかぶると、その剣を振り……降ろせなかつた。

店主は一瞬で2人の腹に拳と足をめり込ませ、剣を取り戻したのだ。そのうち1本を琢磨に渡すと、流れるような動作でそれを構えて尋常ではない殺氣を放つ。

「貴様らを殺してやりたいのはやまやまだが、鍛錬場を血で染めるわけにはいかねえ。しかし！ このまま貴様らを見ていくとつい殺しちまう。今すぐそこで伸びてる男を連れて出て行け！」

2人の男は腹を抑えながら伸びた男を引き摺つて店から出て行つた。入れ違いにガルムとアシェルが入つてきた。ガルムは哀れみの目で出て行つた3人の男たちを見送ると、

「可哀相に、ランクSの制裁を受けたのか……」

この言葉にぎょっとしたのは琢磨とアシェル、それに一部始終を見ていた他の客たちだ。

店主は恥ずかしげに笑っていた。

「元、さ。今じゃただの鍛冶士だ」

「ただの鍛冶士はあんな殺氣は放たねえよ

ガルムはクッククと笑いながらそういった。

「わかつているなら入って来いよ」

「状況もわからず殺氣のある状況に飛び込めるかよ。俺は丸腰だし弟子も連れてんだよ」

「お前さんは武器なんてなくともわしにだって勝てるだろ！」

「まつまつま。さてタクマ、剣は選んだか？」

琢磨は2本を持ち上げガルムに見せた。

「ああ。」の一本に決めた

「親父。じゃあその一本とこのダガー3本とナイフ2本買つとするよ。幾らだ？」

店主はそれらの武器を一通り見ると、

「金板一枚だ」

「えー？」 「き、金板一枚！？」

琢磨とアシェルの二人はぎょっとした顔になった。
しかしガルムは平然と、

「ま、そんなもんか。ほら受け取れ」

袋から取り出した金板を店主に投げ渡した。
店主はにこやかな顔で受け取り、

「毎度あり～」

「おい、お前ら何ぼうつとしてるんだ。せっせと行くぞ。防具も買
わなきやならねえんだから」

「あ、ああ」「はい・・・」

3人は武器を買いそろえ、武器屋を後にした。

#8 お買い物とキーリエの町（後書き）

名前のない店主、の割にはかなりのつわものですね。
そもそも、つわものの方が引退後は静かに暮らす気がします。
気がするだけで実際どうなのかは知りませんが。

ダガーとナイフについて

ダガー＝大きいナイフ全般のことと力を入れやすい
ナイフ＝小さいナイフ全般のことと技をかけやすい

次回：

防具購入

これしか言いようがないです。

「よし、次は防具を揃えるぞー」

ガルムは人気防具店を通り越し、ある店の前で止まつた。
店頭には何も置かれず看板もない。

知らない人が見ればただの民家にしか見えない。

「お師匠様。ここで買つんですか？」

「ああ、ここは俺の知り合いの店でな。腕もよくて信用も出来る。
個人経営で客を選ぶ奴は店頭には何も置かずにただ客が来るのを待
つんだ。この店はそんな店のひとつだ」

「成る程。勉強になります」

ガルムはアシエルと琢磨を引きつれ店の中へと入る。

「お~い。ヌミヒール。来てやつたぞ」

すると部屋の明かりがパツとついて店の奥から1人の女性が出でき
た。

女性は20代にも40代にも見え、不思議な雰囲気を醸し出して
いた。

「誰かと思えばガルムさんじゃないですか。そちらのお子さん達は
どちら様で？あ、もしかしてガルムさんのお子さんですか？」

ガルムはそんなヌミヒールの言葉に苦笑し、

「俺は生涯一人身だよ。」
「いづらは俺の新しい弟子達だ」

「あらあら。そうだつたんですか。はじめまして、私は竜人族のヌ
ミエルよ。年齢はヒ・リ・ツ」

「俺の名前は琢磨です」「私の名前はアシェルです」

「初々しくて可憐いわね。で、今日は何の御用?」

「琢磨の防具を、金の心配抜きで最高の物を見繕つて欲しい」

その言葉にヌミエルは目を見開き、そして目を細めた。

「ガルムさん、まさか・・・」

ガルムはまじめな顔で、

「ああ。これから一度ギルド本部へ帰還し、それから俺達3人で大
陸を回る」

ヌミエルは何かを言おうと口を開き、首を横に振つてため息をつい
た。

「いろいろ言おうと思つたけどやめたわ。私に出来るのはこの子の
防具を見繕つことだけね」

ガルムは苦笑して申し訳なさそうに、「

「すまんな」

「気にしないで。ガルムさんらしいもの。でもそれならアシールちゃんはどうするの？こんな装備じや旅の途中で死んじゃうわよ？」

アシールはその言葉に目を見開いた。

「わかつてる。だがこの服はこいつの姉が作ったものらしくてな。服から防御力を擧げるのは断念した。その代わり、これからノランダルのところへ行つて護石を作つてくることにした」

「成る程、ノランダルとあなたが作つた護石なら安心ね。じゃあなたたちが帰つてくれることには見繕つておくわ」

ガルムは頷くと、

「頼む。タクマ、ヌミエルはさつきも言つたとおり腕もよくて信用も置ける。何か聞かれたら本当のことを教え、正確に答える。いいな！」

「わかつた」

ガルムは地元民であるアシールでさえ知らない路地の中にある道具屋に入った。

入つてみるとそこには様々な物が陳列してあり、魔物の玉や希少な植物などもあつた。

中は1m先も見渡せないほど真っ暗だったがガルムはその中をどんどん奥へ奥へと進んでいく。

(二)「怖い。何で明かりがないの?早く用事済ませて帰りたいよ
う」

アシエルはガルムの服の裾を掴みながら震えていた。

「これはこれはガルム様ではありませんか。この卑しい私めに何の御用で?」

低くしづがれたその声は右の暗闇から聞こえてきた。
しかしがるムは平然とした様子で、

「そこにいたのか、ノランドル。仕事だ。姿を現せ」

そういうと黒いローブを羽織つた男が何故か左の暗闇の中から現れた。

ガルムは後ろを振り返り、その男と向き合つ。

「どういった内容でござりますかな?」

「護石を作ってくれ、最高級のな」

「後ろのお嬢さんのためですね。娘さんですか?」

ガルムは苦笑して、

「お前もやつこいつのか。こいつは俺の弟子で、アシエルって名だ」

「それでございましたか。これは失礼を、アシエル嬢。してガルム様、護石の触媒は一体なんでございましょう?」

ガルムは笑みを消し、アシェルのほうを見ると、

「アシェル、お前の掛けている首飾りを貸してくれ。それを護石の触媒とする」

「え？ は、はい」

アシェルは胸元に入れていた白い玉の首飾りを外すとノランドルに渡した。

「ノランドル、それが何かわかるな？」

ノランドルの手はこれでもかといつほどに震えていた。そして震えた声で、

「ええ、分かります。分かりますとも。分からぬはずがありません。なぜこれがここに？ これは、これは光龍の宝玉ですね。光龍の瞳から特殊な技術を持つて魔力だけを抽出した物。まさか実在していたとは・・・」

ノランドルは震えを押さえ込み、目が隠れるほどに前に垂れていた髪を後ろで一つに括つて背筋を伸ばした。身長は意外と高く、2mはあるだろう。声は依然としてしわがれた低い声だが威厳が籠っていた。

「ガルム様。これほどの物を使った護石作りに、私を使って頂いたことを心から感謝いたします。さて、これに何を加えればよろしいのでしょうか？」

ガルムはビニからか小さな箱を一つ取り出してノランドルに投げ渡した。

「それらの中には闇龍と属龍の宝玉がそれぞれ入ってる。この3つを合成し、2つ分ける」

ノランドルは驚かず坦々と、

「了解いたしました。作業場へ案内いたします。どうぞこちらへ」

ガルムとノランドルの後を追おうとしたアシェルは、

「お前はここで待つてろ。作業場にいたら危険だ」

およそ30分後、珍しく疲れた様子のガルムと今にも倒れそうなノランドルが出てきた。

ガルムは2つになった首飾りの内の1つをアシェルに返した。
大きさは変わっていないそれは、付けてみると淡い光と心地よい温かみを放っているのが分かつた。

ガルムは倒れているノランドルのそばへ行き、

「代金はここに置いとくぞ。しっかり休めよ」

そう言つとガルムはアシェルをつれて店の外へ出た。

防具屋へ戻ると、

「あー、お帰りなさー。お弟子さんの服は見繕つてあげたわよ」

そう言わされたので2人は琢磨の姿を探すと、青を基調とした服に青紫色のマントを羽織つていた。

「どうだ? 師匠、アシヒル」

「ああ、似合つてゐるよ」「タクマ、すくなく格好いいよー。」

タクマは照れながら、

「あつがとひ

といつた。

アシヒルは思ひ出したよう

「あ、そつそつ。一応アシヒルちゃんのマントも作つておこたわよ

そういうて取り出したのは、真紅のマントである。
これはアシヒルの服が赤を基調としているからだらう。

「わあ、すい。ありがとアシヒルさん

「つふふ、気にしないでいいわよ」

「すまんな、氣を使つてもらつて。これは代金だ」

そう言つて喜んでいる2人に見えないようガルムはアシヒルに、

そつと白金板を一枚渡した。

ヌミエルはそれを見て、

「あすきるわよ」

と困ったように小声で言った。

ガルムは苦笑いで、

「俺があの服やマントに込められた魔法に気付かないとでも思つたか？そんな訳ないだろ。これは正当な代金だよ。お前もプロなら受け取れ」

ヌミエルは苦笑して、

「ガルムさんには勝てないわね。それじゃ、ありがたく貰つておくわ。あの二人のこと、きっと強くしてね。約束よ？」

「俺を誰だと思ってやがる」

「はは、確かにそうね。じゃあこれだけは言わせて、御武運を」

「ああ。ありがとさん。おい！お前たち。そろそろ行くぞ」

「あ、はい」「わかつた、今行く」

アシエールと琢磨はすぐにガルムのそばに来て、ヌミエルに礼を言った。ヌミエルはそれを受け取り、

3人は防具屋をして、ギルドに戻った。そして一夜明け、旅立ちの日となつた。

#9 (後書き)

これで旅の用意は全て終わりました。
次話、3人はキーリ工の町を出ます。

ご愛読ありがとうございます♪
感想をお待ちしております^ ^

#10 旅立ちの日（前書き）

第一章
終章

#10 旅立ちの日

朝日が昇ってきた。もうすぐで暑い夏がやってくるが、まだキーリエの町の朝は肌寒く感じる程冷え込んでいる。昼は活気に満ちている町も今は店員が開店準備を始めるのみである。そんな時間帯に、ギルド前にて朝日を見つめる2人の男女がいた。

1人は青い服に青紫色のマントを羽織る琢磨。

腰には2本の剣を提げ、腕を組んで静かにたたずんでいる。

1人は赤い服に深紅のマントを羽織るアシェル。

2本のダガーを腰の後ろで交差させるように提げ、ニコニコと笑顔を浮かべてたたずんでいる。

ザツザツザツザツ

足音が聞こえる。

2人がギルドの方を振り返ると、

黒の服を身に纏い、漆黒のマントを羽織る1人の男の姿があった。2本の剣を提げ、その内一本は紐で固く結ばれていて抜けるようには見えなかつた。

彼の名はガルム、ひつそりと旅を続ける隠者。

彼の名はガルム、後に大きな災いを降り注ぐ悪魔。

彼の名はガルム、後に暗黒の世界に光を注ぐ天使。

彼の名はガルム、誰の敵でも味方でもない傍観者。

彼の名はガルム、最強を冠しながらも興味のない冒険者。

しかし、

今、それを知る者は誰もいない。

今、それを語れるものはいない。

今、その歩みを止める者は誰もいない

ガルムは2人の顔を眺めると、叫ぶでも呟くでもなく、

「まあ行くぞ。これからお前たちにこの世界を見せてやる。教えはしない、学べ。伝えはしない、感じろ。連れて行きはしない、ついて来い。望むのならば、真理を見せてやる」

そう言うとガルムは歩きだし、その後を未熟な一人の弟子たちは必死に追いかけてゆく。

それを見送る者は誰もいない。ただ朝日が彼らを照らすのみである。

#10 旅立ちの日（後書き）

これで第1章が終わり第2章へと移っていきます。
題を付けるならば

第1章：旅立ち

第2章：世界へ

つて所でしょう。

第2章は一人の弟子たちの成長物語となることでしょう。

追記・設定資料を別小説枠で追加しました。

ご愛読ありがとうござむく
感想お待ちしております^ ^

#1-1世界へ（前書き）

第2章
世界編

キーリエの町を旅立つて2ヶ月。

ガルム・琢磨・アシェルの三人は、

シャルベ王国と自由自治都市を結ぶ関所のあるルードリッヒ侯爵領にようやく辿り着いた。

行商人や冒険者が多く行き来するため、賑わいはキーリエの町とは比べ物にならない。

「向こうに見える馬鹿でかい門の様な建物が関所だ。あれの向こう側が自由自治都市だな」

琢磨とアシェルは初めて見るその建物に口を空けて呆けている。
そんな二人を見てガルムは、

「気になるなら宿を取る前に見に行くか？陽が沈むまでにまだ時間はあるし。どうする？」

「休みたい、ちゃんとしたベッドで」「私も安心して眠りたいです
二人は道中の特訓を思い出していた・・・。

(修行と称して朝起きたらBランクの魔物しかない森に手足を縛られた状態で放置され、毒の耐性を付けるためと毒の沼の中で1週間生活させられ・・・)

(私の苦手な触手を持つ魔物数百体がいる洞窟に閉じ込められて、脱出したらそのままワイバーンの卵取つて来ないならもう一回閉じ込めるといわれ・・・)

(（そのうえ寝る時は師匠（お師匠様）の作った氷の針の上で寝かされた。これで、これでやっと安心してぐっすりと眠れる…）

「あれ？ 師匠？ 師匠じゃないですか！」

三人は振り向くと道を歩く人たちが道を空け、そこを4頭の馬が引く豪華な馬車がこちらに向かつて来た。

降りてきたのは身長190cm程で顔立ちの整つた30代の男だ。それを見て、前を歩いていた騎士は慌てて、

「ー」、侯爵様！ 如何なさいました。む？ 誰だ貴様らはー！ こちらはナルディ＝ルードリッヒ侯爵様であらせられるぞ！

ガルム達三人を曲者と思ったのか、その騎士は槍を向けてきた。それを見たナルディは、

「構わぬ。こちらの御方は私の槍と魔法の師匠だ。今すぐその槍を收めよ」

その言葉に騎士はしばたかせていた。

「え？ あ？ ・・え？」

「もう一度言づべ。この御方は私にとって大切な方だ。騎士キースよ。その槍を收めよ」

「はー。そつとは知らず、申し訳ございませんー」

騎士キースが頭を深く下げるのを、ガルムは手で制した。

「気にしなさんな。で、お前は何の用だよ」

「こんな人目の多い所で話すのも何なんで私の屋敷に来ていただけませんか？荷物を持つてるとこを見るとまだ宿を取つておられないのでしょう？」。たゞ、お連れの方もどうぞ馬車へ

周りを見ると人混みが出来てあり、確かに親密に話すことなど出来ない状況だった。

ナルディは三人を馬車に押しこむと、関所から少し離れた所にある立派な屋敷へと向かつた。

「師匠。」この人、師匠のこと師匠って言つたけど・・・

ナルディはその言葉を聞いて嬉しそうにガルムに尋ねる。

「まさかガルム師匠。」この子達は新しい弟子達ですか？」

ガルムは、

「そうだ。一応お前の弟弟弟子ってことになるな」

ふわふわの座席にふんぞり返つてそう答えた。

「おお、僕にも初めての弟弟弟子が出来たんですね！初めまして、僕はナルディ＝ルードリッヒ。一応ルードリッヒ家の当主を務めています」

「初めまして、琢磨です」

「初めまして、アシヒルです。・・・あのう、一つお聞きしてもよろしいですか？」

ナルディは微笑みながら、

「いいよ。何でも聞いて？」

アシヒルは美形のナルディの微笑みを見てついに頬に朱が差す。

「あ、はい。ありがとうございます。ナルディさんはおいくつなんですか？」

「君の田から見ていくつに見えるんだい？」

アシヒルは質問を質問で返されるとせ思つておひく、

「えつ・・・と。28歳ぐらゐですか？」

「はつはつは。そんなに若く見えるかい。これでも38だよ」

「ええつー。そんなにー?あ、すみません」

「はつはつは。気にしなくてもいいよ」

馬車が止まつた。どうやら屋敷に着いたようだ。

「着いたよつだね。いつかだよ。つこて来てね

ナルディは一足先に馬車を降りると屋敷の方へ向つて行つた。

3m程の両開きの扉を開けると、中はホールになつており上にはシ

ヤンテリアも呑つてある。

「凄いな、ここは。広くて温かみがある」

「褒めて下さつてありがとうございます。タクマ様」

そう答えたのは、巨大な階段の横に控えていた老執事である。

（あれ？俺この人に名前を言つたっけ？）

ガルムはこの老執事に軽く手を上げ、

「おう。久しぶりだな。あれから元氣でやつてたか？」

「これはこれはガルム様。この老骨なんかに氣を使って頂きありがとうございます。そちらのアシェル様も長旅お疲れ様でした。湯浴みの準備が出来ておりますが如何なさいますか？」

（え？私名前言つたっけ？それに何で湯浴みしたいって分かるの？もしかして私臭い？）

アシェルは自分の匂いを確かめる。

そんなアシェルを見てガルムは、

「相変わらず情報も早いし、気も利いてるな」

老執事は軽く頭を下げる、

「それが仕事でございますので」

「アシル。お前は別に臭くねえよ。ただこの執事さんは、少なくともこの町全てのことを把握してるんだ。じつやつとかは知らんがな。だからきっと外での俺たちの会話も全て耳に入ってるんだろうよ」

「お褒めに預かり光栄でござります」

そこに室内着に着替えたナルディがやつてきた。

「コルド、この方たちをこの屋敷に泊めたいんだが・・・」

「既に部屋の準備とベッドメイキングを完了させております。食事をなさるなら10分もあればすべて用意いたします」

「じつやつひの老執事の如きはコルドとこいつだ。

「流石だな。ありがと」

「生まれた時から坊ちゃんを見ております故、行動はすべてお見通しですぞ」

「ふおつふおつふお」とコルドは笑った。

「じゃあ、お言葉に甘えるか。アシルは湯浴みして来い。琢磨はどうする?」

そう言われて、アシルはメイドとともに湯浴み場所へと向かった。

「おじいさんにとって良いか?」

「別にかまわんぞ」

そう言うと、ガルム・琢磨・ナルディは来賓室の椅子に座った。

「ナルディさん。師匠とは何時出会つたんだ？」

「僕が8歳の時かな。僕は風と水と地の魔導師なんだけど、当時は風を専門に国立図書館に籠もつて勉強していたんだ。ある時、本の中で知らない単語があつたんで司書の人に尋ねたんだけど誰もわからなくてね。偶々近くの席ですらすらと古代語の本を読んでだから、勇気を出して尋ねたんだ。そこからほほ毎日いろんな単語を教えてもらつてね。風の魔法を実際に見せて教えてくれたこともあつた。でも僕は風の魔法以外何の特技もなかつた。でもそれじや駄目だつてガルム師匠は僕に槍も教えてくれたんだ。当時は有難迷惑だつたけどね。いまじゃ武闘大会でも優勝できるほど強くなつたよ」

「やっぱり凄いな、師匠は。ところで師匠。武闘大会つてなんだ？」

ナルディの昔話をガルムは鼻で笑つて、

「はん。有難迷惑なもんか。泣きながら、父親を見返すんだ！つて俺に教えを請うた癖によく言うぜ。それから武闘大会つてのは一ヶ月に一回各国で開かれる大会のことだ。その大会では武器も魔法も使い放題、殺すのは無しだがな。そして一年を総合してもつとも強かつた武人4人が自由自治都市で行われる大陸大会でリーグ戦を行つて大陸最強を決めるんだ。こいつは俺が師事してやつた次の年の大会で「最強」の名を冠したはずだ」

「そんな大会があるのか。なあ師匠。今の俺が出たらどれぐらいまで行けるんだ？」

ガルムはしばらへ考え込み、

「やうだな。準決勝ぐらには進めるんじゃないか?だが優勝は絶対無理だな。断言しておいてやる」

「タクマ君はそんなに強いんですか?」

「弱くはない。こいつのセンスは大したもんだ。相手の射程を正確に把握する事が出来るから避けるのもうまい。あとは経験を積むだけだな。俺が育て上げたらギルドランクSかそれ以上もあり得るってレベルだな」

「ほひ、それは凄いですね。ならアショルちゃんはどうです?」

「あいつはダガ を使うためかバランス感覚が非常によく、女の身体的特徴をうまく掴んで戦っている。だがあいつの心には復讐心があるからな。今まではランクSすら微妙だな。ただ、もし復讐心がなくなつたならば、こいつと同じぐらいの所まで行けるだろつ」

「復讐ですか・・・それを思つたことは幸運なことに一度もありませんから俺が言つべき事じやありませんが、虚しいものですね」

「そうだな。しかし人は変わる。お前が純粹無垢な子供からこんな軽薄な男に変わつたよ。高慢だつたこのタクマがかわいくなつたよ」

「そつこつてガルムは琢磨の頭をポンポンと叩く。

琢磨はそれを恥ずかしく思つてガルムの手を払いのけた。

「はつはつは。落ち着いたって言つて欲しいですね。・・・おつと
アシェルちゃんが帰ってきたようですね」

「ほらタクマ。お前も湯浴みして来い

「師匠は行かないのか?」

ガルムはニヤニヤしながら、

「なんだ?一緒に入つてほしいのか?子供だなあタクマは

その言葉にムツとしてタクマは何か言い返そつとしたがなんの言葉
も思い浮かばなかつた。

「はつはつは。そうむきになるな。冗談だよ、冗談。俺は毎日水の
魔法を使って体洗つてたから入る必要がないんだ。だから一人で入
つておいで。もしどうしても一緒に入つて欲しいなら、一緒に入つ
てやるけどどうする?」

琢磨はボンと顔を真つ赤にするとコルドに案内されて湯浴みへと行
つた。

その後、ガルム・アシェル・ナルディの三人で他愛もない話をして、
タクマが帰つてくるのを待つた。

琢磨が帰つてくると、四人はコルドがいつの間にか指示して準備し
てくれた豪華な食事を食べた。その後、ガルムに割与えられた部屋
にて、

「ガルム師匠。師匠たちはこれからどうするので?」

「一度ギルド本部へ帰還する。そこでこいつらのギルド登録を済ま

せて大陸を回る

「お師匠様。『ここひつひ』って、私は登録済ませてますよっ。」

「お前は結構な頻度で上位ランクのやつと組んで依頼をやつていたらしいな。だからお前の眞の実力を測るために再登録させる。何、俺がこの2ヶ月育ててやつたんだ。Jランクぐらうにはすぐに行くだろ。いかなければ・・・特訓量増加だな」

アシェルは不満そうに、

「ええ、理不尽だ」

それに対し琢磨は、

「かまいませんよ、俺は。強くなれるなら」

(頑張れ弟弟子達よ。この人の増加量は2倍とかつてレベルじゃないぞ・・・)

ナルディはひそかに一人の安否を祈っていた。

「でもそうなると、アシェルちゃんはともかく琢磨君は関所を通過できないんじやあ・・・」

琢磨は首をかしげて尋ねた。

「何でだ?」

ナルディは琢磨の方を向いて説明した。

「関所はきちんとした身分証明を出来る人しか出入りをさせてくれないんだよ」

ガルムは懐からラチナ色のギルドカードを出して机に置いた。

「これがあれば行けるぞ」

ナルディは納得した様子で、

「確かにそれがあれば二人ぐらいどうしたことありますね。一応こっちでも裏から手を回しましょうか?」

「別にいらぬえよ。もし無理なら困るのはあのジジイだ。そうなればあいつが手を回すだろ?」

「ああ、そう言えば本部に寄るんでしたね。総裁に呼ばれたんですか?」

「いや、ただ色々報告したいことがあってな。そっちには関係ない話だ、気にすんな」

「そうしますよ。今日はもう遅い。アシェルちゃんやタクマ君もお疲れのようですしあつお休みになさつてはいかがですか?」

一人は船を漕いでいた。
そんな一人にはガルムは、

「おー! タクマ! アシェル! こんなところで寝るな。自分たちの部屋で寝ろ。ほら、行け!」

一人はふらつきながら部屋に向かった。

ガルムはギルドカードを懐に戻し、
真剣な様子でナルディに声をかける。

「ナルディ、最近各国の上の様子がおかしい。一応気を付けとけ」
ナルディも真剣な様子で、

「お気づきでしたか。僕もそれに気付きました、ガルム師匠がいる
と聞きましたからこうして話をしようと思つて近づきました。今こ
ちらが確認しているのはシャルベ王国の貴族派、クラリー王国の数
人の司教のグループ、ギリウス帝国全体、更にはハルナ商連副議長
のターナーの一派です。どうか道中お気をつけて下さい。何かお手
伝いできることがあれば遠慮なく言つて下さい。必ず力になります」

「お前は俺たちのことよりも自分のこと、自分の民たちのことを氣
にしどけ。それがお前に課せられた義務だ。何があつても民を守れ、
いいな？」

「・・・はい。師匠」

こつしてガルム達三人の夜は更けていった。

#1-1世界へ（後書き）

長い・・・」んなに長くする予定はなかつたwww
が、書いてるうちに長くなつたんだから仕方ないね。

訂正（12／11）：

申し訳ありませんでした！！

ナルディは『風の魔導師』ですが、

そもそも六属性に風が含まれていませんでした。

これは『ナルディは風』と流離人は考えていましたが、属性に関する設定構想時、風を思い浮かばなかつたために属性に含まれなかつた物と思われます。

ですので、『風』魔法は『古代魔法』の一つとして、正式名称を『天空』魔法といたします。

全ては完全にひがみの不手際でややこしくなつてしまいましました。

重ねてお詫び申し上げます=（・・）=

「愛読ありがとうござります」
感想お待ちしております^ ^

・・・キン、キン、キン、キイン・・・

中庭から金属のぶつかり合ひの音がある。

(師匠とアシェルが二ヶ用間恒例になつてゐる早朝訓練でもやつてゐるのかな)

琢磨はそう思いながら、ふかふかのベッドで寝返りを打つ。

(俺が師匠に叩き起されたなことは、もう少し寝てもいいことなんだらうな)

琢磨はまどろみの中考えていた。

(前まではまだ瞬間に剣の柄で殴られたもんなあ。「まだうんざ時に背後に敵が来たらどうする!」って。寝ないでフラフラな時の方が危ない氣もするけど・・・まあいいや。寝みつ)

琢磨は一度寝るために寝やすい態勢になる。

キン、キン、キン・・・ガキイッ、キン・・・

(長いな。アシェルの奴。俺と同じ十七歳なのに俺はアシェルにも負ける。経験が少ないからかな。でも俺だって四歳の頃から容赦ないじいちゃんに育て上げられたんだ。強くなりたいって思いなら誰にも負けない。誰にも負けたくないんだ。・・・あんなこと一度と起こらないようにするために!)

琢磨はまだ寝ていたいという気持ちを振り払い起きた。手早く着替え、愛用している一本の剣を手に、『えられた部屋から出て中庭へ向かう。

早朝訓練を見てイメージトレーニングをするためだ。これは琢磨の祖父から習つたことだつた。

しかし中庭で訓練をしていたのはアシェルではなくナルディだつた。

「ハアー・セヨイ！」

ナルディはリーチの長い槍を最大限に使ってガルムの剣の射程外から攻撃していた。

しかしガルムはそれを剣で流している。どうやら攻撃をする気はないようだ。

ナルディは大粒の汗を流し肩で息をしているのに対してガルムは息も乱れてない。

「まらほりどうした？早く攻撃して来いよ。演武はいいからよ」

「タアー！はあ、つはあ。これでも演武じゃなくて攻撃してるつもりですけどね・・・ソコー！」

ナルディは完全に振りはらつた槍を体のひねりと腕の力で高速の突きを放つた。しかしこれもガルムは左足を半歩下げて紙一重で見切つていた。

「そなのか？久しぶりの手合させだから演武かと思つたぞ。これならタクマやアシェルでもかわせるな。お前最近素振りしてないだろ」

俺には無理だ、タクマは思っていた。ナルディの振るう槍は速さ・軌道とも変幻自在であり、突きは残像まで見えるほどだ。何度もガルムが高速で剣を振つて見せてくれたことがあつたがここまで速くはなかつた。琢磨はその十メートルほど離れて座つて見ているアシエルに近付いていく。

アシエルはそれに気付きながらも、勝負を片時も見逃さないようにするために顔はそのまままで、

「おはよー」

「おはよう、これいつからやつてるんだ?」

「一時間前からりよ。そして一時間前から今までずっとこんな調子

キイン、ガキ、ギイン、ギイン、ギイイン……
剣と槍がぶつかって出来る音が鈍くなつてきた。
どうやら勝負がつきそうだ。

ガキイイイン

両者は大きく距離を取つた。
いや、ガルムが体を浮かせてナルディの槍に込めた力を使い、わざと吹つ飛んで下がつたのだ。

「タクマも起きてきたしお開きにしようつか。お前の最高の攻撃を見せてみる」

その言葉にナルディは一度肩に込めていた力を抜き一回深呼吸した。
すう、はあ。すう、はあ。

「行きます」

ズン！

ナルディが足に込めて地面を蹴った音が響く。

「・・・残像か。それで？」

ガルムの周りに八人の残像が、その全てがガルムに高速の十連突きを放つ。

「八連突き？」

「違う、十連だ！」

(タクマが当たりだな。よく見えてるな)
ガルムはその攻撃を冷静に見つめ、

「上が空いてるぞ！」

ガルムは跳躍した。その瞬間！

八人の残像が元いた八人の上に現れ、さらにガルムの頭上にもう一人が現れた。

頭上の一人の槍が白く輝き、ガルムの頭上から突きを放つ。

「<奥義・夢幻奏舞>」

突きがガルムに触れた瞬間、辺りに衝撃が走り、琢磨とアシェルは後ろへ飛び退いた。

「どうなつたんだ！？」

砂埃が晴れた先には、地面に槍を刺すナルディと彼の首筋に剣を当てるガルムの姿があつた。

「狙いは良かった。見切られなければ良し。見切られても上への退路を作ることでそこへ誘導。空中では身動きは取れないからそこへ最高の一撃を放つ。お前にしては良い攻撃だ」

ガルムは剣を鞘へ納める。結局最後まで息を乱すこととはなかつた。そんなガルムにナルディは残念そうに、

「しかし避けられた上に負けました。師匠はいつたい何をしたのですか？」

ガルムはあっけらかんに、

「上へ跳躍する残像を残して横から包囲網を出て気配を消し、砂埃にまぎれてお前の首を取りに行つただけのことだ。いつも言つているだろう。最後の攻撃が決まればお前の勝ち。決まらなければお前のピンチになるから対処を考えとおけと。その対処はどうした？」

「刺さつた瞬間に手応えを感じなかつたので一度槍を捨て身だけで引こうとしました。しかし師匠が私の首を取るのが早かつたようで・・・」

「じゃあ次は手応えではなく気配で察しするよつじい！」

ナルディはその言葉に苦笑しながら、

「そのための特訓が出来るような相手がないんですよ」

「お前は軍に所属してるだろ？…兵士とやつ合えばいいだろ？」

「それこそ無理ですよ。私はこれでも師団長です。軽々しく一般兵と勝負することなど出来はしませんし、同クラスの隊長達とすれば他国に不審に思われかねませんしね」

ガルムはナルディーのこの言葉にニヤリとして皮肉を言った。

「お前」ときが師団長？家の力でも使ったか？」

ナルディーは肩をすくめて言い返す。

「家の力を使つてもよかつたんですがそ、それはいざといつのために置いとくことにしたんです。それに師匠に言わせるならばだれも師団長に着く人はいなくなりますよ。なんせ僕は十一人の師団長の中では一番強いですし。もちろん武術ではですけどね」

「ふん。昔は真っ赤になつて『使つてません…』って言い返してたのに本当に可愛くなつたな」

「今の僕がそんなことやつたら気持ち悪いだけですよ」

ハハハ、とナルディーは乾いた笑いを上げる。

「次はタクマとアシールの一人でかかるこい。一対一なんだ、ナルディーよりかは善戦しろよ」

・・・

結果は散々だつた。タクマは開始すぐに剣の腹で側頭部を強打され
て氣絶した。

タクマが倒れたためにアシェルはガルムから注意を外してしまい、
同じく氣絶させられた。

二人が目覚めた後、四人で朝食を取つた。

その後三人はナルディに別れを告げて関所へと向かつた。

ガルムは受け付けにギルドカードを出し、受付嬢と2・3言葉を交
わす。

「しばらくお待ちください」

そう言われて、ガルムはソファに座つている琢磨とアシェルの元へ歩
いてきた

関所前は人でごつた返していたが、関所の中は十人ほどしか人がい
なかつた。

それを疑問に思った琢磨はガルムに聞いてみた。

「師匠。何で中はこんなに人が少ないんだ?」

ガルムは一人の前のソファに座ると、

「関所を通過るのは冒険者と商人だけなのはわかるな。一般人、今回
は俺らのことだがそれは非常に少ない。旅をするメリットがないか

らな。冒険者、それも世界へ出る位の奴らは関所のフリー・パスのあるランクC以上の奴だ。Dランク以下だといちいち手続きがいるから自分の国で腕を磨く。商人は何十人も集まって移動するんだがそいつら全員が手続きしてたら日が暮れるから代表一人だけが手続きを行うんだ。だから今関所の外にいるのは冒険者の仲間達や商団の他のメンバーだろう

「手続きって何をやるんだ？」

「商人ならば商人ギルドからの通行許可状の提示と商団の証明書。Cランク以下ならギルドカードとギルドの通行許可状。一般人は身分証明書と目的地、目的の詳細だな。俺は今ギルドカードとギルド本部への一応の連絡を行つた。おそらく報告が時間がかかるからしばらくはここで待ちだな」

「そうか。わかった、ありがとう」

会話が終わると関所受付のドアが開き一人の女性がこちらに向かって歩いてきた。

「ガルム＝グランベルツ様でいらっしゃいますか？」

女性は眼鏡をかけ髪は肩まで伸ばしており、優しい笑みを浮かべている。

（早かつたな）

ガルムはそう思った。

（すでに連絡が回つてた様だな）

「ギルド本部からの命でガルム様達を案内させていただくパレオと申します。ではこちらへ」

パレオはぐるりと踵を返して三人を関所の奥へと案内する。関所の中の廊下はずつと同じであり陽の光が当たらないため、どれくらい歩いたのか分からなくなっていた。

「師匠。関所を抜けのつてこんなに長いのか？」

「いや。普通は通行許可証を発行してもうつて関所の門を通れば済む。中を通ることはまずない。となるとこれはおそらく・・・。パレオ、俺らを瞬間移動装置ゲートへ？」

「はい。それにしても皆様は何者なんですか？各国の王でさえゲートを使うことは許されないので、上層部はすぐにゲートの使用を決定しました。これは前代未聞ですよ。皆様はすごいですね。」

その言葉に気を良くしたのかアシェルは、

「えへへー。私達は「それを聞くのは約定違反だぞ。関所の局員は個人情報を扱つても個人については触れない。それが絶対の約定だ。もし破ればお前だけじゃなくこの局員全員とおまえの家族全員の首が物理的に胴から離れるぞ」

ガルムは冷たい声でそう言った。

「そ、そうですね。し、失礼しました。ゲートはこの扉の先にあります。ゲートから跳んだ先からは本部ギルドの職員が対応します。では私はこれで」

パレオは顔を真っ青にして口早にさう言つと呪早に来た道を引き返していく。

「ふん。教育が足りんな」

ガルムは扉を開けて部屋に入った。
二人も慌てて中に入るとそこには3m程の八面体の青い水晶が宙に浮かんでいた。

「これが・・・瞬間^{ゲート}移動装置？」

「そうだ。これに手を当てて眼をつむり無心になれ」

二人は言われた通りにする。

ガルムは二人の手を握り魔術を発する。

「・・・・・・よし。水晶からゆっくりと手を離して眼を開ける」

二人は眼を開けると先程とは異なった場所にいた。
先程は狭く薄暗かったが、ここは広く明るい。

「ここはどこですか？」

「自由自治都市で中心部にある最も重要な場所であり、自由自治都市の別称としてとしても名高い「ギルド本部」だ。この町にはギルド本部・商人ギルド本部・各国大使館・コロセウムの公共の施設がある」

「お待ちしておりました。ここからは私がご案内させていただきます。私の名前はパレナと申します。」

後ろを振り返ると先程と同じ顔の人物がいた。

おそらく双子だろう。

違つるのは髪が腰まであり、後ろで一束ねにしている。

「よろしく頼む」

パレナはパレオと全く同じ歩き方で三人を案内する。先程は下へ下へと案内されたのに對し、今度は上へ上へと案内される。

「師匠、俺たちはどこへ案内されるんだ？」

「ああな。しかし見当はつく。おそらく総裁室か副総裁室のどちらかだろ？」

パレナはガルム達を一つの部屋の前に案内する。

「ここの部屋です。では、私はこれで」

パレオは事務的にそう言つと来た道を引き返して行つた。

高さ一〇三はある巨大な扉の上には『総裁室』と書かれていた。

「いらっしゃったか。まあいい。入るぞ」

ガルムはノックせずに扉を一人入れるほど開ける。開けた瞬間氷の刃がガルムを襲つた。

ガルムはそれを見つめると、氷の刃は一瞬で蒸発した。

「おいおい。危ないじゃねえか」

「身じろぎもしなかつた奴に今ほどの攻撃のどこが危ないんじゃ」

「俺の弟子がつい武器を抜いちまつじゃねえか」

執務机に向かつて書類仕事をしながら言い放つ老人に

ガルムはアシエルの肩と琢磨の剣の柄を抑えながら言い返す。

「良い反射神経だな。しかしこれ程の攻撃で武器を抜くのはこさなか軽率だな」

ガルムは飄々としているが琢磨とアシエルは大量の汗をかいている。20mは離れた所に座っている老人からとてつもない闘気が放たれているためだ。

視界が揺れる。倒れそうになつて、老人から闘気が消える。

「ふむ。ここまで長く我が闘気を浴びて立つていられる奴は久しぶりじゃな。ガルムよ。こ奴らはどこまで行ける?もしくは行かず予定じゃ?」

「BランクかAランクだな。それ以上はきついだろ?」

老人は自らの顎を撫でて、

「今の推定ランクはどれ程じゃ?」

「Bランク。大目に見てAランクつてことだろ?」

「ではBランクからのスタートでいいのかの?」

「いや、戦闘能力」そはランクだつが経験がない。ランクが妥当だろう」

「あいわかった」

老人は領くと後ろの棚から一冊の書類を取り出して手早く何かを書き込んだ。

「これでよい。ほら、ソファに座れ座れ」

老人は書類を棚に戻して自身も向かいのソファに腰を下ろした。

「初めまして、じやな。一人の弟子達よ。話が名はイシュリド。竜人族でありギルドの総裁をしている。それに君たちのことはよく知つてあるよ。光魔導師ユウの妹にして自身も齡17歳にしてランクC」

「お姉ちゃんと私の事ご存じなんですか？」

イシュリドはアシエルの方を向いて頷き、話し始める。

「もちろんじや。コウ殿は光魔導師だが魔極師と呼んでもよいほど
の力の使い手じや。ガルムよ。魔極師については？」

「存在と種類だけだな」

「魔極師とは最高位魔法に加えて禁忌魔法クラスの魔法を習得した
魔法士に与えられる称号での。コウ殿もそれを覚える途中でこの規定を知つてわざと禁忌クラスを覚えるのを断念した」

「何故ですか？」

「彼女の願いは故郷で治癒魔法士として働くこと。魔極師になれば他からも大量の患者が来るようになる。だからあえて魔導師に留まることにしたよ。無論それほどの使い手を逃すわけにはいかぬと、ギルドからも幾度と使者を送つて彼女を説得しようとしたが結局折れなかつた。

君はそれとは別ルートで知つた。12歳にしてギルドランクCに認定。本部へ来て貰い、育て上げることを考えて君について調べた所、ユウ殿の妹であると分かつた時、我々がどれほど絶望したか。調べ上げる時にまずわかつたことが故郷のために行動していることだ。この二つが判明した時に我々は君の事を諦めた。説得も無理だと分かつたからじや。しかしなんといつ僕倅じやろつ。今君はここにいる

「そんなことが……」

アシエルは輝いた顔で何度も相槌をうつて聞いていた。

続いてイシュリードは琢磨の方へ向き直り、

「そして、同じく初めて。異世界からの訪問者よ。君はこの世界へ望んできたのか？それとも望まずにきたのかを教えてくれないか？」

琢磨は驚いた顔をして何か言おうとしたが、何も言ひこと出来なかつた。

「タクマ。俺が言った。情報収集は俺よりこっちに頼んだ方が早いからな」

「そ、そうなのか。俺は望んでこっちの世界に来たわけじゃない。でも俺は向こうの世界に帰りたい訳でもない。俺は向こうの世界ではチンピラで、何をしても空虚感しかなかった。でもこっちに来てくれるは全てが新鮮で楽しい。それに目標も出来た。何で俺がここに来たのかも知りたい。でも、戻れる方法がわかつたとしてもそれからどうするかは決めてない。そんな身勝手が通るんだろうか？」

「・・・別にかまわんよ。ならば原因と移動手段について調べておこう。向こうの世界には何か未練はないのかの？」

「俺は兄弟も両親もいない。でもじいちゃんにはこの世界に来る時に何も言わずに来た。だからじいちゃんにちゃんと話をしたいとは思ってる」

イシューリドは深く息をついた。

「ふう。そうか。それぐらいならなんとかなるやもしれんな。やってみよう」

イシューリドは机に置いてあるベルを手に取って鳴らした。するとすぐにノックとともに若い女性職員が来た。

「一人をラランクの休息所へ。ガルムは少し残ってくれ」

二人は職員に連れられ部屋を出て行つた。

部屋の外から気配が消えた後、イシューリドは話を切り出した。

「さて、ここからは大人の話じゃ。まず・・・」

#1-2（後書き）

次話は本編を、その次に番外編を挟もつと思つてます。

ご愛読ありがとうございます^ ^
感想お待ちしております^ ^

朝。眼が覚めた琢磨は伸びをしながら思った。

(毎朝ねどこが違うなあ・・・)

そして琢磨は机の上のロウソクのスタンドの下に何かがあるのに気づいた。

一枚は10円玉と同じ色をしたカード、『タクマ カワサキ』『0 pt』と書かれている。
もう一枚はメモであった。

『俺はイシューリドと話があるから。お前はアシェルと鍛練場へ行って特訓しどけ。一緒に置いてあるギルドカードは鍛練場の使用許可証にもなるから持つて行けよ。後、読んだらこの紙はロウソクで燃やしておいてくれ。念のためにな。』

(こっちのカードは『ギルドカード』か。大きさはテレホンカードより少し大きいぐらいかな? ブロンズ色つてことはじクラスで『0 pt』は依頼達成の時に貰えるポイントを示してるんだろうな)

琢磨はギルドカードを懐へしまつと、アシェルに『えられた部屋へと向かう。

(確かに左隣の部屋だつたな)

コンコン

「おーい。アシェル。鍛練場行くぞー」

ガチャリ

ドアノブをひねると扉は開いた。ビービーやら鍵はかかっていないようだ。

琢磨はドアを開け室内へと入つていぐ。
そこには服を脱ぎ散らじ、下着をも脱げりしていいるアシエルが立つていた。

琢磨はアシエルと目が合つたのに気づいた。

・・・・・

数秒の沈黙が部屋を支配する。

琢磨の本能が警鐘を鳴らしていた。

しかし琢磨は動けずにまじまじとアシエルを見つめていた。
(あ・・・れ?アシ・・・ル?裸?・・・裸!?まずい!)

アシエルはハッと思い出したかのように顔が真っ赤になり、体中が震えている。

琢磨は今までの特訓の中で鍛えた脚力を使って全力で後ろへ飛びのこづ・・・とするよりも速く、
アシエルの拳が琢磨の頬を襲つた。

琢磨は部屋から文字通り殴り出され、扉が神速のビームで閉まった。

数分後、頬を赤くはらした琢磨の前に、無表情のアシエルが現れた。

「あれ?・・・

「何?・?

「じめん?・・・

「はあ、もういいわよ。別に悪気があつたわけじゃないんだし、鍵

を掛けたなかつた私も悪いしね。でもね！今度からは鍵が掛かつてなかつたとしても勝手に入らないでよね！」

「ああ、悪かつたよ。次からはしない」琢磨は再度謝り、今の光景を思い浮かべていた。

（確かに鍵が掛かつてなくとも女の子の部屋に勝手に入った俺が悪いよな。裸も見ちまつたし・・・裸・・・）

再び琢磨の顔が熱くなる。

「思い出してんじやないわよ！」

バキイツ！

鍛練場に着いた時、琢磨は両頬を真っ赤に膨らませていた。

「へえ、室内にあるのか」

二人は扉を開け鍛練場に入った。中は武器屋の時に入った鍛練場とは比べ物にならないほど広い。

鍛練場には3グループが鍛練をしていた。しかし遠すぎて何をしているのかまでは見えなかつた。

2人に気付いたのか一人のギルド職員が近づき尋ねてきた。

「君達、俺はこここの鍛練場の番をしている者だ。ギルドカードを見せてくれ」

2人はギルドカードを男に渡す。

「2人ともクラスCか。OpTということは誰かの推薦か」

「え？ アシェルってギルド登録してるんじゃなかつたのか？」

「私が寝ている間に御丁寧に私のギルドカードと新品のギルドカードが交換されてたの。おそらくお師匠様の仕業よ。その人も私の部屋に勝手に入り込んできてるのよ。最低だわ！」

「ははは。凄い人だね。クラスCに推薦できるってことはかなりの上位クラスみたいだね。はい、これは返すよ。ここは自由に使っていいからね」

男は一人にギルドカードを返してそう言い残すと元いた場所に戻つていった。どうやら端っこの方に椅子を置いてくつろいでいるらしかった。

「じゃあ、素振りと組み手でもするか」

「ええ、いいわよ」

2人は人のいない場所で準備運動・素振り・素手での組み手・武器を使った組み手をして汗を流した。

「おーおー。お前ら強いなあ。ちょっとといいか？」

休んで話をしていた2人に男は声をかけてきた。

以前の経験を生かし、男からは見えない位置で一人はいつでも武器を使えるように体を動かす。

そうしながら琢磨は男を観察していた。

炎のように赤い髪で、服装は半袖長ズボン。筋肉が多いが無駄がない。何より隙がない。

(かなり強いな。俺とアシエルで戦つても勝てないな。いざとなれば離脱するか)

「おいおい。武器を構えるなよ。別に何もしゃしねえよ」

男は一人の行動を見抜き、けん制した様子の声を上げた。

「怖いおじさんが急に声をかければそりや迎撃態勢を取るよ。それに彼らと勝負するなんてダメだからね。僕らには今から仕事で時間がないんだから」

男とは違う方向から緑の髪をした少年が現れた。

全く気がつかなかつた二人は驚愕した。

(俺らより幼い。12歳ぐらいか?いや、それよりもなんでこんなに近づくまで気付かなかつた!?)

赤い髪の男は不満そうに、

「別にこつらと試合するぐらいの時間はあるだろ」

どつやうじの男は一人と試合がしたかつたらしい。

そんな男に対し少年は唇を釣り上げ、上目づかいに彼を見ながら、

「あれ?もしかしてこの一人を相手に短時間で勝負がつくと思つてるの?」

その言葉に男は首をかしげ、ニヤリとほくそ笑んだ。

「うん？・・・やつか！」いづらはそんなに強いのか！そんなに強いなら俺たちはまた会えるな。試合はその時に持ち越すか。おし！そうだと決まつたら仕事だ、ほらわっさと行くぞ！」

男は高笑いを上げながら鍛練場から出ていった。

少年も男と一緒に出ていこづらとし、扉の前でこづらを振り返り、

「じゃあね～」

可愛らしい笑みでそう告げ去つていった。

2人はびつと疲れたように座りこんだ。

琢磨は首を横に振り、

「一人で戦つたとしても互角どころか一瞬で負ける。それぐらいの実力差だつたと思う」

「だよね。私たちもまだまだ弱いね。特訓再開しようか」

「ああ、まだガルムは来ないみたいだしな」

一人はしばらく特訓を続けた。

しばらくするとガルムが鍛練場にやってきた。

「おう、待らせたな。ここでの用は全部終わった。お前ら汗を流し

て来い。そしたら出発するわ」

その言葉に2人は水を浴びにそれぞれの部屋に戻った。

-----SIDE琢磨-----

ざああああ

（それにしておこる世界は本当に異世界なのか？言葉が通用したり文字の読み書きが出来るのは何かの特殊能力かと思つてたけど、シヤワーまである。機械じゃなくて魔石を使つてるらしいけど、誰が発明したのかな。やつぱり文明が発達すると発想は同じになるのかな。アシエルにもいろいろ聞いてみるとするか。そういえばさつきの組み手の時、あいつは近距離から攻撃してたな。なら俺は少し間合を開けて攻撃すれば勝てるか？いや、それとも逆に近づいてみるのはどうだろつか……）

-----SIDEアシエル-----

ざああああ

（あいつを殺すにはまだ修行が必要ね。さつきの男に勝つぐらいい強くなれば、ようやく、ようやく諦めかけた夢が果たせる！そういえば組み手の時、琢磨は中距離から攻撃してきたわよね。私は攻撃されるより早く懐へ飛び込まないと。でもずっと間合を維持しきるのは無理よね。なら……）

-----SIDEガルム-----

「おせえ・・・

ガルムは1時間以上ロビーで待っていた。

一人はやつと階段から談笑しながら近づいてきた。

「おせえぞお前らー汗を流すだけで何で1時間半もかかるんだよー！」

「「少し考え方を・・・」」

二人は申し訳なさそうに言つた。

ガルムはため息をつき、

「はあ。まあいい。いろいろ事情が変わつてな、クラリー王国から旅を始めるんだがそこに行くのに徒歩じゃなくてゲートを使うことになつた」

琢磨は首をかしげて尋ねた。

「ゲートでクラリー王国の首都まで行くのか？それと何でだ？」

「いや、クラリー王国側の関所まで、理由は言えねえ。大人の事情つてやつだな。早速行くぞ」

「あれ？今回案内の人はないんですね？」

「場所も知ってるしな。いちいち職員を借りるわけにもいかねえんだよ」

―――ギルド本部 瞬間移動装置の間―――

「じゃあ前と同じように水晶に手を当てて田をつむって無心になれ」

「わかった」「わかりました」

「さて、次にここに来るのはいつになる? やり・・・よし、やる
か。~~~~~」

ガルムはそう呟くと魔術を口にした。

―――クラリー王国側 関所 瞬間移動装置の間―――

「・・・もういいぞ」

二人は眼を開けると前回とは逆に、明るく広い場所から暗く狭い場所へと変化していた。

三人は関所から出ると、そこは口差しが入り込んだ明るい森だった。さまざまな樹が生えていたりして、いくつかの樹には果実もなつている。

琢磨は旅の始まりに興奮していた。

「師匠。ここがクラリー王国なのか?」

「ああ、ここが旅の出発地点だ。ここからギリウス帝国、ハルナ商連、シャルベ王国へと移動する。これからは今まで以上に厳しくじくから覚悟しとけよ」

「師匠、よろしく頼む」「よろしくお願ひします」

三人は森の奥へ奥へと進んでいく。
それぞれの目標を目指して。

これが、ガルム・琢磨・アシェルの旅の始まりだった・・・・・・

#1-3（後書き）

2章終了

次回番外編、というよりかは他の人視点の話を書きます。

ご愛読ありがとうございます。
感想お待ちしております。

番外編 #14 それぞれの思惑（前書き）

番外編です。

外伝とは別物。

番外編||本編に関係

外伝編||本編とは無関係

番外編 #14 それぞれの思惑

――――シャルベ王国 とある領土――――

夜のとばかりが下りた頃、部屋には厳しそうな様子で眼下の街並みを眺める一人の男がいた。

街並みは昼の賑やかさとはまた違つた賑わいを見せていた。

「閣下。奴が一昨日ギルド本部へと移動し、今日クラリー王国へと移りました」

闇の中から声が聞こえる。声からビリヤリ男のようだ。
部屋の持ち主は何も驚かず、

「やうか、イシューリドと何を話したか分かるか?」

「申し訳ありません。あの建物には古代魔ハンドントスペル法級の結界が張つてあつた為に、中に入るこことすらまなりませんでした」

「そうか。まあいい。他に何かあるか?」

「奴は男女二人の弟子を取つたようです」

男は驚いた様子で振りむき、闇に向かつて口早に尋ねた。

「何者だ!」

闇からの声は変わらない口調で、

「女の方はキーリエの町出身の冒険者のようです。名前はアシェル＝グリード。男の方は現在調査中です。キーリエの町の者ではないようですが、おそらく旅人かと」

その返答に男の顔はこわばる。

「グリードだと…？まさかあの男の血縁者か？」

「は。娘でござります」

「娘か。…あれには娘が一人いたな。もう一方に見張りを付けておけ。何時でも行動を起こせるように。男の方は引き続き調査を続行しろ」

「御意」

闇の声はそれ以降聞こえなくなり、男は再び街並みを見下ろす。

「さて、これがどう影響するか…」

――――クラリー王国　とある教会――――

一人の老人が椅子に座り、眼を閉じている。

「マクレガー様。あの御方がこの国に入国したとの情報が入りました」

「そうか。彼はどこに向かつておるのだ？」

とある協会にて、教皇の次席である10人の司教内の一人、司教マクレガーの元に一人の司祭が現れる。その男は聖職者よりも賊と言われた方が納得出来るような男だった。

「例年通り、北へ向かつております。おそらくウェルティ司教領へ向かうものかと」

「ならば我が領へはおそらく最後に来るのであろうな」

その言葉に司祭は頭を下げ、

「は、きっとそうあります。しかし、気になる点がございま
す」

マクレガーはふと眼を開けた。

「何だ、申してみよ」

「関所を通つたのは三人のこと」

マクレガーは眉をひそめ、少し考えた後に、

「その様子を見るに、他の者はあの者達ではなかろう?」

「は、あの者達に動きはありません。……では、失礼いたします」

司祭が去つた後、マクレガーは再び目を閉じる。

(・・・まだ、まだ早い)

―――ギリウス帝国 王城 王の私室―――

ノンノン キイ パタン

「陛下、お呼びでございましょうか」

ギリウス帝国帝王ルンドベルクの部屋に一人の老人が入ってきた。老人は真っ赤なマントを羽織り、杖をつきながらも眼光は鋭い。

「来たかラパーン。お前を呼んだのは他でもない。ガルム＝グランベルツが弟子をとつて再び大陸を回り始めたらしい」

ラパーン。ギリウス帝国宰相の地位に就いている彼は齢70を超えている老人で、ギリウス中の貴族をその人望と財力、頭脳でまとめあげている。ラパーンはルンドベルクの言葉にわななき声を震わせる。

「ま、まさか陛下。計画を早めるつもりですか！？なりません、なりませんぞ。あの計画は帝国の最初の一歩となる極めて重要で纖細なものでござります。慎重に進めなければなりません」

「ふ、そういうわけではない。ただ、あ奴は一人の弟子をとつたらしくてな。それを利用することにした」

「弟子ですと？何者でござりますか？」

ルンドベルクは、その言葉を待つてましたと言わんばかりに唇を釣り上げる。

「一人はまだ分かつておらん。だがもう一人の方はアシェル＝グリードだ。確かわが軍に此奴に深い関わりのある者が一人いたはずだ。其奴を差し向ける。もちろん我が國に移動してきた時にだがな」

「成程、それは良い手でござりますな。では早速それに向けていろいろ準備いたしましょう。では、失礼いたします」

コツコツコツコツ・・・

ラバーンが去った後、ルンドベルクは一人笑っていた。

「ふふふふふ、これで俺の目的にまた一步近づいた。・・・ふむ。一応あいつらにも知らせておいてやるとするか。あいつらは俺を利用してゐつもりだろうが、俺が逆にあいつらを利用してやる。」

そう言ってルンドベルクは私室を出て城の地下深くへと潜つていった。

番外編 #14 それぞれの思惑（後書き）

ちょっと匂わしてみました。

#15 ノートリオール平原

ガルム・琢磨・アーシュの三人は関所を出発し、右周りに王国を回ることに決め、針路を北に取つた。

三人はひたすらに平原を北に歩いている。

「師匠、ここはどこなんだ？」

「…………ここはナバルディ領にあるノートリオール平原だ」

ガルムはどこか遠いところを見てそう答える。

「師匠? ここに何かあるのか?」

「ここは、かつて三英雄とそれを支援した大陸中の戦士達が魔王率いる軍勢と戦った場所だ。その戦いはノートリオールの決戦とも言う」

「そりなのかな。でもなんでここなんだ? 魔王の城でもあったのか?」

ガルムは首を振り、辺りを見渡す。

「1000年前はこの場所に国があつたんだ、その国の名はノートリオール。そう、今のこの平原の名だな。この平原は別名、聖墓ノートリオールとも言う。勇敢な戦士達が眠る為、今でも三国はこの場所を使って合同演習もするんだ」

琢磨はその言葉に納得したが、

（あれ？なら何でその国はなくなつたんだ？）

その疑問をそのままガルムに尋ねると、

「この国はその時の戦いの前に非戦闘民を他の国に移し、国の全てを決戦のために改造した。そして王城を大陸軍総本部とした。そこまでしたのは大陸軍と魔王軍の戦力差がひどかつたからだ。大陸軍の数はおよそ30万程、それに対しても魔王軍はおよそ1000万はいたらしい」

「圧倒的じゃないか。でも今の世の中があるってことは勝ったんだろ？どうやってその戦力差を覆したんだ？」

ガルムは無表情に言い放つた。

「30万の戦士たちは、三英雄とその従者たちは魔王と戦うために魔王軍に道を作った。そして彼らが魔王の元へと行った後は魔王軍との正面衝突に入った。しかし、それだけの戦力差は簡単には翻るものではない。彼らの8割が戦死した後、彼らは城へと退却した。その周りを魔王軍が取り囲んで一気に殲滅しようとした。そして彼らは城に戦闘前から施してあつた古代魔術エングリッシュトspellの中でもさらに特殊、原ジ始魔術『アルパ』アルバ。これにより魔王軍の9割が消滅された、王城を含めて」

辺りに沈黙が満ちる。アシエルは信じられないような顔でガルムに尋ねる。

「ちょ、ちょっと待つて下さいよお師匠様。魔王軍は戦士達が相打ちで倒したんじゃないですか！？私はそう習いましたし三国家もそう言って・・・」

「大陸軍はもとからその魔法を使うつもりでいた。そして大陸軍には三国家の重鎮たちも参加していた。もし勝ったとしても禁忌魔法の使用で大陸が荒れるわけにはいかない。だから魔法の使用を知る者は事実を自分の墓まで持つていくことが暗黙の了解とされた。しかし、それを拒み文書に残す者もいたんだ。」

「じゃあお師匠様はそれを読んで・・・」

琢磨はそれよりも一つの疑問を持つていた。

「師匠、三国家は300年前に出来たんじゃないなかつたのか？」

琢磨は首をひねってガルムに尋ねた。

ガルムもなぜか首をひねっていた？

「ん？教えてなかつたつけ？元々今の三国家は1000年前には存在してたんだ。三英雄達は元々、三国の王家の血筋だ。そして大戦後その三国を中心に諸国を併合していくた、いざれ来るであろう魔王の脅威に対抗するために」

「え？魔王は倒したんじゃないのか？」

「魔王は何度倒してもよみがえる。だから英雄たちは魔王を封印する」とに決めた

「どうやつたんだ？」

「勇者ベルズングの剣は神器『神の王剣』^{アルジョン}って剣なんだが、それにありつたけの魔力を込めて『無』の空間に魔王を封印した。しかし

それはいつ解けるかわからない封印だ。なぜなら無の空間はそもそも机上の理論でしかなかった。研究をして、魔王の封印を解除するわけにもいかず、研究は中止となつた。だから三国は封印が解けるのをひどく恐れている

「概念武装？」

「概念武装って言つのはその名の通り武器に『概念』を込めてある武器だ。概念は魔力をもつて込められ、込められる魔力が大きい方程効果も高くなる。概念武装の上位にあるのが『神聖武器』そのさうに上位にあるのが『神器』だ」

ガルムはそう答える。

三人はひたすらに北を目指す。街はもう近い。

「師匠・・・あれは・・・なんだ？」

琢磨は遠くの空に光る物体を見つけた。

「何か光ってるんだが・・・鳥か？」

ガルムはその言葉に同じように遠くの空を見る。

「あれは・・・・・馬鹿な！？おい、街はあっちだ。どうやら尋常じゃない事態に陥つてゐるようだ。今から向かう街は大きな丘がある。街に着いたらお前たちはその丘の頂上で待つてろ！」

「お師匠様はどうなさるんですか？」

二人はガルムの様子に危険を感じ取り、顔に緊張が走る。

ガルムは装備を確認すると、金の入った袋を琢磨に投げ渡す。

「これはお前が持つてろ。俺は今から全力で街を目指し、必要ならば戦闘を行う。お前らも戦つてもいいが相手の実力を見極めろ！いいな！」

そう言つと、ガルムは風のように街へ向かつて行つた。

二人はお互ひを見て頷きあつた。

そして一人も街へ向つて走り出す。

#15 ノートリオール平原（後書き）

概念武装についての説明の追加です。

込められる魔力 = 概念の効果力

神器 > 神聖武器 > 概念武装

神器 = 魔力の塊（特大）+使い手の意志力

神聖武器 = 魔力の塊（大）+使い手の意志力

概念武装 = 魔力（中）+概念（武器¹）に異なる

概念武装についての基本的な事柄は設定集に掲載いたしましたので、そちらをご覧くださいませ。

次回予告

街を襲う光る鳥（？）とは一体何なのか？

それに対してもガルムはどう立ち向かうのか！？

琢磨とアシエルは街で何をするのか！？

次回、『街中にて・・・』

「愛読ありがとうございます。感想、お待ちしております。

#16 街中にて

----- SIDE ガルム -----

走り出して数分後、ガルムはとある街に着いた。

その街はいたるところから火の手が上がり、殆どの建物は廃墟と化している。建物の瓦礫が道を塞いでいるために遠くを見渡すことが出来ない。ガルムはとりあえず一番高い瓦礫の上に登り、街全体を見渡すこととした。

「ひつでえな、こりやあ。いつたい何百人が死んだんだ？」

ガルムはため息をつき、視線は一点を見つめている。

「何でお前さんがここにいて街を襲っているかは知らんが、ここは人間の街だ。もう充分に暴れただろう？いい加減この街から退場してもらうぞ！」

街の空には夕陽の赤色を塗り消すほどの光を放つ一体の龍がいた。

光龍とも呼ばれ、三大龍とも呼ばれるクラスの魔物である。

光龍は以前琢磨が相手にしたワイバーンなどとは格が違う魔物である。

龍種は翼竜種（ワイバーン）や蛇竜種（ナーガ）の上位に位置する魔物であり、

光龍の放つ光弾は一撃で翼竜や蛇竜をミンチに出来る。

ガルムは横から光龍の方へ瓦礫の上を滑るようにして近づく。その間も光竜は街を破壊していく。

(人の姿がないことを考へると、どこかに隠れてるのか。その方が都合がいいな)

光龍はもう口と鼻の先である。ガルムは隠していた殺氣を放つと光龍がガルムに気付いて振り向く。

その時には既にガルムは剣を鞘から抜き放ち跳躍していた。

「遅い！」

一閃

ガルムの剣は光龍を両断した。

しかしガルムは着地すると同時に右方向に再び跳躍する。

轟音

衝撃が着地した位置を襲う。

光龍が光弾を放ったためだ。

光龍は泰然と空中に鎮座していた。

ガルムは剣をしまつと鋭い視線を光龍へ向けた。

『何者だ。何ゆえ我にあだなす。我是光龍であるぞ』

「・・・喋れる龍と出会ったのは久しぶりだな。なんでこの街を襲ってるんだ？この街がお前と敵対する行動でもとったのか？いや、そんなことが出来る筈がない。龍の谷はこの国には存在しないからな」

『この街にて我が同胞を感じた。今は感じなくなつたが、あれは間

違ひなく我が民。龍は人とは生きられぬ。連れ帰ろうとしたが人は知らぬと言う。故に攻撃をした。強く、我が念話を解す人間よ。我が同胞を連れ返せ』

「この街にやあお前以外の龍は感じねえよ。勘違いだろ」

『貴様も奴らと同じか。ならば用はない。貴様を殺し同胞を連れ歸る』

「同胞などいないというのに・・・。話の通じねえ奴だ」
（銀の剣じゃ実体のない光龍の相手は厳しいか。魔法銀の剣ミスリルはタクマに貸して折られたつきり買い忘れてたしなあ。仕方ない、この剣を使うとするか）

ガルムは腰から紐で封印された剣を手に取ると、紐を外し始める。

『貴様は他の者とは違う。我が全力で相手をしてやるつ』

そう言うと光龍は全身に力を込め、口元に魔力を集め始める。
口元で生成された光弾は先程のふた回り以上もある。

『我が全力を受けよ』

光龍はそう言つと、魔力を解放した。
放つたそれは一直線にガルムへと向かつて行く。

しかしガルムはそれを全く見ずにただひたすらに紐を解いていた。
光弾が当たる直前になつてようやく紐を解き終わつたようだ。

光弾がガルムの顔を明るく照らす。

「・・・よし」

剣を鞘から抜き光弾へと振りかぶる。

静寂

光弾は音もなく消滅していた。

ガルムは笑みを消し去り、剣先を光龍へと向ける。

「さて、闘いを始めようか」

そう言つと、ガルムは剣を振りかぶりながら跳躍した。光龍はとっさに体をひねつて避ける。

態勢が悪いため反撃は来なかつた。

避けられたガルムは着地と同時に剣を地面へと突き刺した。すると地面がら黒い柱が光龍の真下から生えて貫いた。

多少よろめいたもののすぐに立ち直り、光弾を放つた。貫かれて消滅した部分も一瞬で再生した。

『その剣は・・・人よ。何故その剣を持っている。それは偉大なる我が父が三百年前に封印した物であるぞ。まさか貴様、封印を解いたのかあ！』

「・・・・俺はこの剣を魔物から奪い取つただけだ」

『戯言を。まあ良い。貴様を殺し、今度は我が封印するとしよう』

そう言い放つと、今度は光龍がガルムへ突進する。

----- SIDE 琢磨・アシェル -----

ガルムが街に到着してからさらに十分後。
二人はようやく街へと到着した。

「師匠は龍と戦つてゐみたいだな」

街のあまりの悲惨さにアシェルは口を覆う。

「何これ！？ひどい・・・ひどすぎる・・・」

口にこじり出さないものの琢磨も目の前の光景に絶句していた。
琢磨はあたりを見渡すと、一人の男が倒れ伏しているのが目にに入った。

「おい、誰か倒れてるぞ！」

二人はそばに駆け寄ると、男を起こし、脈を確認する。

「・・・息がある。アシェル、治癒魔法を！」

「ゴウお姉ちゃんほどつまく治癒魔法を使えないけど・・・やつて
みるわー！」

アシェルは両手を男の胸の前で組み、目を閉じて念じる。

「ああ、神よ。傷を負いし此の者に癒しの加護を・・・ヒール♪

アシュルの両手が白く輝き、その輝きが男の胸の中へと吸い込まれていった。

「……がはつー」ほひ「ほ・・・」

男は咳こむと薄く眼を開いた。

「ありがとう、見知らぬ旅人達。でも俺はもつ駄目だ」

男は眼を開けたものの手は震えていた。

「諦めないで!」

「自分の状態ぐらいわかるぞ。……絶望的だつてこともな。この街はどういうわけか光龍に襲われた……がはつがはつ。お前達もこの裁きに巻き込まれない内に別の街に逃げな。俺たちに関わっちゃ……じふつじふ……いけねえ……」

男は再び口を閉じ全身から力が抜けた。どうやら息絶えたらしい。

「そんな……」

アシュルは涙をこぼし嘆いている。

「私がコウお姉ちゃんと同じぐらい治癒魔法がつまれば……」

「馬鹿な事を言つな!それより他の人がいか探すぞ!一手に分かれで、三十分後に師匠の言つていたあの丘で落ち合おう……俺はこっち側に行く。アシュルはあっち側を頼む」

アショルは手の甲で涙を拭き取り、頷く。

「わかつたわ。じゃあ三十分後にまた会いましょ」

二人は瓦礫によつて塞がれた、道なき道をそれぞれ進んでいった。

———SIDE琢磨———

「おーい！誰かいないか！」

琢磨は大きな声で辺りに呼びかけながら、瓦礫のひしめく道を歩いていた。

しばらくすると、中に噴水のある少し開けた場所に辿り着いた。そこには看板や芝生やベンチもあることからおそらく広場なのだろう。

広場の周りには元から建物は少ないため、瓦礫も少なかつた。

琢磨は冷たい水の出る噴水に手を浸しながら思つた。

「ん・・・。冷たいな」

(綺麗な場所だな。普段は人が一杯集まつてて賑やかなんだろうな)

その時、大気が震え上がつた。

琢磨はばつと後ろを振り仰ぎ、空を見上げた。

そこには黒い柱に貫かれた光る龍の姿があつた。

(あの黒い柱は何だ？あれを見ると何か・・・ひどく、気持ち悪い。でも、龍が痛がつてゐることは師匠の魔法だよな？師匠つていつたい・・・！）

琢磨は正面に何かを感じて身構える。そこには一体3mはある大きい魔物三体と琢磨の半分ほどの身長の小さい魔物十体がいた。どうやらガルムと龍の戦いを見ている間に接近を許していたようだ。

（近くの三体の魔物は一つ目の中人・・・サイクロプスか。初めて見るけど図鑑の通り随分大きな斧を持っているな。後ろはゴブリンだな、サイクロプスのおこぼれでも狙つてるのか。ランクCが三体とランクEが十体か。数が多いが驚異的な程でもないな）

琢磨は腰の剣を抜き放つと、サイクロプスの脇をすり抜けてゴブリンの集団へと飛び込んだ。あまりにも速いスピードで魔物たちは驚き、動きを止める。その間にも琢磨はもう五体ものゴブリンをほふっていた。ようやくゴブリン達が琢磨を殺そうと武器を振りかぶるが、ガルムの厳しい特訓を受けていた琢磨は止まっているように見える。

（遅い！）

残る五体のゴブリンもすぐに切り裂くと、三体のサイクロプスと距離を取つた。

（サイクロプスは力が強いがその分スピードが遅い。なら対処は・・・）

琢磨はすたすたと一体のサイクロプスの前に無防備に立つ。サイクロプスは好機と片手で持っている白慢の斧を振りかぶる。もし当たれば真っ二つ。剣で受けたとしても剣は折れてしまうだろう。

だが、そんな愚を犯す琢磨ではない。

流れるような動きで斧を持つ腕を斬り落とした。

痛覚が鈍いのだろうか。サイクロプスは大した反応も見せず、残つた腕で目の前の敵払い飛ばそうとする。それを読んでいた琢磨は一步身を引き、紙一重で避ける。

残る一体のサイクロプスは何も指をくわえて見ていたわけではない。琢磨の背後に移動すると、それぞれの剣と斧を振りかぶっていた。しかしそれらが琢磨に当たることはなかつた。

代わりに腕を斬られたサイクロプスの肩に食い込んでいる。腕を避けた後、背後に回り込んで態勢を崩していたサイクロプスの背中を思い切り蹴つたのだ。

力の強いサイクロプスであろうとも、自身の力で骨にまで食い込んだ武器を抜きとるのは容易なことではない。

その隙に一体のサイクロプスの首を切り飛ばした後、地面に転がっているもう一体も同じように首筋を切りはらつた。

琢磨は辺りを見渡し、他の魔物がないことを確認すると小さく息を吐いた。

(ふう。こんなとこを師匠とアシヘルに見られたら、また一人に笑われるなあ。もつと精進しないと)

「・・・そここの旅の御方」

「誰だ！？」

「ひつ・・・す、すみません。わたしはこの街の長です」

「そつか、すまない」

琢磨は男に向けていた剣を收めると小さく謝った。

「いえ。急に出てきた私が悪いんです。それより頼みがあるのです。実は三十分程前に、避難場所から街娘が一人出て行つてしまつたのです。どうか、どうか探してきてもらえませんでしょうか？」

琢磨はそれを聞いて愕然とした。今この街はランクCの魔物が出るほど危険なのだ。

そこに子供がいるというのだ。もしも魔物に出会つてしまつては子供の足では逃げることはかなわないだろう。

「何で出ていったんだ！？」

「そ、それが以前から仔犬と遊んでいたらしく、その仔犬を避難所へ連れて行こうとしたらしく・・・」

「周りは！？何で止めなかつた！」

「当然止めましたとも！しかし周りの目を盗んで建物から出たんだと思ひます」

「その子達の特徴、それと向かつたと思われる場所を教えてくれ！」

「はい。一人は長髪、もう一人は短髪の女の子です。場所はおそらく・・・」

琢磨は走つていた。長から教えてもらった場所はアシェルの向かつた地域であり、ガルムと龍が戦つている場所とも近いからだ。

(どうか間に合ってくれよ！死体をさつきの人に渡したくなつてないからな！)

———SIDEアシェル———

アシェルもまた、瓦礫に埋もれた道を跳ねるように進んでいた。声を上げて探す琢磨とは異なり、アシェルは高い位置から取り残された人を探すことにした。

(さつきはタクマに格好悪いところを見せちゃつたな。泣いてるところなんか・・・それにこの前は裸も・・・・・っは！)

ぶんぶんと首を振つてその考えを振り払い、真つ赤になつた顔の熱を下げる。

その時、ふとガルムが龍と戦つている方向に変わつた魔力を感じた。アシェルは、魔力感知だけは負ける、ヒュウが唸るほど優れていた。(なんだろう・・・属性魔法でもないし、闇・・・にしては性質が違うし・・・！――)

「つーつー！？」

純粹な魔力による衝撃がアシェルを貫いた。

アシェルは急いで一番高い瓦礫の上に登ると、魔力の元をたどる。そこはガルムと龍が戦つている場所だった。

「何・・・あれ。闇なんて軽いものじゃない。そう、もつと危ない

もの・・・。お師匠様の魔法？でもあんな魔法見たことも聞いたこともない。・・・つが！」

アシエールは吹き飛ばされていた。

先程のような、魔力の衝撃ではない。
物理的な衝撃によるものだ。

何かに横から突進され、瓦礫の塊へと背中から突っ込んだのだ。

「つーーーがはつ、じほつじほつ」

アシエールはひどく堰きこみながらも瓦礫の陰へと身を隠した。
そこから自分を吹き飛ばした正体を見ると、
そこには彫像のような灰色の体をし、一対の翼と一本の無骨ながら
も鋭い槍も持つた魔物がいた。
その魔物は四体おり、四体ともが両手で槍を構えて宙で羽ばたいて
いる。

(・・・Bクラスのガーゴイル！)

アシエールは己の不注意を呪つていた。

ガーゴイルの攻撃なら平常時なら避けることもカウンターで倒すこ
とも出来たからである。

しかし、実際には避けることも出来ずにまともに攻撃を喰らう、無
様に吹つ飛んだ。

(幸いなのは槍を使った攻撃じゃなくてタックルだった。もし槍の方だつたら間違いなく致命傷を負つていたわね。見てなさい！そうしなかつたことを後悔させてやるんだから！・・・とは言つても相手は四体か、負けはしないけど厄介ね。どうやって倒そうかしら？)

アシェルは自分の装備を確かめる。

(ダガー二本とナイフハ本。それとピックが十一本か。・・・よし！)

アシェルは滑るように瓦礫から出ると同時に懷から一本のピックを左右両側のガーゴイルに投げる。ピックはそれぞれの眉間に突き刺さって墜落、絶命した。

アシェルは傍に建つて建物の壁を蹴り、ガーゴイルの背中へ飛び乗るよう跳んだ。

しかし実際には飛び乗らずに空中で抜いたダガーで翼を根元から刈り取っていた。

翼を失ったガーゴイルは当然ながら地に墜ち、アシェルは落下の勢いのまま頭にダガーを突き刺した。

残る一体は猛然とアシェルへ突進とともに槍を突き出したが、アシエルは左手のダガーで槍をいなし、右手のダガーで首を斬り飛ばした。

(ふう。結構苦戦したわね。こんなところを御師匠様とタクマに見られたら笑われちゃうわね。もつともっと強くならないと・・・)

アシェルはそう思ひながら再び取り残された人を探し始めた。

「・・・・・ キヤンキヤン」

(・・・え? 犬かしら? 一応助けなきゃ。どこから聞こえるんだろ? ・・・あればまさか!?)

アシェルは引き攣つた顔である方向を見た。そこには仔犬とともに二人の少女が尻もちをついていた。二人は呆然とした顔で空を見上げ、仔犬は威嚇を空に向かつてしている。

そう、一人と一匹はガルムと龍の戦うすぐ下にいたのだ。

アシェルは走り出した。いつ彼らが戦いに巻き込まれるかわから
ない。

「待つててね、すぐ助けてあげるからー擦り傷一つさせないんない
んだからー。」

#16 街中にて（後書き）

魔物紹介：

?龍：竜の上位種である魔物で飛行系の中では最も強い

真龍 > 三大龍種（属龍種・光龍種・闇龍種）> 五龍種（雷龍種・水龍種・炎龍種・樹龍種・地龍種）> 竜種（翼竜種・蛇竜種）

捕捉：

真龍以外の龍種は種族として複数存在し、それぞれ王族が存在する。竜種はB～Aクラスの魔物であり、龍種はSクラス以上の魔物で個体数はかなり少ない。

?ゴブリン：集団行動をするEクラスの魔物。持つ武器は様々。

?サイクロプス：一つ目の巨人種の魔物。

捕捉：

かつて大陸に存在していた巨人族の血を引いている魔物。クラスはBだが巨人種では最も弱く、上位種にアトラス・オーガ等がいる。

?ガーゴイル：

灰色の体に一对の翼、槍を持つ。空から急襲をしてくる。

武器紹介：

ピック：

簡単に説明するならば殺傷能力の高いダーツ。斬る用ではなく、突く用の武器で特殊な場合を除いて投擲武器として使用する。

次回予告：

ガルムは光龍に勝てるのか！？

二人は少女達の救出に間に合うのか！？

次回、
『それぞれの戦い』

#1-7 (前書き)

龍の念話と魔法詠唱が併に『』で表しています。ストーリー的にややこしくないとは思いますが、こんがらがつたならば申し訳ないです。

ガルムと光龍の戦つているすぐ近く、少女達は絶望していた。

伝説だと思っていた龍を甘く見ていたのだ。

光龍は神の使いであり、何も悪いことはしていない自分達は大丈夫だと思っていたのだ。

だが実際はどうだろう。狙われてはいないものの周りの建物が被弾して瓦礫がすぐ近くに落ちてくる。当たつて傷は負っていないものの、とても怖い目に遭っている。

やつとのことで仔犬の所に辿り着いたと思って空を見上げると、そこには件の龍がいたのだ。二人の少女は腰を抜かして動けなくなってしまった。

いつもならガルムは気を利かせて別の場所で戦うのだが相手は光龍。場所を移す余裕などはなかった。その上、ガルム達は一人の少女に気付いていなかつた。

それほどまでに一人と一体の戦いは壮絶であった。

あまたの数の光弾を光龍が放つと、それをガルムが消滅させる。ガルムが不気味な色の斬撃を放つと、光龍は体をねじつて避ける。夕陽は沈み、夜の帳が降りてきていた。

互いの体力は変わらず、闘氣にも変化はない。スピードも、パワーも、集中力も、依然拮抗していた。

(はてさて、どうやつて終わらすかねえ・・・)

(決まらぬな。それにしても何という闘氣。こやつは本当に人間か

(?)

アシュルは走っていた。

少女たちを助けるためである。

少女達との距離が残り100mを切った時、状況に変化が生じた。生じてしまった。

少女達がようやく立ち直り、逃げようとしたのだ。

少女達の名は、長髪の方がアスホ、短髪の方はリーフという名である。クラリー王国では宗教上の理由で不思議な響きの名を持つものが多く、彼女らも同様であった。

「アスホ。に、逃げよう!」

「う、うん。マロンを早く避難所へ連れて帰ろ!」

アスホは横で勇敢にも光龍に威嚇している仔犬のマロンを抱えると、避難所の方へ走りだした。

しかし、これは最もしてはいけない行動であった。

光龍が彼女たちに気が付いてしまったのである。

(む?誰だ?・・・我がプライドが許さんが、この均衡を崩すためだ。存分に利用するとしよう)

光龍はさらに多くの光弾をガルムに放ち、その場に釘付けにする。光龍は彼女たちに襲いかかつた。

「な、何を・・・あればっ!くそが!やらせんぞ!」

ガルムはこの時点でようやく気付き、急いで少女達を救おうと動く。しかしだけでに数秒の差が出来てしまつたために、追いつくのは不可能なほど距離に差があった。

光龍の爪がアスホリコを襲う。

ガキイン

寸での所で割つて入つてのは琢磨であった。
抜いていた剣で爪をそらして体当たりを防いだのだ。
相手は巨体、ただの人間である琢磨がそれで無事で済むはずがない。
だから吹き飛ばされるのも当然である。
が、何とか踏みとどまつた。

そこにガルムが降りたち、逆袈裟切りを光龍の顔めがけて放つた。
それは見事当たつて光龍の顔を切り裂いた。

「ぐっ、貴様あ！」

光龍の高速再生も追いつかなくなつていた。
傷を癒すため、光龍は大きく空へ飛びあがつた。

ちゅうじでそこにはアシェルが到着する。

「よくやつたタクマ！タクマ、アシェルと共にそこの子供達を避難せん！」

「あの、マロンもお願いします！」

アスホはガルムに叫んでいた。

「マロン？・・・ああ、あの仔犬の事か。タクマ、頼めるか・・・
む？セイ！」

ガルムは優しく笑んでアスホの頭を撫でると、
同時に剣を抜き放つて飛んできた光弾を打ち消した。

ガルムは優しく笑んでアスホの頭を撫でると、
真剣な目になつて光龍を見つめて一人に言い放つ。

「・・・行け」

ガルムは再び光龍に飛びかかつて行つた。
時間を稼ぐためだ。

「行くぞ！避難所はこっちだ！」

琢磨はマロンを胸にかかえたアスホをお姫様だつこで持ち、先導する。

同様にアシェルモリコをおんぶして避難所へと走る。

「・・・・・俺はお前さんが直接人に被害を出しているところを見ていなかつた。だから今まで手加減してきたが、今の行動で分かつた、お前は敵だ。・・・・死ね」

無表情にガルムは言い放つと、魔力を解き放つた。

「何だこの魔力量は！貴様、やはり人ではないな！」

「人だ。普通とは少し違う……な」

ガルムはそう答へ、右手に握る剣に魔力を流す。すると剣は全長10m以上にまで伸びる……じす黒い瘴気を放ちながら。

「やはりその剣は…………か！」

「さえずるな」

ガルムは剣を一閃させる。

その斬撃は光龍の8割を消滅させた。

高速再生でみるみる戻っていくものの、光龍の体は揺らめいてみた。光龍の体は魔力で出来ていて、光龍とて総魔力量は有限である。しかし、これまでの戦闘で魔力のほとんどが消滅しているために体の形成すらも安定しなくなつて来たのだ。その上、光弾も魔力で出来ているため、余計に魔力の消費が激しいのだ。

(くつ・くつこのままではまずい。私はこんなところで死ぬわけにはいかぬ！)

光龍は身をひるがえし、街から去つていった。
そこに再び黒い斬撃が襲つ。体の2割ほどが消滅する。
しかし仕留め切ることは出来なかつた。

「・・・っぢ。逃がしたか」

魔力を収めて剣の長さを戻して鞘におさめた。魔力で紐を精製すると、再び鞘に巻き始めた。どうやら前回の紐も魔力で出来ていたらしい。

辺りを見回したガルムは頭を搔いた。

戦っていた場所の建物は全て瓦礫をも通り越して、更地になつていた。

「疲れすぎたかね、こりやあ・・・少しフォローしておくかあ」

ガルムはどこからか杖を取り出して地面に魔法陣を描き始めた。魔法陣の中心に立つと呪文を唱え始める。

『ああ・・・地神、緑神、風神、繁栄を司る神々よ。疲れ切った大地を癒す汝等の加護を大地に。光を失い希望をも見失いし哀れな者達に汝らの加護を。・・・ヴァレイドリアール』

その瞬間、夜の闇を一筋の光が差し込み、

その光が地面に降り立つた瞬間に街中の地面が淡い光で覆われた。瓦礫が宙に漂い集まって行く。

砂が石に、石が岩に、岩が瓦礫に、瓦礫が家へと戻つて行く。

その空間だけ時間が逆行しているのだ。

地面が光るのを見て、何事かと街のあちこちから人が現れる。

「家が、俺の家が戻つてる!」「おお・・・神の奇跡じゃ!」

ざわざわと街が賑わい始めた。

ガルムは素早く杖や魔法陣を片付けると適当に歩き始めた。

「さて、と。避難所予想以上に多かつたなあ。あいつらはいつたいどこにいるんだ?」

タツタツタツタツタ

「師匠。こつちです」

琢磨が手を挙げて走り寄つて來た。

ガルムは琢磨に連れられて避難所へと向かつた。

「おお、無事だつたのか。で、どうしたんだ?何か急いでるようだが」

「ああ、実は俺達のいる避難所で怪我人が多くて・・・アシェルー人じや手が足りなくて」

キイ　バタン

「成程、分かつた。俺がやるつ。アシェル?どこにいるんだ」

建物に入るとアシェルを探す。する遠くからか細い声が聞こえる。

「御師匠様、こつちです」

その声は震えていた。

(そんなにひどい怪我人がいるのか?)

少し小走りでガルムは部屋に入る。

そこでガルムは予想外の者を見る。

「つー馬鹿ー何してやがるー!？」

そこにいたのは、顔を真っ青にしながら治癒魔法を唱え続けているアシェルであつた。

ガルムはアシェルの肩をつかみ、向き直らせて額に手を当てた。（魔力がほとんど残っていないな。その上この環境だ。免疫力が低下している状態で菌でも貰つたか？魔力酔いと風邪を併発してるな。周りよりもこいつが危ねえ！）

「おい、今すぐ横になれ！」

ガルムはアシェルを毛布の上で横にさせると白らりの魔力を与える。

『我が魔力を此の者に・・・』

「御師匠様・・・すみません」

「喋るな！」

「・・・はい」

次第にアシェルの顔が青色から赤色へと変わっていく。
(魔力量は戻つたな。風は回復を待つしかない)

「ここは俺が引き継ぐからお前は寝てろ。風邪をひいてるからしつかりと治せ」

「はい、ごめんなさいです・・・」

すう すう すう

アシェルはすぐに眠ってしまった。余程疲れが溜まっていたのだろう。

ガルムはその後、残りの怪我人を全て治した。

治った怪我人たちはそれぞれガルムと寝ているアシェルにお礼を言つて、それぞれの家に帰つて行つた。

ガルムはアシェルを街長の妻に任せて、街長と供に執務室へと向かつた。

「・・・どうして光龍がここを襲つたのかわかるか？」

「いいえ。全く分かりませぬ」

「なあ、この街にもしかして光龍の祭具とかないか？」

「何故それを御存じなのですか？たしかにこの街には代々伝わる、光龍の角で造られた祭剣があります」

「光龍はおそらく、その剣から発せられる魔力を感じ取つたのだろう。それを街の者が光龍の子供かなんかを捕らえてると思い違いをして襲いかかってきたのだろうな・・・もし次があつたなら光龍に説明することつたな」

街長は納得したようにうなずいた。

「成程、承知しました。それをするのは街長である私の役目ですな。今度はお助けいただき、誠にありがとうございました。少ないですが、これをどうかお納めください」

そういうつて街長の老人は袋を差し出した。
じゅりじゅりと、金属の擦り合つ音がする。
袋の中身はお金なのだろう。

「それはこの街の復興に使うとい。その代わり、俺の戦い方や魔法のことは内緒にしておいてくれ。俺たちは旅をしている身だ。目立つようなことは避けたい」

「ありがとうございます。そのようなことでいいのでしたら喜んで」

街長は深く頭を下げた。

ドタドタドタドタ

「師匠！大変だ！この街をかなりの数の兵隊が包囲してゐる！」

琢磨のこの報告にガルムは首をかしげる。

「包囲？なんで入つて来ないんだ？入つて来ない理由なんてなからうに・・・」

『街中にいる賊どもに告げる！この街は完全に包囲している。直ちに武器を捨てて投降せよ！』

街中に男の声が響いた。兵隊たちの指揮官が『拡張』の魔法で街全体に呼びかけているのだ。

「賊だと？光龍を見ていないのか？厄介な・・・」

「わたくしが誤解を解いてきましょ」

街長が出ていいとするのをガルムは止めた。

「まつてくれ。タクマ。兵士たちの装備はどんな感じだった?」

「暗くてよくわからなかつたが、多分銀色の鎧で大層な槍を持つてた」

「旗はどんな紋様だつた?」

「龍に乗つた・・・騎士・・・だつたかな?」

「神殿騎士じやとー?馬鹿な、何で彼等がここにー?」

「確定だな。奴らはここに賊じやなく光龍がいるのを分かつて來たんだろう。しかし今はいなから、追い払つた俺たちを探しているな。逃げるとするか・・・それにしても最悪の状況だな。対光龍の装備を持つ神殿騎士が街の周りを囲う程いる上に、こっちには病人がいる。しかし今拘束されるわけにはいかんしなあ・・・」

琢磨は不安そう様子でガルムに尋ねる。

「師匠。どうする?」

ガルムは眼を閉じ深く考え、眼を開いて答えを返した。

「・・・・・・・・・・・・脱出するぞ」

そこからの行動は早かつた。

どこからか黒色のロープを出すとアシエルと琢磨に着させた。

アシエルは病人のため、ガルムが背負つて建物の屋根へ上つて兵士たちを見渡した。

「とてもない量だな。タクマ。俺たちはここから北にある港街へと向かう。だがそのまま北に向かつたら兵士も一緒に街を目指すだろう。だから一度西にある森に入つて北へと進路を変える。見失わずに俺について来い・・・つていつてもこの暗さだ。これを持つておけ」

ガルムは琢磨に腕輪を渡した。琢磨は何も言わずにそれをはめる。

「それは俺の魔力を感知して俺のいる方向を示してくれる。見失つたときはそれの示す方向を目指せ」

「ああ、分かった」

その頃、まったく姿を現さないガルム達に部隊の指揮官はいらだつていた。

(出て来ぬか・・・)

「構わぬ、第一から第五部隊は街に入り賊どもを探せ！怪しい者は全員捕らえよ！行け！」

多くの兵士達が動き始める。そこへ伝令が入る。

「閣下、街の屋根に怪しい影が！」

「来たか！どつちの方角だ！」

「西の門へと向かっております」

「各門に最低限の兵を残して残りは西門へ集中させよ」

(・・・動きが早いな。指揮官は出来る男のようだな)

ガルムと琢磨は兵士たちの陣が構成される少し前に西門へとたどり着いた。

一人は颯爽と兵士たちの間をすり抜けて森の中へと入っていった。

「陣が抜けられました」

「ええい！愚か者が！敵は何人だ！顔を見た者は？」

「敵は三人。一人は怪我人の模様で、一人が背負っていました。口一ツをかぶっていたのと、あまりの速さに顔を見た者はおりません」

「くそ！さすがにこの暗さの中、森の搜索は出来ん。街で目撃者を探せ！」

「は」

報告に来た伝令兵は天幕から出ていった。

指揮官は部下の愚鈍さに、座っていた簡易的な椅子を蹴飛ばした。
(いったい何者なんだ？やつらは・・・)

部隊を振り切ったガルム達は一夜にして森を抜けて港街へとたどり着いていた。

琢磨は何とか付いて来たものの、息も絶え絶えだ。

ガルム達はロープを脱ぎ、街の中心部に近い宿を取ることにした。夜も遅いため店主は不審な目を向けたが、ガルムが金を見せると途端に上機嫌になった。

最も高い部屋だったからだ。ガルムは当初、アシェルだけ別の部屋にしようとしたが、三人部屋にした。

アシェルの容態は悪くなつたかと思いきや、ガルムは振動をなるべく抑えて走つたため、特に変化はなかつた。

琢磨は装備を外してベッドに横になるとすぐに眠つた。

ガルムも窓から外を睨むように見つめると、同じように装備を外して眠ることにした。

何とか三人は神殿騎士の大部隊から逃げきつたのだった。

#1-7 (後書き)

短すぎると思つてたのに書いてみるとこの長さ・・・
当初はこの5分の一ぐらいだったんだけどなあ（笑）

剣の名は物語後半で明らかに！

ところで前回説明し忘れましたのでこっちで捕捉しますね。

魔法詠唱は全て『』で表します。
魔法名は全て「」で表します。

竜種についてなのですが、

翼竜種・西洋のドラゴンでいわゆる翼の生えたトカゲ
蛇竜種・東洋のドラゴンでいわゆる翼の生えた蛇

RPGの大半が翼竜であり、中国の青龍等は蛇竜に当たります。

次回は、『休息』です。

#1-8 旅人達の休息

カーテンの隙間から差した光が顔を覆う。

「う、ううと……」

額がひんやりとする。

手を当ててみると、濡れたタオルが掛かっている。
ついさっき変えた物なのだろう。

窓の傍には椅子に座つて外を眺めているガルムの姿が見える。
逆光の所為でアシェルからは顔が見えない。

体を起こしてベッドから出ようとする。

そこで気付いたが、質の高いベッドのようだ。

自分は毛布の上で寝ていたはずだがいつの間にベッドに寝かされたのだろうか。

それよりも荒れ果てた街にこんな豪華な場所があつたのかとアシェルは疑問に思う。

体を起こし、壁に背を預ける。その拍子にぬれタオルが額から落ちてしまつた。

ベッドの擦れる音に気がついたのか、ガルムは外を見ながら言つ。

「寝てる。まゝだ顔が赤いぞ〜」

言われたアシェルはようやく自分が風邪をひいているのを思い出し、
いまだに体が火照つてることにも気付いた。
熱のせいで思考がおぼつかない。

「お師匠様。」「は・・・ビリですか？」

ガルムはアシェルに近付いて布団を掛け直すと、濡れたタオルを額にのせなおした。

「ほら、寝てろって。・・・昨日の事は覚えてるか？」

「・・・はい。私、魔力切れで倒れたんですよね？」

「正確には魔力切れによる酔いと風邪の併発で、だな。お前が倒れた後な、街に神殿騎士が来たんだ。一人や二人じゃない。何百人って数がな。おそらく光龍の討伐に来たんだろうが、俺が追い払つたからな。目的を変えて俺たちを捕まえようとしたんだろ。光龍は危険なのに、それを倒した俺たちは何なんだって話なんだろつなあ。旅が始まつたばかりなのに捕まるわけにもいかなくてな。北にあるこの港街へと逃げてきたんだ」

ガルムは椅子をベッドのそばへ持つてきて座り、肩をすくめながら答えた。

「そりなんですか・・・。追つてきませんかね？」

「そこいら辺は安心しる。最初に西の森に逃げてから方向転換してきたからな。お前は心配せずに休んでろよ。今タクマに果物やら何やらを買いに行かせてるから」

ガルムはそりと再び立ち上がり机に向かい、何やら作業を始める。

戻ってきたその手にあるのはグラスに入った水と薄緑色の粉末だつた。

「ほれ、薬だ。街一番の薬師に調合してもらった薬だ。回復に向かつてゐると思つが一応飲んどけ」

アシヒルは体を起して薬と水を受け取るとまたにかんだ。

「私薬苦手なんですよ～、ははは」

サラサラ ゴクゴクゴクゴク

「ホツ

「う～、苦いですね、こんなに苦いの初めてですよ～」

若干涙田だ。

どつやらむせてしまい、再び口の中に味が広がつたようだ。

「ククク

再び水を飲むと、グラスをガルムに返した。

ガルムは薬を乗せてあつた紙を捨て、部屋に備え付けの台所でグラスを洗つた。

手を拭き、笑いながら戻つて來た。

「効能のある薬はどれも苦いもんだ。飲むのが嫌なら健康でいるんだな」

「は～い」

「・・・・・・・・ふう。あんな馬鹿な行為をしたんだ。本当ならお前を殴つてやりたいが、残念ながらと言つべきかお前は病人だ。

殴るのだけは勘弁しておこしてやるよ」

ガルムはため息をつき、ベッドに頬杖をついてアショルに呟く。

「・・・お師匠様あ」

「ん~?」

「・・・じめんなさい」

「もう思つてるんなうじつかり休んでしつかり治しなやー」

———SIDE琢磨———

琢磨はパンや卵や果実等を市場で買ひ、ホテルへと帰つていた。
(潮の香りがするな、港街だから当たり前だらうけど。海なんて何年振りだろ? 海魚食べたいな・・・買つて行こうかな? でももう持てないか。仕方ない、そのまま帰らう)

街全体に漂う潮の薰り。

向こうの世界ならば潮風で電化製品はすぐにダメになるのだろうが、そもそもこの世界には電化製品などは存在しない。
(そういえば、シャワーミたいに向こうに似た物がこいつすらもあるのかな?)

ふと琢磨は気付いたことがあった。

辺りの店をきょろきょろと見て回る。

「お~、兄ちゃん。何かいるか? 西海で獲れたこのファレスなんか

はどうだ？脂がのつててうまいぞ。刺身が一番だが、焼いて食べてもよしだ。1尾銅貨50枚でどうだ！』

魚屋の店主が声をかけて来る。

そんな声に隣の店主も声を割り込ませる。

「おいおい、そりゃほつたくらすぎだろー兄ちゃん、こっちは1尾銅貨30枚だ！」

「うへん、どうすつかなあ。そつこえれば干物売つてないよな？何でだ？」

店主は顔を合わせて互いに首をかしげる。

「何でつてそりゃあ・・・。『^{コールド}冷凍

〔コールド〕^{エンチャント}』の魔法があるしなあ。確かに冷凍のく付加〔エンチャント〕された携帯保存具、『魔道具』を買えない奴は干物を買つしかないだろうが、需要も少ないしなあ」

(ああ、そつか。魔法つてそんな口常的なものにまで入り込んでるんだな。確かに食糧を冷凍保存できるなら干物にする必要はないな。ならドライフルーツなんかもないだろうな)

「で、買つのかい？」

琢磨は苦笑して首を横に振る。

「悪いけど遠慮しておくよ

店主たちは残念そうな顔もせずに笑って、

「やうかいやうかい、次来た時は頼むよ

そう言うと他の客に愛想よく声を掛け、自分の構える店に立ります
り込んでいく。

(プロだな)

琢磨は苦笑して泊まっている宿屋に着いた。

キイ バタン

「あれ？ アシェル起きたのか？」

ガルムは本を読んでいた。

題名を見たが、見たこともない文字で書かれている。
本を閉じて机に置くと、伸びをしながら琢磨を迎えた。

「おお、帰ったか。アシェルはまた眠っちゃったよ。何かいいもの
あつたか？」

タクマは机に買つたものが入つた紙袋を置くと頬を搔く。

「うーん、どうだろ？」この世界の物ってよくわからないからな。とりあえずパンと卵と甘そうな果物は買ったよ

ガルムはひとつひとつ物を袋から出してゆく。

「ハルの実と、フツの実、ナルベの実・・・おおーこれはレンドの実か！いいもの買ったなあ。かなり珍しい実なんだぜ」

「へえ、そうなんだ。良い買い物したな・・・なあ師匠、エンチャント付加って何だ？」

ガルムはハルの実を一つナイフで切り、半分を琢磨に渡す。一口かじると、

「ん~？言つてなかつたつけ？エンチャント付加は人や物に魔法を付加する事だ。付加される物は様々だ。人に付加するならば『強化魔法』、剣に付加すれば『魔法剣』、道具に付加すれば『魔道具』って呼ばれる。ちなみに俺のコートのポケットも魔道具だ。ポケットの中は違う空間と繋がっていてな。かなりの量の物が入るようになつているんだ」

「だから懐からいつぱい物が出てきてたのか。その剣も？」

ガルムは紐で封印された剣を見つめる。しかしそくに視線を戻し、果実をかじる。

「・・・そうだな、これも魔法剣だ」

琢磨も果実をかじる。まだ青いリンゴのような酸味が口の中に広が

る。

(あ、おいしい……)

「そのポケットって一般的なものなのかな?」

「いや、これはギルドのヒクラス以上の物が持てる魔道具だ。一般的の奴らが持つのは重さ軽減のポケットだけだな。この世界の金は重いから、少しでも楽になるようにギルドが広げたんだ」

「……俺のポケットは?」

「……普通だな」

「……何で?」

「……忘れてた。ちょっと待つてみ」

そつとガルムは琢磨のポケットの前で複雑な印を切る。
すると立体的な魔法陣が生まれ、ポケットに吸い込まれていった。

「お前は最近Bクラスになつたからな、重さ軽減のエントチャント付加だけだ」

琢磨は試しにポケットに金の入つた袋を入れてみた。

「全然違つた

「違わなくちや困るけどな、はつはつは

もだつ

アシヒルが一人の方を向いた。
目をこすり、目をしばたたく。

「タクマ……帰つてきてたの？」

「ん？ ああ、すまんな。起しちまつたか。ちょうどいい、晩飯にしよ。アシヒル、食えるか？」

「はい。食べられます」

夕食はガルムが作つて三人一緒に食べた。
夕食後、ガルムは言った。

「明日も宿は取つておいた。一応明日も休養するとじよ。明後日以降は様子見で」

「ああ、分かつた」「はい、すみません」

「謝るなよ、」いつの時は『ありがと』だろ？

「……ありがとござります」

ガルムは満足そうにうなずいた。

「つむ、それでいい。じゃあお前らいつの間にか夜も遅いし、早く寝よう～」

そつ言ひと「一テを羽織り、出でこひとする。

「あれ？ビニが行くのか？」

「ちゅうと酒を飲みにな。最近飲んでないから飲みたくないなってな
あ」

「こつてらっしゃいです」「こつてらっしゃい

ガルムは手を上げて答える。

「ん、こつてきます。そしておやすみ

「おやすみなさい」「おやすみ」

一人は言われた通り早く寝ることに決め、

ガルムは酒場へと消えていった。

#1-8 旅人達の休息（後書き）

潮風で電化製品が云々って書きましたけど、電化製品以外にも被害はありそうですが海辺に住んでないのでそこら辺は分かりませんでした（笑）

解説 エンチャント

＜付加＞について

人 + ＜付加＞ = 強化魔法

武器（例：剣）+ ＜付加＞ = 魔法剣

物 + ＜付加＞ = 魔道具

蛇足：

Q・お酒は何歳から？

A・決まってませんが倫理的に15歳です。それ未満は店主は出しません。が、何となく飲ませようとする店主もいます。

Q・ガルムの呼んでいた本は？

A・魔法書です。魔法書は魔法について書かれた本全般を指し、読んで発動する物、ただ知識として書いてある物、補助するための物の3つがあります。ちなみに今回読んでいたのは2番目の、所謂ただの本で、古代語で書かれているために琢磨には解読できませんでした。

次回、『氷雪の大地』

山によつて物理的に、雪によつて精神的に閉じられた島に赴き・・・。

ミス削除により後日割込み投稿します。
しばらくお待ちください。

ノートリオール平原の北にある、ウェルディ司教領ハーゲンの街。ウェルディ領の中でも3番目に大きいこの街は今、神殿騎士の大群に囲まれていた。

『神殿騎士』

聖王国指導者である教皇直下の騎士団の成員である彼等は、教皇の鎮座する大神殿の警備を残し、このハーゲンへと向かっていた。

理由は、「ハーゲンの町にて現れる光龍を討伐せよ」何故予想の形となっているかは、世界でも教皇のみが持ちうる特殊な能力が関係する。

【預言者】
〔プロゴニクション〕

歴代教皇は全てがこの二つの名を持つ。

司教の時は預言できず、教皇になつた途端に予言が可能になることから、

聖王国に伝わる何らかの秘儀ではないかと思われている。

今回もまた、教皇が光龍の出現を予言してすぐさま神殿騎士を派遣した。

討伐隊の指揮官の名はレイヴン＝アーカリー。

聖王国東部に私領を置く女司教キュレル＝アーカリーの三男坊である彼は、

3人の神殿騎士団の最大幹部、『慧光騎士』の一人である。

教皇こそ使命制だが、司教や司祭はコネのために長男や長女が継ぐことがある。

しかし彼は三男の為、司教を継ぐことを早々に諦めて体を鍛えてい

た。

それが功を奏して、神殿騎士団長である【真騎士】ゴッズ＝ウェルグレーにスカウトされた。

レイヴンに出世欲は無かったものの、卒無く仕事をこなしたことでも、気がつけば慧光騎士へと昇格していた。

レイヴンは教皇の勅命を賜ると、

すぐさま神殿騎士500人、聖王国騎士団・歩兵団7500人の計8000人を連れて大神殿を出立した。

ノートリオール平原の中心まで来た時になってハーゲン上空に浮かぶ光龍を確認した。

光龍はガルムとの戦いによつて怒り狂つていたが、それを知る者はいない。

騎士たちにはただただ光龍の神々しさに恐れおののいていた。ざわめきは伝染し、神殿騎士団までもがざわつき始めていた。

(これはまずいな。それにこの進軍速度では遅いかもしだぬ)

レイヴンは従者から自信の槍を受け取ると、それを大きく空へ掲げた。

「聞け！聖王国の戦士たちよ！」

流石の精鋭たちである。

各隊の隊長達はすぐさま部下を黙らした。

「これより作戦を開始する。リールウェル大隊長、作戦を言え！」

「はっ！」

長さ3mを超える槍を携えた1人の男性騎士が出てきた。かなり若い男だ。

大隊長は神殿騎士100人、王国騎士・歩兵1500人を束ねている。

彼はレイヴンに一礼した後、団を向いて声を張り上げる。

「今回の最優先事項は光龍の討伐である！人民の優先は余裕があるのであれば良し、無いならばやるな！邪魔であるなら殺して道の脇に置いても良し！」

最後に言葉に神殿騎士以外がざわめく。当たり前である。彼等は光龍を倒して民を助けるために来たのだから。

それにもかかわらず、民を殺してまで光龍を倒すなど本末転倒もいいところである。

これを鎮めたのはレイヴンであった。

「静まれ！忘れるな！今回光龍を逃してしまったならば、この街の民はもちろん、貴様らの故郷にいる家族全員が危険にさらされるのだ。貴様らは何のために王国に忠誠を誓つた？家族や恋人、友人や近所の者たち、会つたことも無い聖王国全員を守る為だろうが！覚悟無き者は去れ！覚悟を決めた者のみ我について来い！街に到着次第順次光龍討伐作戦に参加せよ！」

そう叫ぶとレイヴンは馬をハーゲンに向けて走らせ出した。

「全軍、俺に続けえ——！」

「「「「「「「「「はっ！……」「」「」「」「」「」」」」

レイヴンの激励が効いたのか、全員が声を上げて走り出した。

(結局、民を殺すのには変わりない。今回の作戦で犠牲になるハーゲンの民たちよ。すまんが俺たちは立ち止まる訳にはいかねえ。怨むなら怨め、しかしそれでも俺は後悔しない、悪く思うな)

レイヴンは眼を伏せ、心の中で呟いた。

そこに一頭の馬が並ぶ、先程の大隊長リールである。

「・・・大丈夫ですか？ レイヴン様」

レイヴンは眼を開け、リールウェルの方は向かずに、ただ前を向く。

「ああ、大丈夫だ。心配をかけたな、リール」

「いえ、貴方様に頂いたこの命とこの名。全ではあなた様のために」

時はさかのぼつて彼らが初めて出会つた時

リールウェルは元々孤児であつた。

生きるために中流階級を襲つて得た金で過ごしていた彼は、いつものようにある男を襲つた。

実はその男は内乱を企てていた組織の密偵であつたのだ。

孤児の中ではかなり強かつた彼であつたが、

当然ただの孤児である彼が敵うはずもなく、殺される寸前であつた。そこに割つて入つたのが、当時まだ神殿騎士団大隊長であったレイヴンである。

レイヴンは密偵の両腕両足を切断して気絶させて捕まえた。

その男を部下に運ばせて、怪我をした彼に声をかけた。

「君、大丈夫か？」

「ああ、あんたは？」

「俺の奴はレイヴン。君の奴は？」

「俺に・・・孤児の殆どに今前なんて無いよ」

「やうか。すまない。・・・とつあえず、君を保護しよう！」

「なんでだ？」

「さつきの男の仲間が君を見ている可能性がある。」そのままではいつ襲われるかもわからない

「孤児なんてそんなもんさ、社会の『』だから殺されても誰も気にしない」

「そんな事はないぞ」

「あんたに何が分かるんだよーなら俺を拾つてでもくれんのか！」

彼は拳を握りしめて涙を流していた。
しかし、そんな彼にレイヴンは驚くべき言葉を掛けた。

「君が本気で鍛練にのんで騎士になるところのなら、喜んで君を育てよう。どうする？来るか？」

「・・・あんたにそんな権限があるのか？そんなに若いのに」

「大丈夫さ。これでも俺はそこそこ偉いんだぜ？それに、俺に権限が無くとも君が強くなってしまえば騎士になれるだろ？」

「本当にいいでいいのか？それなら俺は・・・行きたい！」

「ああ、勿論だとも。それなら君の名を付けないとね。そうだな、リールウェルってのはどうだ？」

「リールウェル？」

「そうだ、意味は『雷煌』。雷のように速く・強く煌めく、って意味だ。さあ、行こう」

レイヴンはこの事件で捕まえた男から組織のアジトの場所を吐き出させて、それを殲滅した。

その功績からレイヴンは慧光騎士に昇格する事になった。
リールウェルは騎士見習いとして正式にレイヴンに弟子入りし、
礼儀作法をレイヴンとレイヴンに仕える執事達に学び、

国立騎士育成学校に入学、さらには史上初めて飛び級・首席卒業した彼は、

同じく史上最年少の若さ、18歳で大隊長に就任した。

ちなみに、レイヴンは他国の貴族に相当する司教家の出であるため学校には通わなかつたが、

大隊長には当時の最年少記録である31歳を大幅に下回る21歳で就任していた。

現在レイヴンは34歳、リールウェルは23歳である。

「リール、恩を感じる必要などない。お前はお前の道を進め」

「いいえ、私は一生レイヴン様について行きます、行かせてください」

「お前は・・・・・あれは何だ？」

間もなくハーゲンの町に着くという所で、黒い閃光が光龍を襲った。光龍はその攻撃を受けて北の方へと逃げ去つて行った。

(何かいるのか?)

それを厳しい目で見たレイヴンは

「伝令兵!」

1人の騎馬がリールウェルとは反対側から近づく。

「はっ!」

「全軍に通達。第二大隊を南門、第三を東門、第四・五を西門で展開し、各隊それぞれ連携して街を完全包囲させよ。俺は第一大隊とともに北門にて本陣を作る。街から誰も出さず、誰も入れるな」

連絡兵は一礼し、役目を果たしに行つた。

「リール!お前は一旦自分の隊を率いて北門を塞げ。俺は先に街に入る」

「了解しました。御武運を」

リールは減速して指示を出しに戻った。

レイヴンはさらに速度を上げ、単騎で街を目指す。
だんだんと街に近付くにつれて街の様子が明らかになつて行く。

(馬鹿な…これは一体…?)

止まることなく街へ入ったレイヴンは、止まらざるを得なくなつた。
街には花が咲き乱れ、街は平穏そのものであった。

しかし、そんなはずはないのだ。

つい先程まで光龍ガ暴れ、何かと戦っていたのだ。
平穏であるはずがない。

レイヴンは危険を感じて急いで街から出る。

そこに到着した第一大隊は副隊長の命令のもと、陣を敷く。
隊長であるリールウェルは引き返して来たレイヴンを見やると、
すぐに彼の元へと訪れた。

「レイヴン様！如何されましたか！？」

「作戦変更だ」

突然のこの言葉に事情の知らないリールウェルは疑問の声を上げる。

「は？」

レイヴンは再び伝令兵にいくつかの指示を出すと、リールウェルとともに第一大隊へと向かつ。

レイヴンは本陣の天幕に中隊長以上の者全員を集めて説明を始める。

「お前たちも見たように、光龍は去った。しかし、悪いことにあの街に賊がいることが分かった。それも、おそらく光龍と同等クラスの者たちだ。だが、安心しろ。おそらく奴らも光龍との戦闘で疲弊している筈だ。よつてまずは投降を促す。しかし投降しないならば街へ入り拘束する」

恐れながら閣下、と一人の中隊長がレイヴンに尋ねる。

「どうして賊がいると御思いになつたのでしょうか？」

「お前らにもすぐに分かることだらうから先に言つておく。あの街はなぜか壊れていない。わかるか？この異常が。光龍との戦闘があつたにもかかわらず、花も散らず、家も壊れていない。おそらく何かの古代魔法の一種なのだらう、それもかなり高度な」

「閣下。それならばその者は賊などではなく・・・」

「お前の言いたいことは分かる。だが考えてみる。そのような者たちが我々は何も知らず内に国内に入り込んでいるのだ。奴らが聖王國に牙をむけばどうなるか。無論リスクもあるう。しかし、俺はリスクのある方を選んだ。異論は認めぬ、しかし何か意見はあるか？」

ありません、と全員が言つ。

レイヴンは陣についても2・3の指示を出し、

「では各隊にて準備せよ。塀の上の監視も怠るな。逃げるとしたらそこからだらうからな」

隊長格全員が去つた後、レイヴンは一人思考をめぐらす。

(さて、相手はどう出るのか・・・)

暫らくすると、一人の兵士が天幕に入ってきた。

「閣下。第一から第五、全ての大隊の包囲陣が完成しました」

「魔法部隊に『拡張』の魔法の準備はどうだ

「それも既に」

「分かつた。下がれ

天幕から出ると、各兵士が敬礼をする。

「敬礼は構わん。魔法兵」

すぐにロープを着た1人の兵士が彼の前でひざまずき、1つの石を差し出す。

「閣下、このヤクシ石をお使い下さい。これに向かって話すことでも街中に閣下の御声が響き渡ります」

レイヴンはヤクシ石を掴むと陣の前に出た。

彼の周りには精銳10人と魔法隊隊長が周りに目を光らせている。

リールウェルが無理やりつけた護衛である。

レイヴンは街にいるであろう者たちに通告する。

『街中にいる賊どもに告げるーこの街は完全に包囲している。直ちに武器を捨てて投降せよー』

そう言つと、ヤクシ石を魔法隊隊長に返して悠然と天幕へと戻る。

「リールウェル、何かあつたらすぐに伝える」

「は」

レイヴンは再び天幕に用意された椅子に座り、精神統一を始める。

天幕内はもとより、外も静かである。

しばしば兵士の着る鎧が擦れてがしゃがしゃと鳴るだけだ。
あまりに動きが無いために彼はいら立っていた。

元々彼は行動派であり、じつと耐えるのは苦痛であるのだ。

(出て来ぬか・・・)

レイヴンは伝令兵を呼んだ。

「構わぬ、第一から第五部隊は街に入り賊どもを探せ！怪しい者は全員捕らえよ！行け！」

多くの兵士達が動き始める。そこへ伝令が入る。

「閣下、街の屋根に怪しい影が！」

「来たか！どつちの方角だ！」

「西の門へと向かっております」

（西門だと！？国外へ逃げるつもりか！となるとシャルベ王国の手の者か）

「各門に最低限の兵を残して残りは西門へ集中させよ」

「陣が抜けられました！」

（馬鹿な！早すぎる！）

「ええい！愚か者が！敵は何人だ！顔を見た者は？」

「敵は3人。1人は怪我人の模様で、1人が背負っていました。ローブをかぶっていたのと、あまりの速さに顔を見た者はおりません」

（3人か。2人は光龍と戦った者で、怪我しているのは魔法士で魔力切れだろうな）

頭の中では冷静でも、言葉には冷静さを出せなかつた。

「くそー。さすがにこの暗さの中、森の搜索は出来ん。街で目撃者を探せ！」

「は

レイヴンは第4・5大隊の失態に思わず椅子を蹴飛ばした。

(いつたい何者なんだ?やつらは……)

「リールウェルはいるか!?

すぐにリールウェルが現れて膝をつく。

「元気だ

「これから街に入る。おまえはこの場を副隊長に任せとお前も来い

「は。他には何人入れましょう?」

「街の掌握に100人、俺とともに来るのが後5人。急いで選抜して連れて来い」

「ではこの者達を

そう言つて示したのは先程レイヴンを守っていた者の半分だ。

「誰でもかまわん。行くぞ」

「「「「「はつー」「」「」」

そう声を張り上げ、レイヴン等7人は街へと入る。

番外編 #19 慧光騎士（前篇）（後書き）

まさかの2分割（笑

長くなつた理由は他でもありません。

リールウェルのせいです。

元々彼はモブキャラ（いわゆる兵士A）ですら無かつた人です。
即興で作つたにもかかわらず愛着が半端なくあります。
過去編も作つてしましました。

慧光騎士

神殿騎士団の最高幹部

クラスは、

真騎士 > 慧光騎士 > 神聖騎士 > 聖騎士 > 神殿騎士

騎士見習い

国立騎士育成学校生もしくは各同教・司祭出の見習いの事。
彼等は約1年かけて神殿騎士になるか王国騎士になるかを選ぶ。
ちなみに、ほとんどは王国騎士を選ぶ。
理由は神殿騎士は人数が圧倒的に少なく厳しい道のりだから。

騎士の人数

真騎士	1人（人数固定）
慧光騎士	3人（人数固定）
神聖騎士	10人（人数固定）
聖騎士	15人（上限なし）
神殿騎士	多数（上限なし）

二つ名について

世間に言われるもの、国から下賜されるもの、ギルドから下賜され

るものといいくつかある。

【】にて表示

人数は各国に数人いるかいないか

ギルドクラスSS以上は全員、しかしクラスAでも二つ名持ちの者はいる

次回、・・・題は今回と同じ

ガルム達が逃げた後のレイヴンの行動について

レイヴンはこの街に何があったのか知ることが出来るのか！？

リールウェルと掌握兵5人を連れたレイヴンはとある家の前にいた。

レイヴンは槍の代わりに装飾の施された剣を持つていた。

慧光騎士に任せられた時に教皇自らが手渡した剣である。

これには『守護』の魔法が付加（エンチャント）されており、

中級魔法でさえも無効化する。（魔法については後話にて紹介）

装飾部分はきらびやかであるが無駄のない造りになっている。

「リールか？」

レイヴンの問いに答えたのはリールウェルである。

「は。ここが街長の屋敷です」

レイヴンは大きな門を開けて屋敷の庭に入る。

中から様子を見ていたのか一人の女性が出てきた。
ふくよかな体つきをした家政婦のようだ。

「兵士様方、一体何の御用でしょうか？」

リールウェルは一步前に出て言う。

「我々は先の戦いについて街長に話を聴きに来た。街長はここにいるな？中に入らせてもうつぞ」

そつと置いて女性をじけて中に入つて行こうとする。
その行動に女性は慌てる。

「ちよ、ちよつと待つて下せい…」

レイヴンと護衛たちは止まり、
リールウェルだけは振り向いて背中から愛槍を引き抜き、
女性の首筋に当てる。

あまりの恐怖に女性は身体をこわばらせる。

「ひつ！」

「何か後ろめたいことでもあるのか？」

「ビアンカ！構わぬ！」

一人の男性が屋敷から出てきて声を上げた。

レイヴンが後ろからリールウェルに声をかける。

「リール、槍をしまえ」

「は」

リールは槍をしまったが目つきは鋭いままである。

「神殿騎士の方々、私が街長です。どうぞ中へお入りください。ビアンカ、お茶を用意してくれ」

「は、はい！失礼します」

ビアンカという名の家政婦は一礼して屋敷へ駆けこむ。

レイヴンとリールウェルも屋敷に入ると、街長に来賓室へと案内さ

れた。

掌握兵達は屋敷の外で待たせている。

レイヴンが街長の前に座り、リールウェルがその後ろに立つた。

街長は、レイヴンの無表情の威圧に冷や汗を流していた。

「そ、それで・・・何をお話すればいいのでしょうか?」

「光龍が逃げ去った理由。先程この街から逃げた者は何者か。この街は壊れていない理由の3つだ」

実際はレイヴンも大体の予想は付いている。

光龍が逃げ去ったのは誰かが追い払ったから。

追い払い逃げた者はおそらくシャルベ王国の手の者。

(理由は分からんが、王ではなくおそらく反乱分子の類だろうな)
街が壊れていないのは、その者達が何らかの古代魔法を使ったのだろう。

レイヴンは街長が震えているのに気付いた。

(齎されたかもしけんな)

ようやく街長の口が開いた。

「光龍が逃げ去ったのはとあるものが戦つて追い払ったからです。しかし、彼が戦っていた場所はここから遠く、顔を見ることは出来ませんでした。そしてこの街は彼らの戦いで、確かに壊れていました。光龍が逃げ去ってすぐに地面が光り、まるで時間がさかのぼつたように街の全てが元通りになつたのです。・・・これが私の知る全てです」

ちょうどビアンカがお茶を持ってきた。

街長とレイヴンの前にお茶を置き、リールウェルにも渡そうとする

が、彼は断つた。

「光龍と戦ったのは1人といつたな。その者について分かる情報を、分かることでいい。話してくれ」

「は、はい。髪はおそらく暗い感じの色で、武器は剣、そして、闇魔法を使っていたと思います」

「何で闇魔法だと思った？」

「光龍が何回か黒い衝撃波のようなものを喰らっていたのです。それで闇魔法かと・・・」

レイヴンはソファーに身を預けてしばし考える。

(嘘は言つていらないだろうが、予想以上に大事な情報が少なかつた。その代わり分かつたことと言えば魔法剣士であることか。街を直したのはおそらく古代魔法の一種である時魔法だろう。さらには黒い衝撃波、これもおそらく闇魔法じゃなく古代魔法の一種だろう。古代魔法を使う魔法剣士・・・絞り込めばいいが、おそらくこのクラスの者は情報を消しているだろうか厳しそうだな)

「分かった。もういい、ここにしばらく光龍の復讐を防ぐためにいくらかの兵を駐屯させてもいい

そう一言言つと、部屋から出てこいつとする。
だが、レイヴンの背中に声が掛かつた。

「お待ちください。ここから交渉とさせていただきませんか？」

レイヴンはため息をつく

(やうにとか、齎されていたのか、はたまた意図して隠していたのか)

「……いいだろ。まずはそちらのカードを見せてもらおうか」

「光龍と戦った者の身体の特徴と弟子2人の名前です」

「交換したいカードは何だ?」

「私の娘と姪を国立修道教導院へ推薦してもらいたいのです。おそらく今回の事件で私の立場では入れてやることが出来ませんから…。」

「それぐらこまじつとこつ」とは無い。それ以外は?」

「2人の学費の免除をお願いしたい」

「良かう。俺が教導院長に口添えをしてやる」

「あらがとうござります。それではまづ…」

数十分後、レイヴンとワールウェルは屋敷から出て來た。

「中々良い情報を手に入れましたね」

「ああ、これで大分絞り込むことが出来る。教皇様もお喜びになるだろう」

そう話す彼等は2人の少女達とすれ違う。

「アスホ、早くお父様の所へ行こ。」

「待つてよ、リコ。」

リールウェルは振り返り少女達が街長の屋敷に入つて行くのが見える。

「あれが例の娘と姪ですかね？入学していじめられなきゃいいですけど」

「教導院はそんなにきついのか」

「レイヴン様は入つてなかつたんでしたよね。普通はいじめなんかはありませんけど、おそらく修道院も大商家や貴族達が殆どです。上下意識の強い貴族たちや、商業的価値を望む商家の子供達は異質を嫌います。この街は、この国でもそこその大きさの街ですが、異質なことには変わりありません。はたして無事に卒業できるのか・・・。それ以前に使える子になるんでしょうかね？」

「知るか。この国に役立つなら出自は何でもいい。^{「」}食だらうが貴族だらうがな」

「もしならなければ？」

「お前の言ったようにその教導院の奴らが國によつて死ぬだけだ」

そう言い捨てるレイヴンは足早に本陣へと帰つて行く。

本陣へ帰り、ある程度の駐屯の指示を出した後に大神殿へと帰還す

るためだ。

リールウェルは追いかけながら考える。

(せめてレイヴン様に殺されることがないことを祈ってるよ。
頑張れ、
少女達!)

番外編 #21 赤の男と縁の少年

――ハルナ商連 とある孤島――
大陸から船に乗ること丸一日。

その孤島はジャングルのように縁があふれ、
そのまん中にはなだらかな丘を有している。

「なあおい、本当にこんな辺鄙なところにいるのか？」

「うん。ギルドからの情報じゃあ、この島の中央丘にいるらしいよ」

「情報はどうからなんだ？」

「情報班だと思つよ。民間人はこの島に近寄らないらしいし」

2人の見た目は真逆であった。

1人は燃え盛るような赤髪を持つ男。
ポケットに手を突っ込んで悠然と歩く。
それとは対照に
もう一人は映える緑髪を持つ少年。
スキップしながら進んでいく。

しかし2人にも共通する部分はあった。
まずはお互い丸腰だということ。水すら持つていなかつた。
そして、異様な島の進み方である。

赤髪の男は行く道をさえぎる植物を全て燃やしつくす。

緑髪の少年は逆に植物がまるで生き物のように少年をさけしていく。
そう、2人は船を下りてから目的の丘まで文字通りまっすぐ（・・・

・) 進んできたのであった。

2人はこの島について初めて立ち止まっていた。

「丘はこの先だね」

少年は地図を見ながら男に続けて言つた。

「で、どうするの?」

眼の前には巨大すぎる大樹が丘までの道をふさいでいた。
回り込もうにも大樹の周りは、これまた見事なほど大きな^{いはう}荆^{くば}が張り廻らされている。

「触つたら痛そうだねえ」

のほほんと少年は言つた。

「関係ねえ。燃やすぞ」

ギロリ ボウツ

男は今だポケットに手を突つこんだまま、
睨んだだけで大樹とその周りの荆を燃やした。
術式・魔法名破棄という最上位の高等魔法である。

それを見て少年は御機嫌になる。

「あははっ。聞いた？聞いた？」ボウツ、だつて。おもしろい

大樹や荊が完全に燃え尽きたことで火が消えた。

「行くぞ」

「うん」

森を抜けて丘に着いた2人はとりあえず頂上に登ることにした。

「はてさて、目標の魔物はどうしているんだろ？」「

「あれじゃないのか？」

男が顎で示した先にあるものは、黒い不気味な物体だった。

「あー、それっぽいね。近付こうか

2人は先程と変わらない速さでゆっくりと近づく。
だんだんと魔物の姿が明らかになってきた。
大きさは50m程と魔物の中でも大きい部類に入る。

形はスライム、ただし黒と紫がぐちゃぐちゃに焼き混ざった感じ。
それに何か変な模様や異物が突き刺さっている。

魔物との距離が200mを切った所で少年が男を呼び止める。

「気持ち悪い魔物だね～。それじゃあ貰った資料を読むね。え～と
ねえ・・・

『体表はスライム状。色は黒と紫色である。体は定まっておりず、

触手を伸ばして攻撃していく。魔法攻撃は確認されていない。元の質量と触手の量の質量が一致しないために何らかの特殊能力を有している模様。確認されている中では触手の攻撃範囲は最大で50m。突き出ている人間のような頭や手足は何かは不明。体の形からスライム系統と思われるが、文献の中でも確認されていない。名称不明。クラスは被害の大きさから暫定的にクラスSとする

・・・だつて「

「わからねえ」とぱつかだな

「文献にも出てないってことは完全な新種なんだね。・・・あ！」

「どうした？」

「副総裁からのメモが挟まつてた」

「何て書いてあるんだ？」

『必ず滅殺して下さい。P・S・名前の案があれば命名して貰つてもかまいませんよ』

2人の目つきが変わる。

男は唇がつりあがり、

少年は眼を輝かせる。

「すゞいすゞい。」これってぼくが命名すれば未来に名前が載るんだよね？ね？僕が決めて良い？」

「いいぜ。その代わり、バル、俺にあいつを倒せろ。お前は手を出すな」

「別にいいよ。じゃあ僕はガイルの戦いを観戦しておくれ」

「それで、何かいい案があるのか？」

「うん『ヘカトンケイル』って書いたのはどう?」

「どうこいつ意味だ?」

「『百頭百足』って書いて『ヘカトンケイル』って読むの。分かりやすくていいでしょ?」

「確かに。誰にでもわかる名前だな。・・・さて、行つてくる

ガイルは勢いよく丘から走り降りて百頭百足ヘカトンケイルに肉薄する。
ポケットから手を出して拳に炎を纏わせ、頭の一つに殴りかかる。

パキッ ズルリ

ガイルは側にあつた他の頭を蹴つて距離を取る。

笑みは崩れず、大層嬉しそうだ。

(頭はパーツの一部で痛覚は無し。スライム状の体表は衝撃を吸収するけど炎は効く)

いつの間にか背後に回り込んでいた触手がガイルを掴もうとするが、死角はない。

半回転して後ろ回し蹴りを触手の中ほどに叩きつける。

触手は弾かれて地面をバウンドした。

(触手は液状じゃなく、滑ることもない。ジパングで戦つた『大王イカ』の劣化版か)

ガイルは眉をひそめる。

「弱えな。期待はずれだ」

触手は2本3本10本と増えていくが全てが体術だけで防ぐ。

「団体^{すうたい}がでかくて動けねえんだろ? 身軽にしてやるよ」

殺気がガイルからほとばしり、攻撃が止む。

ガイルは50mほどまで距離を取つてポケットに手を突っ込んで、地面にかかと落としをする。

「く噴火^{イラフション}」

大地が震える。

百頭百足^{カトシケイ}の背後の大地から溶岩^{カトシケイ}が噴出し、

1000度を超える溶岩は百頭百足^{カトシケイ}を熔かし尽くそつと包み込んだ。

ガイルは一瞥もくれずに踵を返してパルの所へと帰る。

パルは何かに気付き、ガイルに叫ぶ。

「ガイル~。まだ終わってないよ~」

その言葉にガイルは振り向いて百頭百足^{カトシケイ}を見る。

溶岩がおさまり煙も風で流れしていく。

よく見ると、固まつた溶岩がうごめいている。

パキッ パキパキパキ

固まつた溶岩にひびが入り、中から百頭百足^{カトシケイ}が出てきた。
大きさは先程の約半分、色や形に変化はない。

ガイルは自分の感情が高揚しているのに気付いた。

(まさか能力はそれだけじゃないだろ？いや、待てよ。小さくなるって事は核があるのか)

「〈炎斧・蒼〉」

魔法を唱えるとガイルの手に蒼い斧が握られていた。

柄から刃まで、全て炎で出来た斧である。

ガイルはそれを器用に使い、触手を切りながらも本体を少しづつ削つていった。

本体が5mを切った時、激しかった触手の攻撃がピタリと止まる。

これにはガイルの動きも止まる。

ブルブルと小刻みに百頭百足は震える。

(・・・何だ？)

百頭百足は動きを再開した、と思つたら触手全てが本体に戻つて行つた。

ガイルは変則的なその動きに本能が警鐘を鳴らす。

炎斧を霧散させて大きく距離を取る。

そこにバルも走つてやってきた。バルも何か感じたのだ。

「なにがあったの？」

「分からん。だが何か起ることは確かだ」

震えていた百頭百足の体が急にはじけ飛んだ。

出てきたのはスライム状の身体では無かつた。

そこには、漆黒の色をした球体で、それは宙に浮いていた。

「何だあ、ありや？」

「さあ？」

「何でもいいか。戦つてれば……」

そこまで言つたガイルとパルは絶句した。
謎の球体の中からBクラスのロツク鳥・ワイバーン・トロル達が現
れた。

「なあ、あれって……」

「うん、間違いないよ。あれは空間転移の時に起きる現象だよ。つ
まり……」

一拍置いてパルは続ける。

「あの魔物はどこからか転送されて來た。多分これを副総裁は知つ
てたんだよ。だから僕達に完全なる滅殺を依頼してきたんだ」

ガイルの表情が厳しくなる。

「…………遊びは終わりだ。パル、手伝え。Bクラス達を殲滅、
ヘカトンケイド
百頭百足を滅殺する」

「わかつた。いつものやつだね」

パルはその場でしゃがみ、両手を地面につける。

「『植物たちよ。あの魔物たちを束縛してへく_{バインド}束縛・樹へ』」

ボコボコボコボコボコ

地面から荊が生えて魔物たちが捕まつて行く。

飛行種は高度を上げるが、それよりも速く荊は伸びる。

荊は魔物を捕まえるだけでなく、特殊な紋様を作り出す。百頭百足
を中心とした魔法陣だ。

「魔法陣完成　『母なる大地より生まれ出でよく幻惑花ダズリーラン』」

魔法陣が緑色に輝き、出現したのは1つのピンク色のつぼみ薔薇。

その薔薇は、花開くと大量の胞子が飛び出した。

胞子を吸い込んだ魔物は同志討ちを始める。

さらに胞子は地面に着くと同時に薔薇が生まれ、また胞子が飛び出す。たつたの10秒で花の数は50を超えていた。

「そろそろいいよー」

バルが振り向くと、腕を空に掲げ、その腕に小さな太陽を宿すガイルの姿があった。

「『炎にて現れし光の柱よ。彼の者を滅せゝコロナ』」

ガイルは小さな太陽を空へ放つと、2人は全速力で場を離脱する。数秒後、空がチカリと光った。

光はだんだんと光量と大きさを増す。

空より飛来した光の柱は寸分違わず百頭百足に当たった。

その時、世界が震えた。

数分後、その島に立つのはガイルとパルの2人だけであった。

光の柱は『コロナ』

温度は100万度近くであらゆる物を熔かし尽くす。

そんな代物がしまに直撃した結果、百頭百足（ヘカトントケイ）は消滅し、

島は8つに別れた。

その衝撃波で幻惑花の胞子が飛び散り、島中に花が広がったのだ。さらにコロナの炎が胞子に誘爆し、粉塵爆発を引き起こした。

今炎が出ていないのはこの島にはもう燃えるものが存在していないからに他ならない。

フッと、2人の前に黒装束を着て黒いフードで目以外を隠した一人の男が現れる。

男はすぐにひざまづき、

「御一方、依頼完了お疲れ様です」

「情報班か」

「あはは～、今回は本当に疲れたよ～。で、どうしたの？」

「新たな依頼です」

「誰からか教えてくれる？」

「副総裁からです」

ガイルはため息を吐く。

「はあ～、人使いの荒い奴だぜ。」

「場所は？」

「クラリー聖王国です」

#22 氷雪の大地（前書き）

旧19話。誤つて削除してしまったため、
内容が結構変わっています。
申し訳ありません。

#22 氷雪の大地

クラリー聖王國の最北東、つまりはガルディア大陸の最北東には1年中雪の降り続く場所がある。

ケーラボラス山脈

内地と外地を2つに分けるこの山脈は、雲よりもかなり高い位置に頂上があるらしい。

しかしそんなところを通り抜けても外地へと抜ける道は存在する。

エマニュエル洞窟

数百年前に、世界を股に掛けた冒険家であるエマニュエルが発見した洞窟である。

3人はその洞窟で焚き火を囲んでいた。

琢磨とアシェルはなれない寒さに体を震わしていただため、今はガルムに渡された毛布に身をくるんでいた。

ガルムは壁にもたれかかり、焚き火を調節しながらため息を吐く。

「まさか土砂崩れで洞窟が埋まってるとはなあ・・・」

ガルムのこの声に2人とも何も反応はない。
寒すぎる吹雪の中で、膝まで積もっている雪を一步一步強行して生きたのだ。

もはや疲れのあまり声が出ない、いや出せないのであつ。

「耳だけ傾けてな。この世界の歴史の話をしてやるつ」

ガルムは最も太い木に火が移ると、スープを作り始める。

「創世記、偉大なる者、人の言つ【神】がこの世界を創造した。神は初めに空間を作り、大地・空・海を作つた。そこに木々を植え、動物を生み出した。神は天使を使って人を導いてきた。約3000年前、『科学』の世界に限界を感じた神は一度世界をリセットした。その後に再び天使を使って人々に『魔法』を授けて世界の成長を見守つた」

そこまで言つてアシェルがピクリと反応する。

「お前の言いたいことは分かる。今現在の通説では、突然『科学』世界が崩壊した後、【天使】と呼ばれる謎の者が人に魔法を教えて回つた、って言われてる。しかし、だ。一部の古代遺跡ではそのときの記録が確かに残つてる。人智を超えた何かが襲つてゐる、とな。それにその少し前に頭の中で神の御声を聞いたとも書かれてゐる。これが真実なのはナバルディ教が必死になつて遺跡を破壊していることから窺うことが出来る」

ガルムはグツグツと煮えてきた野菜のスープをコップにすくつたところで、

2人が舟を漕いでいるのに気付いた。

「スープは明日に飲むか。もう寝な。明日は山を越えるから結構歩くからな」

2人が横になり寝息を立て始めるのを聞くと、更に取り出した毛布を掛けた。

鍋に蓋をしたガルムは再びため息を吐く。

「神は世界で、世界は神。神より上位に神が、逆もまた然り。変わ
る筈のなかつた世界の摂理」

ガルムは吹雪が止んだのを感じ、洞窟から出る。外は一面の銀世界。
春のないこの大地もまた、変わる事のないだろう節理。

ガルムはキツツと空を睨み付けて言い放つ。

「なあ、お前はきっと今もあんな事を続けてるんだろうな」

踵を返してガルムは洞窟内へと戻っていく。

「…………もう少しの辛抱だ。もう少し」

#22 氷雪の大地（後書き）

さて、新22話を執筆したわけですが、
旧19話で語った内容は忘れました。

なんてこつた・・・。

それでもぎうぎうしく、

これからもどうぞよろしくお願いします。

#23 名も無き村

「さ～む～い～」

「やかましいわ！ 村も見えてんだから少しごらい我慢しろー。」

「だつて～、もうすぐつと思つたら寒さが余計に感じぢやつて～

「タクマは何も思つてないんだから我慢しろー。」

(うう・うう・今「寒い」って言おうとしたのに・・・)

ガルム達3人は朝になると山を降りて村へと向かつた。
目指す村は山の麓にある為、

吹雪が止んで遠くを見通せる状態になると村が見える。
現在は雪はやんであり、朝日が雪山を照らしている。
とはいっても、今だ吹く強い風が積っている雪を巻き上げている。

その10分後、ようやく村が見えてきた。

村は家屋が10程しかなく各家の男たちが屋根から雪を落としている。

村に入ってきたガルム達3人の方へ近づいてきたのは人の良さそうな老婆だった。

「旅の御方様達、よくこのような名も無き町までいらっしゃいました。お疲れでしょう？私の宿屋までお越しください。大したものは出せませんが、この村で採れた豆を使ったスープをお出しします。お口に合わないかも知れませんが、それでも温まると思います」

するとガルムは一步進みで、

「それはそれは」寧に。ではお言葉に甘えて御邪魔させていただ
きましょ」

ガルムはにつこつとほほ笑むと、
3人は老婆の後について行つた。

老婆の家は宿屋らしく、ついでに2・3日の宿をつこいで取る」とに
した。

利用者がいなかからということで、
一人一部屋を与えられてそれぞれの荷物を自分の部屋に置く。
1階におつるといいかおりが漂つっていた。

3人は囲炉裏を囲んで席に着くと、

3人の前に豆のスープの入ったカップが置かれた。

「あ、おいしい」「うまいな」「噂通りうまいなあ

「たくさんありますから、いくらでもおかわりをつけて下さいね?」

老婆はスープの入った鍋をかきませながら笑顔で3人に言つた。
しかしガルムは1人立ち上がって老婆に言つ。

「おいしいスープを1杯で済ますのは悪いですが、すみませんが頼
みがあるのですが」

「はて、なんでしょうか?この老いぼれに出来ることならなんでも
いたしますよ」

「実は私はこの村の村長に御挨拶したいのですが、案内してもらえないませんか？」

不思議そうな顔で、ガルムの頼みを聞いた老婆は頷くといな！」

「そんなことなら私の孫に行かせましょう。おーい、ニア、来なさいな！」

老婆が台所の方へ自らの孫を呼ぶ。

すると店の奥から元気な声とともに10歳ぐらいの一人の少女が出てきた。

「なーに？ おばあちゃん」

老婆は孫娘の肩を抱いてガルムに向き直る。

「この娘は孫娘のニアです。ニア、この旅人さんを長老様の所へ案内して差し上げて」

「はーい。じゃあ防寒具とつてくるね。少し待つてね、旅人さん」とひととひとニアは店の裏へと戻つて行つた。

「お前らは温まるまでスープを飲ませてもらいたい。その後は部屋で休むなり村を見て回るなり好きにしなさい」

「ああ、分かつた」「はーい、わかりました……あちつー」

ガルムは呆れた様子でアシェルを見る。

「おいおい、気を付けて飲めよ。うまい物はつまく飲まなきゃ失礼だぞ」

「わかつてますよ～」

「すみませ～ん、遅くなりました～」

再び3人の前に現れたミアはふっくらとしていた、着こみ過ぎて。

（（（何枚来てるんだろう?）））

「別にかまわないよ。じゃあ案内してくれるかな?」

「は～い。おばあちゃん、いつできま～す」

「はいはい、気を付けていつてらっしゃい」

-----SIDEガルム-----

「いじですよー」

ミアに連れられたガルムが着いたのは、
大昔の大樹の幹を使ったのだろうか。
先のない大樹にドアや窓が埋め込まれている。

「長老様ー。お客様ですよー」

ミアはきちんとノックをして中に呼びかける。

「ミアかい？ ジリヤ中へお連れしなさい」

ミアの呼びかけに応じたのは男の声だ。

中は緑色の糸で編んだ絨毯で敷き詰められた部屋で、壁には所狭しと本棚が並んでいた。

それらの本は全て古文書であり、現代語で書かれた本はガルムがざつと見た限りはなかつた。

部屋の真ん中に座布団を敷き、豆のスープを飲んでいるのは一人の老人であつた。

頭の髪は雪のように真つ白で、あごに蓄えた立派なひげもまた真つ白である。

老人はガルムの眼光に気付いたのか、ミアに言ひ。

「ミア、旅人殿の案内をありがとう。そこの机にお菓子があるから持つて帰りなさい」

ミアは顔を輝かせてお菓子を取つた。

「長老様、ありがとう…さよなら」

「さよなら」

ミアは嬉しそうに宿へと帰つて行つた。

それを長老は笑顔で見送ると、眞面目な顔でガルムの方を向いた。

「さて、旅人殿。この老骨に何用ですかの？」

ガルムもまた、眞面目な顔で長老に言つた。

「「」の村の地下倉庫にある禁書を閲覧、持ち出しをさせて頂きたいこの言葉に長老は眼を見開いて立ち上がつた。

「何を馬鹿なことを！貴殿は本氣でそのようなことを言つておるのみおありませぬか！」

それに対してガルムも立ち上がり、冷静に言い返す。

「もちろん本氣です」

「禁書と言つるのはそもそも・・・」

怒り狂う長老の言葉にガルムは言葉を重ねる。

「そもそも禁書とは、世に出すと国1つが滅びる程の知識や魔法が書かれた本。現在では存在すら明らかにしてはいけない本の事だな。それを昔の世界の上層部たちは殆どの本を焼却。焼却できない物や、未来に必要となる物は焼却せずにあまたもの封印を施して信用できる場所に隠し置いた。・・・それが可能ならば2度と使われないことを祈りながら」

長老は落ち着きため息をついて尋ねる。

「そこまで知つておつてなぜそんなことを言つ。我ら守護の長寿族は何代も前から地下書庫の本を守り通してきた。そしてただ1人も書庫に入れたことはない。それはこれからも、だ」

「それは俺もよく知ってるさ。だが、その開かずの扉を開いてもらいたい。俺が求める本はただ一冊」

ガルムは一拍置いてから言つた。

「『ドレア・ナクス・ラタイ』」

再び長老は眼を見開く。

「何故その本の名を知つておるー? その本は我しか存在を知らない本。いや、それよりもそれをどうする気じゃ? それを使える者なんぞおらんわ!」

ガルムは首を横に振る。

「いいや、俺は一人知つておる。あなたも知つておるだろ? う人物だろう」

「いつたい誰じや?」

「『ルマチア=ハイダス』」

「ルマチア……村はずれにいるエルフの事か。いつたい何者なんじゃ、奴は」

「あいつはエルフはエルフでも特別な種だ。古代種『エルフィオス』本の守護族であるこの村の長のお前なら知つてるだろ?」

「ま、まさか……あの! あの『エルフィオス』なのか! ?」

「ああ、間違いない」

「そ、そうだったのか。あやつが……いや、の方があ……。それならば確かにあの魔法を成功させることも可能かもしれません。じやがなぜあの本を必要とする。あれは確かに禁書の一つだが、そなたが手にしても何の得にもなるまい。そなたの様子を見るに、どいかの国の者でもなさそうだしの」

ガルムは窓から外を見る。つられて長老も見る。

そこには村の子供たちの面倒を見ている琢磨とアシェルの姿があつた。

そこには先程ガルムを案内していたミアの姿も見える。

突然アシェルの背中に子供が飛び乗り、アシェルは背中から雪に倒れた。

そして怒ったアシェルはその子供を追い掛け回す。

その様子を見たガルムは笑みをこぼすが、
すぐに顔を引き締める。

「俺がその本を欲する理由は……」

ガルムと長老は長い長い階段を下りていた。

地下書庫へと降りるための階段で、部屋全体に転移魔法陣が描かれていた。

それを使つた先には暗く長い階段があつたのである。
結局長老はガルムの書庫入りを許したのであつた。

かなり長く下り続けた後、2人は書庫へとたどり着いた。
ガルムはあたりを見渡し呟いた。

「意外と少ないんだな。何冊ぐらいあるんだ？」

「およそ200冊だ。・・・御主の望む書物はこの先だ」

ガルムは首をかしげる。

「いじにはないのか？」

「あの本を含めた5冊の存在を知るのは世界中探しても我1人のみ
だ」

「伝説級の魔導書か・・・」

「やはり知つていたか。その通りだ」

長老はとある壁の前で、

ガルムでさえも見えない程の素早さで印を切り、呪文を唱える。^{スペル}

「アハハハハハハハハハハ・・・」

目の前の壁が横にスライドし、空間に張つてあつた防御用の魔法陣
がすべて消えた。

(結界の解除をするには魔極師が必要だな。これが今まで魔

導書を守護出来ていた秘密か）

ガルムは納得したように考えていた。

封印の先にはガラスケースに入った、5つの魔導書が丁重に置かれてあつた。

そして長老はあるケースの傍で再び印を切つて封印を解き始める。それを見たガルムは目を丸くした。

（おいおい、まだ封印があるのかよ。それに今回の魔法はさつきよりも格段に難解な封印だし）

長老が印を切り終わると、

ケースを中心に展開していた立体魔法陣が霧散した。

長老はケースを外し、丁寧に魔導書を手に取る。

そしてガルムに手渡す。

「これこそが『ドレア・ナクス・ラタイ』じゃ。おそらくアレ（・・・）を発動したらこの魔導書に内包されている魔力は全て解放されるじゃろうから、其方で処分しておいてくれ」

ガルムは神妙な顔で魔導書を亞空間に転移させて言葉を返す。

「ああ、俺が責任を持つて処分しよう。もちろん、破片すら残さず
に」

2人は長老の部屋へと帰つて來た。

「じゃあ俺はこれで失礼するよ」

ガルムは扉を開け、体の半分を外に出したところで止まった。長老が声をかけたからだ。

「大事なことを忘れておった。御主は何者なのだ？」

ガルムの口がニヤリとつりあがる。
そしてガルムは一言つぶやいた。

「『エルバ・リル・ウーゼ』」

そう言うとガルムは長老の家を出ていった。

ガルムの去った後、俯いていた長老が震える。

「ふ、ふふ、ふふふふふ、はははははは、はーはっはっはっは

突然長老は笑い声を上げる。

「成程。『エルバ・リル・ウーゼ』か。それでか！それでなのか！
ようやく納得がいった！祝福されし者にして呪われし者。光り輝く
者にして闇に沈みし者。しかし、それを逃れる術すべを手に入れてなお、
逃れはしないか！絶対の強者、ガルム＝グランベルツ。その名を我
が一族の歴史に刻もう！」

長老はそれからもずっと笑い続けていた……。

#23 名も無き村（後書き）

『ドレア・ナクス・ラタイ』
『エルフィオス』
『エルバ・リル・ウーゼ』
の3つは全て古代語です。

一つ目はすぐに明らかになる予定です。

村に着いて2日目

ガルム達3人は、ガルムの古い知り合いのもとを訪ねていた。
琢磨とアシェルは、村で買ったフード付きの防寒具を着ている。
それでも豪雪の中の寒さは完全には防げずに震えている。

それに対してもガルムは・・・・・・村に来るまでと同じ装備
だつた。

それでも全く振るえずに雪の振り積もる中を軽々と歩いて行く。

知り合いの名は『ルマチア』

村の古代魔法書を何とか閲覧するために、
村近くの洞窟で20年を過ごしてきた隠者。

村から歩き続けること1時間、

3人はようやくルマチアの住む洞窟へとたどり着いた。

「・・・本当にここに師匠の昔の知り合いが住んでるのか?」

琢磨がそう尋ねるのも無理はない。

一目見ただけではただの洞穴にしか見えず、
その上、一步入るとクラスCの氷吸血蝙蝠アイシングルズバット(地域特定変異種)が襲
いかかってきたからだ。

吸血蝙蝠は一体一体はゴブリンにも劣る。

何故そうにもかかわらずクラスがCなのかといふと、集団で襲いか
かってくるからである。

しかし、集団行動する魔物は普通、クラスが上がるとしても1ラン
クだけだ。

これにも理由があり、吸血蝙蝠はその集団といつのがどいつもない量なのだ。

一集団でおよそ500匹、ひどい場合は1500匹をも超える。

「たかだか氷吸血蝙蝠ぐらいなんともなるが。ほら行くぞ」

ガルムはそう言い切ると、洞窟の奥へと進んでいく。
しばらくすると、行き止まりになつた。
いや、そこには一つのドアと一つの窓が壁に埋め込まれていた。

ガルムは躊躇なくドアをノックする。

「ン」

「おーい、ルマチア～。来てやつたぞ～、開けや～」

・・・・・・・・・・・・

ガルムは静かに拳を握る。

「ン」

「お、おーい。ルマチマー。開けろ」

だんだんと声が大きくなる。

・・・・・・・・・・・・

カチャリ シヤー

拳を開くとそのまま腰の剣に手を掛け、問答無用で剣を抜き、上段に構えた。

「はーいー・ビーチラ様ですかー・・・つともーーー?」

出て来た青年は正面から振り降ろされるのを見て驚きの声を上げた。それでもこんな地に住んでいるだけあって、何とか避けることに成功した。

しかしガルムの放った一閃はそれだけでは終わらなかつた。

斬撃が家の中にまで飛び、ルマチアの家（もとい洞窟）を真つ二つにしていた。

あまりの威力に琢磨とアシェルはポカンと口を大きく空けて立ち尽くしている

ルマチアは家を背にしているために気付いていない。

「ガルムさん！あなた何をしていらっしゃるんですか！？」

「斬つた」

「『斬つた』じゃないでしょ！別にそんなことは聞いていません！殺そうとした」とに対して何かありませんか？あるでしょう？ありますよね？」

「あるな。やつをひと出のみ、馬鹿が。おかげで罪もないお前の家を真つ二つにしちまつたじゃねえか

「は？何を言つて・・・なんですかこれがあーー？」

ガルムの言葉に後ろを見たルマチアは呆然とした。

数秒間灰になつていったものの、突然はつと我に帰ると急いで家中に走つて行く。

悠然とガルムも家中へと足を踏み入れる。

それに琢磨とアショルは付いて中に入つて行つた。

家の中は予想以上に広かつた。

しかしそれ以上に・・・本が多かつた。

部屋のいたるところに天井まで本が積み上げられている。

足場は何とかあるものの、家具の上のほとんどは本で埋め尽くされていた。

ガルムはソファーの上の本を床に放り投げると、どっかりと座つた。ルマチアは諦めたのか無言で拾つて部屋の隅へと本を固めていく。

片付け終わると、慄然とした様子で向かいのソファーへと座る。

琢磨はルマチアを改めて見てみる。

ルマチアは家中だというのにすっぽりとフードをかぶつている。顔は普通に見えるものの違和感はぬぐえない。

街中でそれ違えば10人中10人は振り向くであろう顔立ちであった。

格好いい、が、それだけではない。何か他とは違う雰囲気を醸し出していた。

「わうふてくされるな。ほら、これは土産だ」

そつまつてガルムが投げ渡したのは一冊の本である。

「お、おおおおおおおおおお。」「これは328年前にクラリー聖王

国第3代魔法院長の書いた『ラグ・アリ』じゃないですか！？

いいんですか！？

「土産だつただる。好きにしりよ」

ルマチアはその本を慎重に机に置くと、ぱっと立ち上がった。

「飲み物持つてきますね。どうぞくつらいで下さい！」

そのあらかさまな態度の変化にガルムは失笑、琢磨とアシェルは呆然である。

「気にはんな。本の事で一喜一憂するのはあいつの特徴だ。気にしてたら疲れんぞお～」

「なあ師匠。この間に教えてほしいことがあるんだけど・・・」

「ん～？なんだ？言つてみな」

「魔精石について教えてほしいんだけど」

「いいぞ。魔精石は・・・・あ～・・・・何だ？簡単に言つたら魔力の籠つた石の事で、通称は魔石だ。普通にある石が大気中や地面にしみ込んでる魔力を少しづつ吸収して出来る。魔石で問われるのは大きさよりも純度でな。この家程のよりも小指ほどの大きさの方が大量の魔力を含んでることだつてまああるんだ。魔力が多くると触媒である石は融解して魔力の塊になる。それを『純石』って呼ぶ。・

「量より質で、見掛けに騙されるなってことか。で、特別魔力量が

多いのが『純石』? 「

「大丈夫みたいだな・・・後は・・・何かあるかな?」

「宝玉の事を話せばいいんじゃないですか?」

ルマチアが盆を手に戻ってきて、提案をした。
二つのコップを琢磨とアシェルの前に置いて、ガルムの前には一本
の大きな瓶とグラスを置いた。

「体の温まる飲み物です。ジパングの知り合いから貰つた植物で作
つたもので・・・ええと、なんだつたかな。そうだ、『ショウガ湯』
だ。熱いのでやけどしないよう気を付けて下さいね。で、ガルムさ
んは村で作られているお酒です。何でも豆で作ったお酒だとか」

ガルムはグラスには注がずに瓶でそのまま飲んだ。

ゴクゴクゴクゴク ふはあつ

「豆があ。シャルベ王国の南東の町でも似たようなのを飲んだな。
でもこっちの方は何か言い表せないうまさがある。何が違うんだ?」

「それは多分、この村のお酒は豆をブレンドしているのですよ

「混ぜるのか。出来た物を混ぜるのは時々あるが・・・。成程、そ
の発想はなかつたな」

「じょうが湯の御味はどうですか?」

「不思議な味がします。おいしくなくはないんですけど、私はちよつ

と・・・すみません

「いえいえ、かまいませんよ。私も最初はそうでしたから。タクマさんはどうですか？」

「す、ぐくおこしいです。熱さもちょっとだけよくなっていますか」

「それは良かった。さて、講義の続きと行きますが、ガルムはグビグビと酒をあおるよつに飲んでいたが、よつやくその手を止めて

「あ？・・・ああ。『宝玉』についてだつたな。宝玉は8種類あります、

『ペリドット』が『雷』を、
『アクアマリン』が『水』を、
『ルビー』が『炎』を、
『エメラルド』が『樹』を、
『ジルコン』が『土』を宿す

次に、

『ダイアモンド』が『光』を、
『オブシディアン』が『闇』を宿す
最後に・・・これは例外だが、
『オリハルコン』が『天空（風）』を宿す
オリハルコンを除くこれら7つの宝石は、
蓄積した魔力を自然にそれぞれの魔法属性へと変化させる。
どれぐらいかつて、

普通の魔石は魔法のランクを1段階上げるんだが、
宝玉はランクを2段階上げるんだ

「そうですねえ。一番低い魔法、炎にしますか。直径30cmにしましよう。それを魔石を使って同じ魔法を発動させると、直径が1mぐらいになります。これと同じことを宝玉、この場合は炎なので・・なんですか？タクマさん」

ガルムの説明に補足と例を付けくわえたルマチアが、琢磨に尋ねる。

「ええっと、ルビー・・・だっけ？」

その言葉にルマチアは軽くうなずき、

「正解です。ルビーを使って発動すると、何と直径が5mをも超えます」

「そんなに！？」

「ああ、そんなにだ。ちなみにオリハルコンが例外なのは、基本的にオリハルコンはどんな属性でも変換する。しかし、『天空』属性の変換だけがズバ抜けて高いんだ・・・こんなもんか？」

「こんなものですねえ」

「だそうだ、分かったか。タクマ」

「ああ、分かった。ありがと」

「ふう、久々に講義なんてしましたね。では次の話へと移りましょ
う」

自らも飲んでいたショウガ湯をコトリと机に置くと、

「私のもとへ何の御用ですか?こんな本も持つて・・・」

ガルムはルマチアの言葉を軽く流して、

「別にこの本は本当にただの土産だ。ただ、な」

言つたん言葉を切り、姿勢はそのままにルマチアと真剣な眼差しを交わして、

「『ルマチア・アル・エルフィオス』の力を俺に貸せ」

そう言つてガルムは空間魔法を使って空中から一冊の本を取りだした。

それは、昨日ガルムが村の守護族の長老を説得して譲り受けたものであった。

すつ。ガルムは机でその本を滑らせてルマチアへと渡す。

手に取つたルマチアは先程のよつた喜びをも出わず、淡々と本のページをめぐり始める。

パラパラ　パチパチパチッ　カシャ

部屋には本をめくる音、暖炉の火がはじける音、薪が崩れる音しかしなくなつた。

パラパラ

パラパラ

パ

パタン

ルマチアは本を読み終えると机に置いて、息を吐いた。

「ふう。一応軽く読み流しましたが……ガルムさん」

「……」

「……正氣ですか？」

「……お前は今の俺をどう見る？」

「……分かりました。お手伝いをさせていただきましょう。そうすると、やはり彼は……」

「気付いていたのか？」

「名前を聞いてもしや、と思いましたが

そう言ってルマチアは琢磨を見る。

琢磨は2人の言っている意味が分からず、
ガルムとルマチアの顔をきょろきょろと見ていく。
ルマチアは依然厳しい顔をしたまま、

「彼には……タクマさんにはもうお話をなつたので？」

ガルムは小さく首を横に振る。

「まあほお前の了承を、と思つてな。……なあタクマ」

ガルムは落ち着きのなくなつた琢磨の顔を、頭をつかんで無理やり自分の方へ向けさせる。

「お前は以前言つたよな？向こうの世界に戻るつもりはないと。戻る気は無いけれども、何も言わずに出てきたから自分の覚悟を唯一の親族である祖父に伝えたいと。おまえはそう言つたな？今もその思いは変わらないか？」

「あ、ああ。じいちゃんはきっと心配してると思つ。だけど俺は戻るつもりはないから、じいちゃんにちやんと、ちやんと言っておきたいんだ。俺は元氣でやるつて！俺は自分でこいつにこいつに決めたんだ！って。だから・・・」

「・・・ふう。だそうだ、ルマチア」

「そこまでなのですか」

ガルムは机の上に置いてある本を取り、琢磨に手渡す。琢磨はパラパラと眺めて見るが、眉をひそめるばかりだ。全て古代語で書かれているために何も分からぬからである。ガルムは琢磨に対してゆづくじと言葉を紡いでいく。

「その本の名は『ドレア・ナクス・ラタイ』魔法がこの大陸に伝わるはるか前から存在する、機工時代よりもまだ昔、超魔法時代の本だ。それを現代語に訳すと・・・」

ガルムは一拍置き、言い放つ。

琢磨は何を言っているのか理解できないのか、理解しても信じられないのか曖昧に繰り返す。

「いせかいの・・・もん」

「やうだ。その『門』はこの世界とお前の住んでいた世界をつなぐものだ。その門を俺ヒルマニアが作りだしてやる。その門を開き、じーさんとの再会を果たすために！！」

#24 隠者（後書き）

『雷玉』について

調べるだけで1時間以上かかりました・・・色々考えて設定しましたが、もはや全然覚えていませんので選定法だけを書くことにいたします。

例1：色

青やら赤やらの色に輝く物を選びました。

例2：洋名

その名の通り、カタカナ語で表記されている物の名で選びました。

例3：和名

漢字で表現され、属性をイメージできるものを選びました。

もちろん覚える必要はないです。

私自身『オブディション』とか初めて聞きましたしね（笑）

『ショウガ湯』について。

ショウガ湯好きの方々すいません。

私は生姜は苦手のためショウガ湯のおいしさが表現できませんでした。

全く飲まないんです。ショウガ湯。

体にいいのは知っているんですが、どうも体が受け付けません（笑）

『超魔法時代』について

機工時代よりもはるか昔の時代。

『大陸時代』（今の時代）を平成とするならば、
『機工時代』は・・・昭和／縄文ぐらい
『超魔法時代』は・・・紀元前うん十世紀以前、のようないもんです。
簡単に言つなら、存在すら明らかになつていかない全く未知の時代の
事です。

#25（前書き）

最後の方にちょっと下ネタが入っています（R12程度ですが）

閲覧には気を付けて下さい。

意味がわからないんですが、つて方。

世の中には知らないでもいいことだってあるんですよ、特に大人の世界には。

「で、『門』を開けるわけだが……なアルマチア、一体何がいるんだ？」

「あれ？ ガルムさん本読んで無いんですか？」

「読んだんだが、訛りがひどくてな。まともに読めなかつた」

ガルムは眉をひそめてそう答える。

「ふむ、そう言えば南部訛りがひどかったですね。私はもともと南部出身なので普通に読めましたが……成程、盲点でした。ガルムさんは出身は中央でしたっけ？」

「……ああ」

「それで『門』の開放魔法陣に必要なものですが……」

ルマチアは言葉を濁す。

「ん？ どうした？ 何がいるんだ？」

「必要な素材は……五大龍の角と五属の宝玉です……」

ルマチアは申し訳なさそうに言った。
ガルムの顔はその言葉に引き攣つた。

「そりゃあ、また……。何か代用できないのか？」

「五大龍の角は、五大竜の角でも代用できます」

「じゃあそれでいいじゃん」

「しかし、成功率は三割を切ります」

ガルムは額に手をあててため息を吐く。

「はあ・・・。それで、龍の角を使った場合の成功率はどの位だ？」

「九割は難いです」

「じゃあそれでやるしかないかあ～」

「『ストック』はまだありますか？」

「あー・・・探してみなきや分かんねえな。ちょっと待ってくれ」

そう言つとガルムは小さく何かを呟き始める。

「~~~~~」

するとガルムの胸の前の空間がゆがむ。

そこにガルムは手を突っ込んで何かを探し始める。

「お・・・・1個田発見。・・・2個田、3個田、4個田・・・・・・
・・5個田、つと。よしー全部あつたぞ！」

ガルムがポンポンと空間から取り出したのは色とりどりの龍の角だ

つた。

龍の角は、1つで1等地に城が建つ、と言われるほどどの代物である。龍の角の粉を煎じて飲めば不老不死になる、ともよく言つたものだが実際にはそんな効果はない。

(ま、ほんどの病気は治るけどな)

「はあ。ストックもこれで最後だな。路銀なくなつたりどうしよ・・・」

ルマチアは不思議そつに、

「どうしようって、ガルムさんならすぐ稼げるでしょ」

「あ? 何で働くかなくちゃいけねえんだよ。これがあれば1個で10年は旅を続けられるんだぜ?」

その言葉にルマチアは呆れる。

「仮にもガルムさんはプラチナクラスの冒険者なんですから、危険度の高い依頼をこなして下せりよ」

「仮じゃねえよ。実力だよ」

苦笑してガルムは返す。

そしてその間にもガルムは異空間から宝玉を取り出していた。ペリドットにジルコン、ヒメラルドにルビーが机に転がっている。

「ijiの机にあるもの全部売つたら10世代ぐらいは遊んで暮らせますねー」

「物価が変わらなきやな。・・・うへむ、やつぱりアクアマリンだけないな。ルマチア持つてるか?」

ルマチアは首を横に振る。

「残念ながら。最近使つてしましました」

「へえ。お前が魔法を使うのは珍しいな。何に使つたんだ?」

「実はかなり大規模の雪崩が起きかけまして・・・。更に悪いことに村の方角だつたのでアクアマリンを使って止めたんです」

「それを村の奴らに言わないとこりがお前らしいよな。言つたら村の地下書庫に入れて貰えたかもしれんのに・・・」

「地下書庫に入るのには、そつとこのせ無しで、交渉だけで入ると決めたんです」

その時、蚊帳の外だつた琢磨が横から尋ねる。

「師匠、地下書庫って何だ?」

ガルムは全てを伝えるかを悩んだが、すぐに面倒くさくなつたのか。

「あ〜・・・何だ?・・・え〜・・・お前には知る必要のないことだな」

(面倒になりましたね。教えるのが)

ガルムは堂々と話題を元に戻すことに決めた。

「それはもう困ったな。アクアマリンがとれるのはシャルベ王国だし、今から取りに行くのもなあ・・・かといってここはないだろうし・・・どうすつかねえ」

「本当にここにないか、ここに主に聞いたらどうですか?」

「主?あの村の長老の事か?」

「いえ。もつと上方です」

「教皇か?」

「いえいえいえ。もつともつと上方です」

「誰だ?全く分からん」

「氷の精靈王です」

「精靈王?氷のか?そんなのいるのか?初めて聞いたぞ」

「もともとここから動かない方ですからねえ。私はこの山脈の地下にアクアマリンがあると思うんですよ。それを聞いたらいいじゃないかと思いまして」

「良い案だとは思うが・・・居場所はわかるのか?」

「はい。ガルムさんたちはどうしてこの村へやつてきましたか?」

ガルムは懐から地図を取り出して広げて山脈の左端、クラリー聖王國の北側の海と山脈が触れ合つ所を指差した。

「Iのフターイ海岸沿いからだな」

「Iのルートの頂いただきは標高2000mぐらいでしたね。この山脈の最上部、つまり標高8000mの山頂には、氷の精靈王まつわらのひめおうを祀る祭壇があるんです。そこに行けば会えるかと」

「場所はわかるか?」

「はい、ですから私が案内しましょう」

「頼む」

「いえいえ、では準備してきますね。・・・」Iれいらばじつしましょう?

ルマチアは机に散らばった角と宝玉を見る。

「また異空間になおしどくさ、一ヶ所に固めてな」

お願ひします、とガルムに一言言つと、ルマチアは装備を取りに行つた。

「おいタクマ、アシェル。お前らは装備の確認をしとけよ。氷吸血蝙蝠切つてたろ?武器が欠けてないかとか丁寧に見ておけ

その言葉にタクマは剣を、アシェルはダガとナイフを丁寧に見る。そして刃こぼれしている所は砥ぐか入念に場所を確認しておく。

使う際に力の加え方を変えるためである。

しばらくして、ルマチアは戻ってきた。ルマチアは若草色の法衣を身にまとい、同じく若草色の帽子をかぶっていた。そんなルマチアを、何故か琢磨は見入っていた。

視線を感じたルマチアは、

「あれ? どこかおかしいですか?」

「いや、俺が見るにどこもおかしくないぜ?」

「み・・・」

「み?」

ガルムとルマチアは口をそろえて頭の上に『?』を浮かべる。

「耳が・・・長い・・・」

そう。ルマチアの耳は長かった。

たまに耳の長い人はいるが、それとは比べ物にならなかつた。

その言葉に納得したのか、ルマチアは何度もうなずいていた。

「ああ、タクマさんは『エルフ』を見るのは初めてですか?」

ようやくガルムも納得したのか、

「もう二年半、ヒルフを見かけなかつたな。だからルマチアの耳を見て驚いたのか」

「あ、ああ。そつか、この世界には『ヒルフ』がいるんだつたな、忘れてた」

琢磨は心を落ち着けて、再びルマチアを見つめる。
(耳が長いだけで、別に普通の人と何も変わらないな……)

「ヤニヤしながらガルムは茶々を入れる。

「お、お、タクマ。そんなに熱い視線をくれてやるなよ。ルマチアもお年頃なんだからよ」

「え？ あ？ ち、違つ！ ……す、すみません」

タクマは顔を真っ赤にして反論しようとしたし、ルマチアに謝つた。
アシエルはそんな琢磨を射殺さんとばかりに睨みつけていた。

（ん？ 何でアシエルはタクマに殺氣放つてんだ？ 喧嘩でもしてんなかな？）

ガルムは今の状況よりもそつちのほうに気がいついていた。

しかしアシエルはすぐに殺氣を收め、

「えー？ ルマチアさんって女の方だったんですねか？？」

と、何事もなかつたかのようにルマチアに尋ねた。

当のルマチアはその茶々に、肩を揺らして震えている。

「どうやらツボに入つたらしい。

「ふふふふふふふふ。い、いえ。私は正真正銘『男』ですよ。それにエルフ族は長命なんです。見掛けと実年齢は合いませんよ。実際私も見掛けは若いですが、もう二〇〇年は生きてます。で、ですから、き、気にする必要はありませんよ・・・ふ、ふふふふふふ」

どうやら説明してゐる最中にまた笑いが込み上げて来たようだ。

タクマはバツと顔を上げて恨めしそうにガルムを睨みつける。睨みつけられたガルムはやれやれといった感じで肩をすくめる。

「おいおい、そんなに睨むなよ～。軽い冗談じやねえか。おい、ルマチア。そろそろ出発しようぜ」

「は、はい。では行きましょうか」

ルマチアは砂を掛けて暖炉の火を消し、扉に鍵を掛けた。

「こんな場所に来る人はいないんですけどね。この家には結構危ない本も多いので念のためです」

ルマチアはそういうながらボタンのついたポケットに鍵を入れ、洞窟を抜けて頂上へ向けて歩き始める。

「危ない本つて何なんですか？」

琢磨はルマチアに尋ねた。

「1冊で街が吹つ飛ぶような魔法の載つてゐる本とか、開けたら即

死性の呪いが掛けられているよつたな本ですよ」

ルマチアはなぜか嬉しそうにそう言った。

「な、何でそんなに嬉しそうなんですか？」

今度はアシヒルは顔を引き攣らせてそう尋ねる。

「ただの変態なんだよ、こいつは」

ガルムは無表情にそう言ひ放つた。
その言葉にムツとしたルマチアは、

「別に変態じゃないですよ。ただ危険な本を手にするとビリしても
それを解除したくなるんですよ」

「へえ、ルマチアさんってす」「こんですね~」

琢磨もうなずく。

「でしょ~、ほら、アシヒルさん達は分かつて下さいましたよ、ガ
ルムさん」

「だからって本を手に入れるために図書院の同書を口説き落として、
自分の家に連れ込んで行為に及んでまで手に入れるか？普通」

琢磨とアシヒルの笑みが固まった。

ガルムはさらに言葉を重ねる。

「その上、下の人間から順番に手を出すとは馬鹿かと。しまいには

館長クラスにまで・・・「

「本のためなら何でもしますよ～、私は。それが例え魔物であつても」

「ああ、そう言えば人語理解する石蛇姫メテコーナともやつたんだっけ」

「ええ。彼女の中は最悪でしたが、彼女の持つ石蛇姫族の歴史書は最高でした」

ルマチアは嬉しそうにそう語る。

琢磨とアシェルは顔を真っ赤にしている。

(（最低で変態だ、この人））

琢磨とアシェルは同じことを考えていた。

「全く、節操のねえ奴だ」

「そう言わないでくださいよ。私のおかげで対石蛇姫用の防御結界が完成したんですから」

それをガルムは鼻で笑う。

「はつ。何を言いやがる。お前は公開する気がなかつたから、俺が術式を完成させてやつたんだろうが」

「それは・・・」

「まひつ。」の話は終わりだ。さあさと祭壇に行くぞ

「はう・・・。わかりましたよ」

4人はひたすら山を登つて行く。

#25（後書き）

前話にも書きましたが、

設定資料集で、メインテーマ（ネタバレなし）を掲載しました。

切る所が分からなくてグダグダになつたので、若干の小ネタを挟んだら下ネタになつてしましました。全く下ネタにする予定はなかつたんですけどねえ。

ちょっと蛇足：

ペーパークラス：F・E・Dクラス
ブロンズクラス：Cクラス
シルバークラス：Bクラス
ゴールドクラス：Aクラス
プラチナクラス：Sクラス
要は、ギルドカードの材質です。

魔物紹介
石蛇姫：
ステューサ

人型。眼球に魔力が内包されており、それを放出することにより前方の物（者）を全て石化させる。石化は時間とともに徐々に進行する。石蛇姫が死ぬと、眼球は石化する。ただし、生きたまま眼球をくりぬくことにより、生のまま手に入れることが出来る。かつてでは石蛇姫の被害によつて村一つが壊滅するといつとも多々あつたが、現在では、ギルドから発表された防御魔法陣（設置型・付加型・

結界型)により、被害は半数近く減つたものの、依然魔法陣の使えない村などでは被害が多い。

次回、『氷の祭壇』

ケーラボラス山脈の頂上にある質素な祭壇
誰が作ったのかも、いつ作ったのかもわからない
時代に置いて行かれ、忘れ去られた祭壇
尋ねるものは誰もいなかつた・・・この時までは

山の天氣は変わりやすい。

よく言われることだが、ケーラボラス山脈に限つて言えばそれはない。

1年中雪に覆われ、上部に行けば行く程、吹雪の確率は高まる。

ガルム・ルマチア・琢磨・アシェルの4人は、ひたすらに頂上を目指していた。

頂いただきをはるか前に通り過ぎているため、今は白一色の急斜面を登っている。

ルマチアは道を選んでいたためにロッククライミングのよつなことはないものの、

それでもやはり危険なことには変わりない。

吹雪が吹き始めれば、10歩先すらも見えなくなってしまつからである。

「タクマさん、アシェルさん。大丈夫ですか？」

ルマチアは数分毎に2人に呼びかける。

「大丈夫です」「大丈夫だ」

「そうですか、あと少しですのでがんばってくださいね」

その時、ルマチアの胸元がキラリと光ったのに琢磨は気付いた。
(何だ・・・?)

「なあ、ルマチアさん」

「はい、どうしました？」

「胸元の、その赤いのなんだ？」

ルマチアは、首から提げていた赤い石を手に取る。

「これは『炎の護石』ですよ。先ほどお教えした純石を加工したものです。これを付けることで寒さが軽減されるんです」

「だからそんな軽装でも寒くないのか。・・・あれ?じゃあもしかして師匠も?」

ルマチアはチラッとガルムを見やると、頷いて答える。

「ええ。でもガルムさんは炎の護石を身に付けている訳じゃありません。ガルムさんは天空魔法を使って体の周りの空気を暖めているんです」

その言葉に反応したのは、琢磨ではなくアシエルだった。

「ええっーー師匠、私が寒いのは鍛錬しないからだ!って言つてたのに。自分だけ魔法を使って楽をして。私たちにもしてくださいよー!」

「やかましいーーお前らにも一応今魔法使つてんだからそれで我慢しろー!」

「何の魔法使つてるんだ?」

琢磨のこの問いに答えたのは、ガルムではなくルマチアだった。

「空気量の増加です。高いところほど空気は少なくなるので、慣れないと人がそんな所に行くと高山病にかかるてしまうんです。だからそつならないようにガルムさんは空気量を調節してるんですよ」

「なら仕方ないか」

「ほらー！タクマも我慢してるんだからお前も我慢しろー。」

「うう～」

納得したくないがするしかないア・シェルだった。

「さ、早く登りましょう。詳しいことは登りながら説明しますよ」（まあ、空気量を調節するついでに暖かくも出来るんですがね、嫌がらせだらうな、きっと）

「基本的に、護石は魔石でありさえすれば作れます。魔石に特別な魔法を付加することによってその効果を得ます。炎の護石は暖かく、逆に水の魔石は涼しくなります。もちろんそれだけではなく、同属性の魔法を軽減させます」

タクマは「onso」と胸元から石を取り出す。

旅立つ前にガルムが2人に送ったものだ。

「これは何の護石なんだ？」

「ああ、渡す必要はありませんよ。私は魔力は見えます（・・・）から。・・・ガルムさん」

1人先を進んでいたガルムは、ルマチアの呼びかけに戻ってきた。

「なんだ？」

「この護石はガルムさんが

「・・・タクマ、それにアシェルもだ。それはあまり人に見せるな。そして肌身離さず持つてろ。いいな？」

「あ、ああ」「はあ、分かりました」

「そいつは俺と俺の知り合いとの合作だ」

「ほう、これを造れるほどの人があなたの他にも?どこにお住まいなんですか?」

「シャルベ王国のキーリエの町だ」

「キーリエ?・・・ああ、天魔師の町ですか。あやかってるんですね?」

「最初はそうだったらしいが、雰囲気が気に入つたらしくてな

「お師匠様、『天魔師』ってノートリオール決戦の・・・」

2人の会話に申し訳なさそうに入つてきたアシェルはそう尋ねた。

「ああ、その『天魔師』だ。タクマにも教えておいてやろう。ノートリオール決戦後、勇者とともに魔王と戦つた者に『英雄』、連合

軍の師団を率いた者たちに『天』の称号を与えた。今話している『天魔師』もその1人だ。こいつは禁呪魔法を含めた全魔法を習得した歴史上最高の魔法使いだ。ちなみに英雄と天の実力は同じだと言われている

「しかし、彼等の詳しい情報は一切伏せられた」

「え？ 何でだ？」

「考へてもみる。人は魔物を恐れていた。強くもあれば数も圧倒的。しかしそれをも倒す奴ら。戦争が終われば人は彼らを喜んで迎え入れる。しかし平和になればどうなる？」

「・・・英雄たちを、利用する？」

「それだけならまだいい。問題は別だ。平和に慣れれば人は英雄たちを迫害する。自分たちは殺されるのではないか？ 支配されるのではないか？ 強すぎる力は疑問を呼ぶ。事実、1人の天は民衆によつて殺されている」

「『天魔師』の生まれ育つた町は魔法に聰さとい者ならば知つている人も多いのです。ですからあの町には実力者も多いのですよ」

「自分の町なのに、知らなかつた」

アシエルのこの咳きに、
ルマチアは苦笑する。

「知らないくて当然なんですよ。それにしても、そんなにいい町なら私も住んでみましょうかねえ」

「やめとけやめとけ。お前には似合わねえよ」

「ふふふ、冗談ですよ。私は今のお家も結構気に入っていますから

「あんな家をか?」

「ええ、ガルムさんも住んでみますか?」

ルマチアのこの提案をガルムは一蹴する。

「俺は今の家を払う気はないよ」

「そりですか、残念です」

そして残念層には見えないルマチアが笑う。タクマはそんな会話を聴き、疑問を口にした。

「師匠ついでに家を持つてるんだ?」

「ギルド本部だよ」

「あんな所に家なんてあるのか?」

「あ~。言い方が悪かつたな。プラチナクラスの冒険者はな、ギルド本部内に自室が与えられるんだ。自室といつても宿屋の最高級の部屋よりも広いけどな」

「え~、いいな~。私も欲しいな~」

「精進するこつたな

「ふふふ、あ！」

少し先を歩いていたルマチアは振り向いた拍子に声を上げた。

「ん？ どうしたルマチア？」

「2つお知らせがあります。まず、頂上が目に見えてきました」

「ほほう、それでもう1個は？」

「下からクラスBの魔物『狂剛猿』^{バーサクエイプ}の群れに見つかりました」

「・・・走るぞ！ 頂上までは奴らは来ない！」

4人は頂上までに何度も交戦しながらも狂剛猿^{バーサクエイプ}を振り切った。

#26 (後書き)

魔物紹介
狂剛猿：クラスB（単体）

バサクエイブ
ゴリラ
体長2m以上はある猿。普通は単体で行動する。群れで出会つたら逃げるしかない。名前とは裏腹に冷静に考えて行動する猿で知能は高め。

山頂に着くと、太陽は真上にあつた。

出るとともに真昼だったため、

どうやら山を登っている間に、一日が過ぎていたらしい。

眼下には雲が広がっており、見渡す限りでは地上は見えない。ガルムは異空間からひょうたん型の容器を取り出した。

それを見てルマチアが尋ねる。

「なんですか？」

「中の底に空間魔法を付加しててな？ 異空間のストックにある酒をこの入れ物に空間転移させられるんだ」

「なるほど、つまりは飲める」との無ごく水筒ですね

「ま、そんなところだ」

「それにしても、雲海を見ながら飲む酒は最高だなー。ほら、ルマチア。お前も飲め飲め！」

「ありがたく貰いましょうか。・・・ふむ、これは確かにおいしいですね」

ガルムとルマチアは手^{いり}大きな大きさの石に座つて酒を飲み始めた。

一方、琢磨とアシェルはといつと、息を切らして仰向けに倒れていった。

慣れていない雪の中、戦い、また走って登つて来たからだつた。
そんな2人にもガルムは声をかける。

「おうおう、お前らも見ろよ。最高の景色だぜ？これは」

2人は立ち上がるうとするがふらつき膝をつく。

「はあ、はあ・・・ちょっと・・・待つてくれ・・・」
「む・・・無理ですよ・・・視界が・・・回ってるんです」

ルマチアはガルムから受け取った水を、2人のそばに置いた。

「あ・・・ありがとうございます」「ありがとうございます」

「ゆつくりと、少しづつ飲んでくださいね」

「う～む、こりゃあ少しばかり休憩が必要か？」

「必要でしょ。このまま無理に行進したら死んでしまいますよ、『冗談抜きで』

「なら多めに今日は1日、ずっと休むか」

ガルムとルマチアは2つのテントを張つた。
そこにそれぞれ琢磨とアシエルを寝かせた。

2人は疲れがたまっているのか、泥のように眠つている。
更に一つを新たに張り、自分たちの荷物を置いて戻つてきた。

二人は再び石に座り、雲海を見下ろしながら酒を飲み始める。
話を切り出したのはルマチアの方であった。

「あの子達は最近弟子にしたのですか？」

「分かるか？」

「ええ。あなたの弟子にしては、いかとか体力が無さ過ぎます。それに・・・」

「それに？」

「それに、先ほどの無理な登山の原因にもなった狂剛猿との戦闘の際でもそうでした。雪上とはいえあまりにも遅く、切れが無い。避け方も逃げ方もなっていなかつた。それよりも何よりも・・・『覚悟』が欠如していました」

「・・・」

ガルムは何も言わずにルマチアの言葉に耳を傾ける。

「私にはあの子達が死にたがっているよつてしか見えませんでした。今生きていろのでさえ私には疑問に思います」

「確かに、なあ。今の奴らじゃあいつ死んでもおかしくない」

「つーなうばー！」

「今のはあいつらの心境は微妙だ。方や昔の世界への郷愁、方や親を殺した者への復讐。何のために修行するかは固まっているようだが、どれほどの強さを自らが求めているかは分かつていまい」

「・・・

今度黙つたのはルマチアの方だった。

「それを何とかして修正していくのが俺の務めだとは思つてゐる。それがじやあ駄目だと思つうか?」

「・・・身勝手な言い方をしてすみませんでした」

ルマチアは立ち上がってガルムに頭を下げる。

しかしガルムはそれを見ずに、ただ雲海を見下ろしている。

「・・・座れよ。お前がそいつのものも正しいんだ。だから謝る必要は無いよ」

ルマチアは口を開け、何かを言おうとするが首を振り、諦めた様子で座る。

「それに、今俺らが話しえりとはまた別なところにあるだひつへ..

ルマチアは気持ちを改めて顔を引き締める。

「確かにそうですね」

「で、そいつの件だが、やっぱり無いのか?」

「はい、詳しく読んでも見つかりませんでした」

「やねつやうなのか。俺の見落としだと、そつ想つていたが・・・

ルマチアは軽く頷き、

「『門』を開く方法は全くの不明です」

「そう、か。俺はどうあるべきなんだろうな、ルマチア、お前の意見を聞きたい」

「私はあなたと同じ考え方ですよ。方法すら分かっていないにもかかわらず、一度しかないチャンスの無いことをやるのは愚の骨頂。当然やめるべきです」

「・・・」

「ですが、『思い立つたが吉田』、それ以外は全て凶田。私があなたから学んだことの一つです。あなたの考え方どおり、実行しましょう。儀式を」

「そうだな、愚か者は愚か者のやり方で行くとするか」

ルマチアは立ち上がりテントへと歩き出した。数歩歩き出して止まり、肩越しにガルムを見る。

「それに、何か策があるのでしょうか?」

「いつの間にか太陽はオレンジ色に光り、雲海の中へ沈んでいこうとしている。」

ガルムは再び、オレンジ色に染まつた雲海を眺めながら酒を飲み始める。

「ああ、酒がうめえ」

ぽつり、とガルムは呟いた。

「夕陽が沈んでも星々が瞬いては朝日が昇る。例え何千回、何万回と繰り返しても変わらない仕組み。いつかに世界が定めた。それが狂つてしまつても、世界はそれを元に戻してきた。ならば・・・・・。いや、これは考えてはいけないことが」

ガルムは言葉を更に紡ぐ。

「なぜなら俺は・・・」

紡いだ言葉も虚空へと吸い込まれるのみで、聞くものは誰もいない。

ガルムは口へと酒を滑らせる。

「ああ、酒がうめえ」

#28 氷の精靈王

「でも、…………ですか？」

「べ・・・・・やし・・・よ」

「しかし、…………すよ」

「ほつ・・・・・・・とけ。それ・・・・・・・ていく」

朝、アシェルは自身の意識が覚醒していくのに気付いた。

昨日の戦闘からか、寝違えたのかは分からぬが、背中が痛い。

(「）の声は、お師匠様とルマチアさん？何か口論してるみたいだけど、珍しいわね。今まで一度も口論してる所なんて……。あ、最初に家壊したときに見たわね。今度は師匠は何したんだろう？（）

(それにしても背中が痛いわね。)の感触はあるで……

アシェルはゆっくりと目を開けると朝特有の白い空が広がっていた。
そして視界の端ではガルムとルマチアがこちらを見ていた。

(あれ？私、昨日テントで寝てて……)

「あれ？お師匠様……おはようございます

ガルムは軽く手を上げて返事を返す。

「おへ、おはよつ。とつあえず、乱れたその格好を直したらどうだ
?」

「・・・え?」

アショルは起き上がり、自分の置かれている状況を確かめてみる。自分が寝ていたのはテントの中じゃなくて外。下には毛布ではなくゴシゴシとした岩やら石。服は乱れに乱れ、肌の多くが露出している。周りにはガルムとルマチアと琢磨。

「キ・・・」

「・・・おへ。」「・・・」

「キヤーーー見るなーーー!」

猛烈な咆哮とともに平手が飛んできた。平手は琢磨の頬を強打して、ルマチアには避けられ、ガルムには受け止められた。

「落ち着け」

「キヤーーーは、離してくださいよー!」

「分かつたからせつと着替えろ」

そう言つとガルムは平手打ちを食らつて吹っ飛んだ琢磨の首根っこを掴んで、

巨大な岩の反対側へと引き摺つていった。

「おーい・まだかー？」

「まだですよー。」

「早くしないと、お前の着替えを覗くぞー、タクマが」

「来たらナイフで眉間を突き刺しますよ、タクマを」

「行かねえよー。」

そつとう琢磨の顔は真っ赤だ。

そしてその様子をガルムトルマチアはニヤニヤと眺めている。

数分後、ようやく着替え終わったアシェルが現れた。

「遅えよ」

「女の子の着替えは時間が掛かるんですー！」

アシェルはぷりぷりと怒りながら言った。

「はいはい、じゃあ行くぞー」

出発した4人は30分ほど歩くと立ち止まった。

氷の精霊王を祀る祠まいにしに着いたのだ。

「セヒ、どうやつて精靈王様を呼び出しましょうか？」

ルマチアのこの言葉に反応したのはガルムだった。

「ん？ 呼び出し方わからねえのか？」

「ええ。ここには何回か来た事はあるのですがね」

「なあ。祠壊せば出てこないかな？」

「・・・やめてくださいね」

ガルムは肩をすくめて苦笑する。

「冗談だよ、じょーだん」

「やめてくださいね」

「しねえよ、冗談だよ」

「やめてくださいね」

流石にこれにはガルムも怒った。

「しねえって言つてるだろ？ がー！」

「ふつ、冗談ですよ」

してやつたり、といつた様子でルマチアはガルムに言つた。

「・・・はあ、もういい。疲れた。で、どうするよ?」

「どうしようねえ」

『我に何用か、人間たちにエルフよ』

突然、4人の頭の中に声が響いた。念話である。しかし驚いたのは琢磨とアシェルだけで、ガルムとルマチアは全く驚かなかつた。

ルマチアは祠の前に恭しく膝を折り、

「お初にお目にかかります。氷の精霊王様。私の名は、ルマチア=アル=エルフィオス、と申します。この度は精霊王様に2つの願いがあつて参りました」

『うむ。なんじゃ、申してみよ』

「は。1つ目は、この山脈のどこかにアクアマリンがございませんでしょうか? その使用目的ですが、それは2つ目の願いとなりますので先に説明させていただきます。2つ目は、麓の村はずれの小屋にて『異世界の門』を具現・開門いたします。そのため、ご迷惑をお掛けすることを断りに来ました」

『ふむう。成る程のう。・・・・・・・・・あい分かつた。一つの願いを聞き入れよう。まず、1つ目の願いだが、アクアマリンはこの山脈の地下に眠つておる。そこへ至る道を示そう。しかし、我がするのはそこまでじや。実際に取つてくるのはお主らじや』

「わかりました。ならばわ『俺が行こう

ルマチアの言葉をさえぎり、ガルムが言った。

「お前よりも俺の方が早いからな」

『我はどちらでも構わぬ。して2つ目の願いじゃが、これも認めよう。小屋の外の被害は全て我が何とかしてやる。好きに儀式を行うが良い』

「ありがとうございます」

ルマチアが礼を言った直後、地面が揺れた。
祠の前に、直径3m程の穴が現れたのだ。

『氣にする必要など無い。アクアマリンを探りに行く男よ。この穴に飛び込むが良い。この中は光りが無く、また暗い。氣をつけて行け』

「ああ、問題ない。俺からも一つ頼みがあるんだが・・・」

『精靈の王たる我に臆さぬその物言い。氣に入った。なんじや?申してみよ』

『俺の弟子2人・・・そこの人間族2人だ。そいつらに『試練』を受けさせてやつて欲しい』

『いいだろう。本来はこの地に住む者にしか受ける資格は無いが、特例だ。認めよ』

その言葉を聞いたガルムは、

「ルマチア、2人のことを頼む」

「ええ、お任せを」

ガルムは、フと微笑み、アクアマリンの眠る洞窟へと続く穴へと飛び込んだ。

二人は首を横に振る。

『お主らは『試練』が何なのかを知つておるのか?』

『『試練』とは、加護を受けるにふさわしいかを見極める試験の事じや。試験に受かれば氷の加護を与える。この加護があれば、寒さを感じることも無くなれば、ある程度の暑さをかんじることも無くなる。そして、氷の魔術を無効化させる。そのような加護だ。さてお主らの師はお前らを推薦したが、受けるのはお主らじや。どうする? 受けるかの?』

「ああ、受けさせてくれ」「勿論受けるわ」

『いいだろう。暫し待て』

再び地面が揺れる。先ほどよりもかなり長い。すると、山が動いていた。

岩や石が全て地面に吸い込まれ、斜面が無くなる。僅か一分足らずでそこは平地へとなつた。

『出でよー! わが僕! 』穿氷の大牙『

その言葉と同時に、新たに出来た平地の真ん中に一匹の狼が現れる。その狼の大きさは、全長10m程、体毛は全て白色で、金の瞳と大きな牙が特徴的である。

『その狼の名は『穿氷の大牙』^{フヨンリル} 氷の守護獣じゃ。これをお主ら二人に倒してもらう。別に殺してもらつても構わんぞ。そ奴は死んでも蘇るからの。じゃが安心しろそ奴の強さは通常時の10分の1にも満たぬ。これでお主らが死ぬことは無いじゃう。さあ、お主らもあそこへ行け』

琢磨とアシェルは穿氷の大牙と向かい合つように立ち、それぞれの武器を構えた。

『ふむ、では少しヒントをやうづ。そ奴の強さは、お主らがギルドと呼ぶものの強さであらわすとすれば、せいぜいクラスS程の強さじゃ』

氷の精靈王は一拍置き、

『では始めよー!』

氷の『試練』は今始まつた。

#28 氷の精靈王（後書き）

魔物紹介
穿氷の大牙フェンリル・クラスS（試練時）・クラスSS（通常時）
詳細不明

次回：氷の『試練』

琢磨とアシエル、2人の戦闘力を合わしてもクラスSに届くかどうか。
果たして2人はガルムの期待通り、『試練』を合格できるのか！？

#29 氷の試練

吹雪は止み、動くものは何一つ無い。

相対する2人と1匹は彫像のようにそこに佇んでいた。最初で全てが決まる。

そんなことは無い、とガルムは鼻で笑うだろう。

しかし2人はそうは思えずに相手の動きを待っていた。

ピクリと穿氷の大牙^{フェンリル}の前脚が動く。

それと同時に2人は斜め前へと走る。

すぐに2人と1匹は一直線に並ぶこととなつた。

両方狙つていたのであらう、目標が分散してたらを踏む。

穿氷の大牙^{フェンリル}がアシェルの方を向く。

どうやらアシェルから狙うことになったようだつた。

穿氷の大牙^{フェンリル}は伏せると、

圧倒的な速さで体当たりをしてくる。

アシェルは懐からピックを3本片手で取り出して顔に向けて投げた。ピックは2本が外れたものの、1本は狙い通りに当たつた。・・・しかし、

「凍つた！？」

そう、ピックは刺さった瞬間に凍りついで碎け散つた。

更に悪いことには、穿氷の大牙の突進する速さが落ちなかつたのだ。ただでさえ長くない距離の中でピックを放つたために、避けることは出来なくなつた。

何とか被害を減らそと、渾身の力で右に跳躍する。

しかし、穿氷の大牙フェンリルはすぐさま方向転換しようと足に力を入れ、足に激痛が走った。

いつの間にか近付いていた琢磨が軸足となっていた左足を斬りつけたのだ。

穿氷の大牙フェンリルは転んだが、2人は体勢を立て直すために退いた。

「私を助けなくてもダメージ『えたならよかつたんじゃないの?』

「そうかもしれないけど、良い収穫があつた。奴は意識しないと凍らせる」とは出来ない

「そつか! でもどうする?」

「実はもう一つ気になることがあるんだが、・・・・・・

「わかったわ」

琢磨の提案にアシェルは頷くと、2人は5m程の距離をとつた。琢磨は正面から穿氷の大牙フェンリルへ走る。

数秒遅れてアシェルも走り出した。

アシェルは再びピックを投げる。

ピックが凍つたその瞬間、琢磨は剣で穿氷の大牙フェンリルを斬り裂いた。穿氷の大牙は顔から血を流してうめき声を上げた。

「ギャウ!」

それを見て琢磨は歓声を上げる。

「やっぱり同時に防げないのかー! アシェル連携で攻めるぞ!」

「わかつたわ！」

二人は攻撃を受けながらも、じりじりと穿氷の大牙フェンガルを追い詰めていった。

「ほう、中々善戦しますねえ」

感嘆の言葉を呴いたのは、祠の前で2人と1匹の戦いを見ているルマチアだった。

「登山のときは大違ひだ。何が悪かったんでしょ？ つか・・・」

「あ奴らの師匠に遠慮してたのじゃね？」

祠の後ろから現れた1人の少女がルマチアの疑問に答えた。

「もう少し詳しく聞かせてもらつても？ 氷の精霊王様

「驚かんのじやな」

「まあ、高位の精霊や魔物は人に化けることが出来ることはあるですからね」

「成る程のう。それで先程のことだが、遠慮というには語弊がある。あ奴らの師である男に匹敵する強さの者はこの大陸にもそうとうおいらんじゃね？」

「そうですね、ガルムさんが力を出し切つたといふは見たことあり

ませんが・・・

「強い師を持つ弟子は主に2通りに分かれる。1つは、師の様にならうと無茶な戦い方をする。これは師が出来るから自分も出来なければならぬと思つて無茶をするタイプじやな」

「ふうむ、早死にするタイプですね。もう一つは何でしょうか?」

「自分の実力を過小評価するタイプじや。これは現実を見すぎる。自分の限界を知ることは大事じやが、自分の限界を超えた事をしないと人は成長せぬ。あ奴らは師が強すぎるために自分たちは弱いのだ、といつも思つておるのじやろうな。しかし今、奴はおらぬ。だから自分の限界を忘れ、あれだけ見事に戦えておるのじや」

「だからこそ俺が消えるためにアクアマリンの採掘に行つたんだ」

突然聞こえたこの声に、氷の精靈王は不機嫌そうに迎えた。

「ふん、このよつな事を我にいちいち説明するな。いたならさつと出て来い」

この言葉にガルムは苦笑する。

「ははは、今帰つてきたんだから許してくれ。すまんなルマチア、理由を付けて残つてもらつて」

「構いませんよ。見ていて楽しかつたですし」

ガルムは愛弟子の戦いを見ながら精靈王に話しかける。

「・・・なあ、精靈王さんよ」

「どうしたのじや？」

「あなたは他の精靈王と交流あるのか？」

「つむ、水の精靈王とは親しいだわ」

「さうか・・・。20年後のアレ（・・・）が早まるかもしねん」

「・・・さうか。いつ頃になりそうじや？」

「遅くても10年。早くて・・・・・・2年だ」

「馬鹿な！何故それほどまでこー？」

「もはや誰にも予測できない方向に動き出していくる」

「・・・」とは他の精靈王たひこは？

「大地・炎・雷へは伝えた」

「ならば水と樹は我が伝えよつ

「頼む・・・。おつき終わりそудだな」

ガルム達3人（？）は戦いを見届けるために視線を同じくした。

「はあつ。はあつ。はあつ。はあつ……これで、終わりだー・アシヨル！」

「はつ、はつ、はつ、はつ。……分かつたわ」

琢磨とアシヨルの2人は体のあちこちから出血している。
しかし、出血以上に多いのは凍結である。

爪や牙がかする度にその部分が凍結するのだ。
(間接部にガードがあつてよかつたな。無かつたら危なかつたかも
しない)

琢磨の連激で、穿氷の大牙の足が崩れ落ちた。

穿氷の大牙はすぐに立とうとするが、ダメージが大きすぎて立てない。

凍らせて防ごうとしても、今では凍らせるほど余力も残っていない。
(きつと凍らせるのにも魔力が必要なんだわ。もう魔力が残ってないのね)

「終わつてえええー！」

アシヨルは必死の叫びとともにダガーを眉間に突き立てる。

すると、穿氷の大牙は体がだんだんと透明になつていき、そのまま
消滅した。

2人は緊張の糸が切れ、その場にへたり込んだ。

「つむ、よくやつたぞ」

「はあ、はあ、はあ……誰だ?あんた」

「その少女が、氷の精靈王様の人間としてのお姿ですよ」

精靈王の後にガルムとルマチアが続いて來た。

「はあ、はあ・・・この人が・・・精靈王様なんですか？」

「そうだ、このちびの女が精靈王だ」

ガルムが茶々を入れるが精靈王は無視をする。

「それで加護だが、すでにお主らの護石の中に入れておいた。後は勝手に作動するじゃね？」

「ありがとうございます」「ありがとうございます」

「別に礼はいらんよ。見事試練を突破したのじやからな」

そういうと精靈王の姿は消え、再び頭に声が響く。

『ついでじや。麓の小屋まで送つてやろ？』

4人の視界が歪み、気が付くとルマチアの家の中であった。

「帰つてきましたね～。琢磨さんにアシヒルさん、こいつにベッドがありますのでこちらへ」

ルマチアは2人を奥へ連れて行き、10分後ぐらいに戻ってきた。

「ぐつすりでしたよ」

「あこつらむ寝すがだよ、こつもこつも」

「まほは、それほどガルムさんの修行が厳しいんですよ。・・・」
ついでですか？ガルムさん

「あ～？」

ガルムも疲れたのか、ソファーに軽く座つて大きくもたれかかっている。

「先ほど言つていたアレ（・・・）と何なのですか？」

ルマチアは両手を組んでじっとガルムを見る。

「・・・・・・」

ガルムは黙つて答えない。

先に折れたのはガルムのほうだった。

「どこから説明したら良いものか。・・・簡単に言つながら」

ルマチアは何も言葉を発さずにガルムの言葉を待つ。

「何年後かに・・・戦争が始まる」

「戦争、ですか？300年続いた平和にも流石にひびが。しかしそんな事で？」

ガルムは小さく首を横に振る。

「何があるのですか？」

「そんな小さな物ではない。最悪の場合、この大陸の民の半分が死ぬ」

#29 氷の試練（後書き）

前回に引き続き、

魔物紹介

穿氷の大牙^{フェンリル}：試練時（クラスS）・平常時（クラスSS）

氷の精靈王が使役する魔物の一匹。もともとは野生だつたが、精靈王はこれを自らの魔法により氷の属性を付け加えて下僕しもべと化した。大きさは10m程であつたが、これも試練時の大きさであり、本来は20mを超える。野生の名前は穿地の大牙^{フェンリル}であり、属性攻撃は無い。

試練について

各属性毎に試練があり、合格するとそれぞれの精靈王の守護を得る。試練と加護の内容は属性毎に異なつていて、氷は基本の5属性では無いため、試練は一番楽。天空の試練・加護は今のところ確認されていない。

精靈王について

思念体・人間体・獣体の3つの体を持つ。精靈王は無から生まれたとも人や獣から昇格してなつたとも言われているが真偽は不明。その属性に關係のある所で祀られていはいるが、祀られている場所に必ずいるというわけではない。

戦争の話をこんなに早くするつもりは無かつた。
が、あまり伏線を入れても読み辛いだけなので少し公開しました。

ガルムたち4人はルマチアの住む洞窟の最奥に向かっていた。
ルマチアの家は洞窟の半ばにあつたらしく、

その奥にもまだ空間があつたのだ。

そこは魔力のあふれるところらしく、儀式場として使いこなした
のだ。

洞窟の通路は、地面や天井から突き出でているエメラルド色の水晶が
ほのかに光りを放つてゐるために視覚に不自由することは無い。

ガルムはそれを1つ地面から引き抜いて、琢磨とアシェルを呼ぶ。

「これは縁光石だ。見ての通り光を放つてゐるな。これを割ると…
・」

そう言つてガルムは取り出したナイフの柄で石を割る。
すると石は強く輝き、そしてゆつくりと光は消えた。

「強く輝くのはせいぜい5秒が限界だろ? 一度光を失つた石は
一度と輝きを取り戻さない。光つてゐる原因是魔力だ。ま、せいぜい
何かの役に立てる」

石を隅に放り投げたガルムは再び歩き出す。

「さて、儀式場に着きましたよ」

儀式場は中心がまるく盛り上がり、その周りには水がたまつ

ている。

どうやらひび割れた岩の隙間から流れできているようだ。儀式上も明るいのは、通路以上に緑光石が散乱しているからだ。それは水の中でも例外ではなく、場を幻想的にかもし出していた。

ガルムとルマチアは先に中心に登つている。

「本の通り魔法陣は作っておきましたけれど、一応おかしなところが無いか見てもらえますか？」

「…………大丈夫だ、特に問題は見つからない。じゃあ触媒を置いていこい」

盛り土には正五芒星を2つ、180度回転させて描かれていた。

> 2013-16419 <

2人は五芒星の各頂点に龍の角や宝玉を置いていく。
最後にルマチアは五芒星を囲むように魔法文字を書く。

「これで完成です」

「ルマチア、詠唱を任せていいか？俺は魔力の制御に当たるから」

「それが適役でしょうね。分かりました、本をください」

ガルムは異空間から魔法書を取り出してルマチアに渡す。

2人は近くのたいまつに立てかけてあつた杖を持ち、思考する。
(もしガルムさんの推測が間違つていれば……)
(一度とチャンスは来ない)

「タクマ、『門』の開け方を説明する。こっちへ上がつて來い」

タクマとアシェルもまた、触媒と魔法人を踏まないよう上がつて來た。

「タクマ、お前はこの陣の中心になつてお前の会いたい人物、お前のじいさんを想え。たとえ何が起こつとも、必死で想え。アシェル、お前は俺の傍にいろ。でも絶対にくつくな」

「分かつた」「分かりました」

琢磨は陣の中心に、アシェルはガルムの傍に立つた。

ガルムとルマチアは陣の左右に散つて深呼吸した。
ガルムは琢磨を見遣り、

「タクマ、準備はいいか?」

「・・・ああ」

「ではこれから『門』を具現させる。ルマチア!」

魔法書が淡く光り、宙に漂う。
ルマチアは杖を地面にてコンコンと音を鳴らし落とす。

「『』この世の理。彼方から彼方へと流れる万物の源。天地開闢より存在せし幾万を繋ぐ永遠の縁。始まりも終わりも誰が知る・・・『』」

龍の角と宝玉から、それぞれの属性の色の柱が螺旋状に生まれ、暴走を始める。

(この量の魔力掌握は厳しいな・・・しかし...やるしかない!)

「ぬうん！」

ガルムは杖を大きく掲げ、儀式場の全ての魔力を制御する。暴走は次第に収まり、柱は次第に安定して微動だにしなくなつた。

(・・・これでいい)

「『^そ其は定むることのない門。神々が使いし世と世とを繋ぐ神器。其はどこと繋ぐ場所は何処であるのか。夢は現に現は夢に・・・』」

緑光石は明滅を繰り返す。

触媒の魔力と共に鳴しているのだ。

緑光石が次々と爆ぜ、魔力のみが残る。

その魔力は儀式場で激しく動き回つていぐ。

「『創世の頃より移ろわぬ魔の力よ、響け！響け！響け！彼の者の鄉を繋ぐ門と成りて今ここに顕現せよ。その名はドレア・ナクス・ラタイー！』」

激しく動き回つていた魔力と触媒の魔力が一箇所に集中する。魔力は融合し、とある形を作つていく。

高さ3m、幅2mの透明の門だ。

しかし門はぴたりと閉じている。

(意外と小さい・・・しかしこの消費魔力)

「タクマーしつかりと想え。お前が想わないとあの門は開かんぞ！」

琢磨は元の世界での祖父との思い出を思い出していた。

両親が2歳の時に死んだ琢磨は祖父に体術と剣術の教えを請いた。強くなつてからは喧嘩に走つたものの、

祖父はそれを正そうとひたすら琢磨に教えていた。

(じいちゃん・・・)

「ハ、ハハハハハハハハ・・・

琢磨の想いに反応したのか、門は重い音を立てて徐々に開いていく。そのときガルムはある自体に気付いていた。

「ルマチア！触媒の魔力がもう無くなってる！魔力を開放しろ！」

そう、龍の角と宝玉に込められた魔力は、全て門の顯現に費やされて残つていなかつた。

すぐにガルムとルマチアは自身の魔力を解放した。

2人から出た魔力の奔流は門に流れ込む。

後数瞬遅ければ、門は四散していったのである。

ハハハハハハ、ガタン

門が完全に開いて固定された。

しかし、門の向こう側は洞窟が移り、琢磨の祖父の姿は無かつた。

アシェルは絶望の声を上げる。

「嘘・・・失敗？」

「いいや、違う。良く見ろ」

門の向こう側は陽炎の様に揺らめいていた。
次第にはつきりとしていく。

琢磨は息を呑んだ。

門には琢磨の祖父が移っていたのだ。

祖父は和服を着て道場のまん中で正座し、默想をしていた。

「じいちゃん……」

琢磨は叫んだ。

祖父の目が開く。彼にも琢磨の姿が見えているにもかかわらず、全く動搖していない。

「……琢磨か。元気でやつてるか?」

「ああ、じいちゃん。ごめん、勝手にいなくなつて」

「別に構わん。お前は5歳のときにも修行が嫌だとか書いて五日も家出したんだ。いまや高校生、1年近く家出してもおかしくは無いぞ」

琢磨の顔が紅潮する。

「そんな昔の事をいつまで。…………あ、あのさ、じいちゃん!俺……」

「みな、階まで詰つな。儂はお前を赤ん坊の頃から育ててきたんじや。お前の考えなんぞ手に取るように分かるわい。やりたいことを、目標を見つけたんじやろう?儂の事なんぞ気にするな。お前はお前の道を進め。立ち止まつたって振り返つたってよいよい。大事なことは自分自身が決断することじや。誰かに意見を聞くのも大事じやが、必ず自分のことは自分で決めよ、いいな」

「じいちゃん・・・ありがと」

そっと、ガルムは後ろから琢磨の肩を持つ。

「あなたがタクマ君のおじい様ですね。私はこの子に『戦い』と『生き方』を教えている者です」

「そうですか、あなたが・・・お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

「ガルム＝グランベルツと申します」

「ガルムさん。どうかわが不肖の孫をよろしくお願ひします」

タクマの祖父はそういうて頭を地面に付くべうりい深く下げる。

「確かに、お預かりいたしました」

「ガルムさん、そろそろ私の魔力が尽きますー。」

ガルムはルマチアを振り返り叫び返す

「後どれだけ持つ！？」

「10秒と持ちません！」

ルマチアの魔力の奔流はだんだんと細くなり、消えた。

「ガルム、ガルム、ガルム、ガルム・・・」

門は徐々に閉まつていぐ。

その時！タクマの祖父が動いた！

突然片膝立ちになつた彼は傍に置いてあつた刀を門に投げたのだ。門が閉まりきる直前、刀がこちらの世界へと渡つた。

「餓別じや、生きろよ、琢磨！」

「ゴーダ、ゴーダ、ガダン

門は閉まりきつた。

門は四散して魔力の塊となつた。

これも暫くすると自然消滅することだろう。

「・・・じいちゃん」

琢磨は泣いていた。

それをアシェルはそつと抱きしめる。

ガルムは刀を持つとルマチアの元に向かう。

ルマチアは全魔力を使い切り、へたりこんでいた。

「立てるか？」

「は、はい・・・何とか」

ルマチアは杖で体を支え、何とか立ち上がる。

「無理をするな。ほら、俺の魔力を使え」

ガルムの手から放たれた魔力がルマチアへと移る。

「・・・。ありがとうございます」

ルマチアは杖なしでもしつかり立てるほどになつた。
そんな彼にガルムは刀を渡す。

「これが機工剣『刀』ですか、はじめて見ました」

ルマチアは刃を鞘から抜いて眺める。

「きれいな紋様ですね。軽く曲がつていて片刃ですか。それでどう
したんですか?」

「これはタクマの世界から門を抜けてこの世界に来た。何らかの魔
力が込められていると見て間違いないだろう。疲れているのに悪い
が『見て』くれ」

ルマチアは神妙な顔になつて頷く。

「確かに。そう言わればおかしいですよね。普通の物質ならば分
解されるか消滅する。しかしこの刀はどうもおかしくなつていない。
・・・わかりました、少々お待ちを」

ルマチアは刀の刃をじっと見つめる。

「……ふう。分かりましたけど、正直す」この一言に感激ですね

ガルムはルマチアから刀を受け取つて尋ねる。

「どうだつた？」

「内包魔力量が神聖武器のそれを上回つてます。神器までは及びませんけれども」

「・・・」

「刃の素材はオリハルコンに似た物質。オリハルコンの性質はござ存知ですよね」

「ああ、魔力層が何層にも別れていて奥に行けば行くほど硬さや内包できる魔力量が増す」

「その通りです。今まで発見されたオリハルコン最高の層の数は10。これは全部で1~3層あります」

「馬鹿な！それじゃあ・・・」

「ええ。これは硬さだけならオリハルコンを越えていきます」

「・・・・・。ルマチア、明日この刀に封印を施す。お前も付き合え」

「・・・分かりました」

よつやく泣き止んだのか琢磨とアシェルが来た。

「帰るぞ。俺も疲れたしルマチアは魔力が殆ど無くなってる。だから明日一日は休ませろ」

そうガルムは言って、4人は一日休養を取ることにした。

次の日の朝、

ガルムとルマチアは早くに洞窟の外で刀に封印を施していた。複雑な魔法陣から刀を取り出した。

「どんな封印を？」

「13層から11層まで魔力封じと認知妨害魔法を施した」

「確認してみましょう。…………確かに、私でさえ注意深く見ても11層以降の存在が分かりません。流石ですね。」

タツタツタツタツタ・・・・・・

「師匠！俺の刀が！・・・」

手元に刀が無くて驚いた琢磨はガルムの元へやつてきた。
そして琢磨はルマチアの手の中にある刀を見てほっと息を吐く。

「すみません、タクマさん。刀をどうしても見たくてガルムさんに
お願いしたんです」

はい、と琢磨に刀を返すと、

「それじゃあ朝ご飯にしましょうか」

「おー、そうだな。タクマも来いよ」

「俺は、少し刀振つていいか？」

「おう、早く来いよ」

そう言つてガルムとルマチアは先に家へと帰つていつた。琢磨は鞄を洞窟の壁に立てかけ、何度も振る。

ふと、なんとなくこの刀の銘を見たくなった。
琢磨は手際良く柄を外し、予想外の銘を目にした。

琢磨

なんと自分の名が記されてあつたのだ。

この時、琢磨はある思い出が蘇つていた。

——— 13年前 琢磨4歳の時 ———

「琢磨、将来この道場を継ぐ気はあるか?」

「うん！僕、おじいちゃんみたいに強くなつていろんな人に教える

んだ」

その言葉を聞いて祖父は心底嬉しそうに笑った。

「はっはっはっはー！ そーかそーかー！ ならばもつともつと強くならな
いとな。それと、琢磨が儂の跡を継ぐならそれなりのプレゼントを
やろ？ 何が良い？」

「それなら刀が良いー！ おじいちゃんの持つてる様な強くて格好良い
刀！」

「ほう、刀か。良かるつ、楽しみにしていなさい」

「わーい」

琢磨の両頬は再び涙に濡れていた。

「じいちゃん……。『めん、『めん。……俺は……僕は……

「

琢磨は暫く泣き続けた後、こぶしで涙を拭いとり、
柄をつけて鞘に入れた。

(じいちゃん。俺は強くなるよ。自他共に認める、最高最強の剣士
になつてやるー！)

そう心に決め、3人の待つ洞窟へと走つて戻った。

#30『ドレア・ナクス・ラタイ』異世界の門（後書き）

今までで最も長いんじゃないでしょうか？（笑）

こいつって目的をはつきりさせた琢磨、これからは純粋に強くなつていきます。

次話は再び番外編です。

主人公は今回も出てきた琢磨のおじいさん。
おじいさん視点で書いていく予定です。

蛇足：刀の紋様について

呼び方が色々あるそうですが、

作者は全く知りませんので書く予定はありません。

昔、某漫画で読んだ「乱れ刃」しか知りません（笑）

番外編 #31 生き様（前書き）

今話は御都合主義な話となります。あらかじめ「」で承ください。

秋も深まり、朝の風も冷たくなつてくる今日この頃。

――― 日本国 都内 某所―――

広々とした邸宅。

和がいまだ残る家の庭先で1人の老人が紫壇（国内では最も堅い木）で素振りをしていた。

老人の名は

【川崎 嶽真】

川崎 琢磨の実祖父であり、よわい99歳の古来から存在する武術の名家の宗主である。

川崎家は卓越した武術と決して揺らぐことのない精神から、政府から財政、警察、ヤクザやマフィアとも親交は深く、信頼も厚い。

どこかに属することではなく、求められて宗主が気に入りさえすれば指南してきた。

（全く、夏休みも終わつたといふのに一琢磨は一体どこをふらついておるのじゃ！）

朝陽が昇る前から素振りをしていた嶽真は心の内で毒づいていた。普通は集中していないと型は崩れてしまうが、型を学んで80年の嶽真にはもはや心と体は分離している。おそらくだが、気絶しても素振りをし続けるのかもしない。

軽く汗をかいた巖真は、携帯電話を使って電話をかける。

プルルルル プルルルル プルル、プチッ

3回目の一撃で相手は出た。

『はい、私です。師範から掛けてくるなんて珍しいですね。今日はどうなさいました?』

「うむ・・・」

『?』

「実はお前に頼みがあるんじゃ。孫が3ヶ月前から行方不明での」

『ええつー? 大事じゃないですか!』

「それでの。あやつはヤクザでもかまわず喧嘩を吹っ掛けるからのう。ヤクザを束ね上げるお前なら調べられると思つての」

『わかりました! 鍋島組が総力を挙げて探し出して見せます! ! ! . . .しかし、我々は西日本に傘下の組はいませんので日本全国と申つわけには・・・』

「それは心配いらん。他のつてがあるのでな。だからお前は東日本を頼む」

『分かりました。鍋島組総裁【鍋島 雪斗】。全力で探さして頂きま

鍋島は興奮氣味にそう言ひ。

「つむ、ではな」

鍋島雪斗。彼は厳真の弟子の一人である。

彼は元々総裁になるつもりはなかつたが、抗争で命を狙われた際に厳真に命を救われた。

偶々逃げ込んだところが厳真の道場だったのだ。

事情の知らない厳真は快く彼を家に泊めてしまつ。

それを知つた相手側の幹部が拳銃や日本刀などを持つた30人が夜襲を行つた。

不穏な気配を感じ取つた厳真は30人全てを素手で行動不能にすると、

今では禁術になつてゐる技で幹部を拷問して全てを話さした。

雪斗はこの時、厳真に惚れこみ、雪が降りしきる中で1週間門前で座り続けた。

その心意氣を良しとした厳真は彼を弟子にすることを決め、抗争に介入した。

まず抗争の原因となつていた幹部同士の組を制圧して拘束した。

それを2人の総裁、雪斗の祖父と関西の組の総裁に手紙つきで送り返した。

『抗争をやめよ。そもそも存在自体をつぶす』

幹部の組達は激怒し、道場に殴りこもつましたが、総裁たちは止めた。

なぜなら分かつっていたからだ。

厳真が一声かければ、全国の武術家の9割が敵に回るからであった。
それほどまでに『川崎家宗主』の言は重い。

それ故に『雪斗は儂が預かつて育てることにした』と言われてもどうしようもなかつた。

雪斗は総裁が父に代わると、厳真のもとを発つて若頭となる。

そして現在、彼は総裁となり、東日本全てをまとめる総大将となつたのだった。

彼は厳真に対する恩返しの為、今回の頼みを快く引き受けた。

続いて厳真は違う番号に電話をかけ始めた。

プルルル、プチッ

一回田の「ホールで相手は出た。えらく早い。

『師範！お久しぶりです！ようやく警視庁の特別顧問を受けてくれる気になりましたか！？』

(つるさこな)

厳真は受話器の向こうから聞こえてきた大音声に眉をひそめる。

電話の相手は【太田 泰嘉】^{おおた たいか}。

日本全国の警察のトップである警察庁長官を務めている男である。
性格は温厚、しかし一度仕事に関われば情け容赦はなくなる。
警察の幹部以上は現場に出ることはまずなく、
上層部は現場を軽く見がちであった。

それに違和感を感じた太田は必要最低限のコネだけを使い、今の座

に登りついた。

その後、彼は現場を軽く見ないことを暗黙の了解とした。
おそらく、今この時も彼の周りでは彼を蹴落とすべく裏工作が進んでいるのだろう。

しかし彼はそれを阻止すべく動いてはいるが、今の座に執着する気はないようだ。

なぜなら一度なってしまえば影響力は計り知れないからである。
彼もまた、警察学校時代、特別講師をしていた厳真を師事していた。
その際に厳真の精神を知り、今の考えを得たらしい。

「いや、何度も言っているが儂ももう歳じや。体の節々が痛うて痛うてな。今回掛けたのは別の要件じや。実はお主に頼みがあつての。実は・・・」

『成程・・・。わかりました。しかし西日本だけによろしこのですか? 東日本は・・・』

「つむ、実は東日本は別の者に頼んでおつてな

『誰ですか?』

「鍋島の坊主じや」

『鍋島? ・・・ ああ、鍋島組ですか。それなら東日本は大丈夫ですね。しかし、大々的な捜査が無理ですからあまり役に立たないかも知れませんよ?』

「安心せえ。他にも当てがあるからの

『そうですか。では失礼して「待て」・・・はい?』

「毎日の鍛練は怠つてはおらんじやねつな?」

『もちろんですとも。毎日執務室で型をして、秘書に睨まれてますよ』

「やうか、なりばよい」

厳真はその後も、財政界、政治界、武術界、スポーツ界と様々なつてに電話をかける。

出た相手は誰もが快く琢磨搜索を引き受ける。

厳真是鍛練こそ厳しい物の受けは良い。

どんな者のどんな言葉も真剣に考えて答え、全力で言を返すからであつた。

それから2カ月、半年と時間が過ぎていく。

いまだに確かな情報は来ない。

厳真是珍しく早朝の鍛練を取りやめ、道場で黙想をしていた。いつもなら愛刀【澄和】^{すわ}をそばに置いているが、今はなぜか琢磨に渡すつもりだった【琢磨】を置いてある。何やら虫の知らせのようなものを感じたのだ。

以前も何度かこのよしなことがあった。

実はこの時、厳真はこの世の真理を体得していた。

80を超えた時、彼は自らの内に何かが流れるのを感じた。

90の時、彼は大氣を漂つものを『氣』と名付けて感じるようになつた。

95の時、彼は大氣の『氣』すらも操ることを可能にした。

その『氣』が今日は朝からひどく乱れていたのだ。

道場で默想することで、より強く『氣』を感じて異変を探る。

「じいちゃん……」

厳真はゆっくりと眼を開けた。

眼前にはガラスのような門がそびえたつていた。

存在感が他とは異なる。

おそらく『氣』の塊なんだね、と厳真は考えていた。

「……琢磨か。元氣でやつてるか？」

「ああ、じいちゃん。ごめん、勝手にいなくなつて」

「別に構わん。お前は5歳のときにも修行が嫌だとか言つて五日も

家出したんだ。こまや高校生、一年近く家出してもおかしくは無い
ぞ」

琢磨の顔が紅潮していく。

(後ろにいるのは彼女か? 全く鍛練をさぼりおつてから) ··· ···

「そんな昔の事をいつまで。··· ··· ··· あ、あのを、じこぢ
ん! 僕··· ···」

「『ままで』言つたな。儂はお前を赤ん坊の頃から育ててきたんだ。お
前の考えなんぞ手に取るように分かるわい。やりたいことを、目標
を見つけたんじゃろう? 儂の事なんぞ気にするな。お前はお前の道
を進め。立ち止まつたって振り返つたってよいよい。大事なことは
自分自身が決断することじゃ。誰かに意見を聞くのも大事じゃが、
必ず自分のことは自分で決めよ、いいな」

「じいちゃん··· ···ありがと」

そつと、ガルムは後ろから琢磨の肩を持つ。

「あなたがタクマ君のおじい様ですね。私はこの子に『戦い』と『
生き方』を教えていたる者です」

「そうですか、あなたが··· ···。お前をお聞きしてもよろしいで
しょうか」

「ガルム=グラントベルツと申します」

(外国人か? まるで日本人のようだな··· ···。いやそれよりも、何

「こう使い手だ。」の人がなり

「ガルムさん。どうかわが不肖の孫をよろしくお願ひします」

タクマの祖父はそついつて頭を地面に付くべうい深く下げる。

「確かに、お預かりいたしました」

ガルムと名乗る男は苦しそうに言葉を返す。

責任の重さを感じ取つてゐるのであらう。

もしくは、厳真の琢磨への期待を感じ取つたのかもしれない。
しかし、彼も武人であるならこの気持ちも分かるのだろう。

弟子が成長してくれさえすれば師はそれ以上を望まないことを。

「ガルムさん、そろそろ私の魔力が尽きますー。」

ガルムは後ろの男に言い返す。

あの男も不思議な『氣』をもつておるな。

剣術ではないようだが武術はたしなんでいるのであらう。

「後どれだけ持つー？」

「10秒と持ちません！」

どひゅあ、これで琢磨の顔は見納めとなるよひだ。

門は徐々に閉まっていく。

(もつ儂に未練は・・・あるー)

厳真は片膝を立ててそばに置いてあつた刀【琢磨】を琢磨に向かって投げる。

これは氣をまとわせて作った特殊な刀だ。

あの異質な門も『氣』であるならば抜ける筈だ。

「餓別じや、生きろよ、琢磨！」

「アアアアア、ガダン

門は閉まりきつた。

門は四散して『氣』の塊となつた。

これも暫くすると自然消滅することだろう。

厳真は考えていた。

琢磨の声が聞こえた時は怒鳴り散らすつもりであつた。今まで何処に行つっていたのかと。何をしていたのかと。

しかし琢磨の顔を見た瞬間、全ての考えは消し飛んだ。

『男子三日会わざれば刮目して見よ』

たつた3日で変わるのであれば、1年でどれだけ変わるのが。琢磨は立派に成長した。

それもこれもあのガルムという男の手腕なのである。あの男は『生きる』ことが何なのかを知つている。

全てを任せても大丈夫だろう。

何も、そう。何も問題は存在しない。

これで弟子達は全員が儂の元を巣立つていった。

厳真は搜索に協力してくれた弟子達に電話か掛けよつとして、やめた。

代わりに筆を取り、手紙を書くことにした。

『儂は孫に再会することが出来た。奴は武術家として、1人の男として立派に成長していた。

儂と同等、いや、儂以上の師にも出会ったことでさらなる成長を遂げるのである。

儂の本会は達成した。お主らのような武術家を未来に輩出することが出来たのだ。

この世に愛情があるものの、未練など微塵も存在しない。

儂は天に、お主らと出会ったことを感謝しに行くとする。 川崎

厳真』

東京の夜

ネオンによつて煌びやかに明るく照らされる中、
ある一帯もまた、明るく照らし出されていた。

しかしそれはネオンサイトなどではない。

真っ赤に燃えあがる炎である。

野次馬が集まる中に異質な2人の姿があつた。鍋島と太田である。彼等は川崎邸が火事であるという状況を聞き、部下の制止も振りはらい、呆然と炎に見入っていた。

『川崎流本家道場全焼。川崎家宗主【川崎 厳真】死す』

その情報は翌朝には全国の川崎流を元にする武術家全てに広まつていた。

その一方で、琢磨については何一つ情報は回っていなかつた。

警察と政治家が琢磨の存在自体を全てもみ消したのだ。

これは厳真の命令であつた。息子の成長を妨げぬように、と。

意味など彼らには分からなかつたが師の言葉である。

異論など有る筈がない。

【川崎 厳真】享年99
かわさき げんしん

川崎流武術道場宗主。

直接の弟子の数83人。指導人数1000人以上。

川崎流傘下（非公式）数5。

川崎流派生流派23。

52歳の時に妻【千絵】^{ちえ}を嫁に取るが出産後に死亡。

息子夫婦は旅行中に孫息子と供に事故死。

20XX年9月22日、突如焼身自殺。

彼自身は火事の後も、一步も動かずに1人黙想していたことから自殺と断定。

彼に親しかつた者達が何か事情を知つてゐるという噂があるが、全員がこれを否定。

我々記者団は真相を知ることは出来ないだろう。

といつわけで、厳真さんがお亡くなりになりました。
ファンタジー戦記物は人が死にやすいとはいえ、
このような近しい人や眞面目な人が亡くなるのは心が痛くなるもの
です。

ちなみに、厳真さんをギルドランクで表すとしたら
クラスSとなるでしょう。

理由はただ一つ、体力です。

これさえ全盛期のままであればSランク超えてしまうでしょう。

『気』

気は魔法や何かと一緒にされそうですが、実は似て非なるものです。
魔法は言つてみれば大気（空気）のようなものです。

気は世界を構成するもの、いわゆる分子とか原子などを指します。
少しかじつことがあるならば分かると思いますが、
そう、魔法は氣で出来ているのです！－

それを自在に操る厳真はいわば創造神と同じなんです。
創造の仕方が分かっていないだけです。

#32 聖都デイルティパレス

聖都デイルティパレス

竜人族を除くすべての部族が信仰するナバルディ教の総本山である。また、それと同時にクラリー聖王国の首都でもある。

都のあちらこちらには小さな教会が点在しており、中心には2つの大きな建物がある。

1つは『ナバルディ大神殿』

大賢者ナバルディの栄誉をたたえると同時に、神の御声の届く場所もある。

神の御声を聞き、信望者に伝えるのが神官の役目である。大神殿の内部に存在する『陽光の間』にて、

【姫巫女】は神の相手をするといわれている。

姫巫女とは神に寵愛された者であり、

出自は問われないが、女性が必ず選ばれる。

教皇は姫巫女ほど御声を聞くことは出来ないが、それでも神と言葉を交わすことが出来る。

教皇は姫巫女と供に信者を神の意のままに動かすことが使命とされる。

つまりは、

教皇は指導者であり、姫巫女は象徴なのだ。

そして大神殿よりは小さいが、それでも他の建造物よりもはるかに大きい物が『皇立図書院』である。

皇立図書院とは、大陸上のはほぼすべての本が収蔵されている場所だ。

図書院は代々、教皇もしくはそれに準ずるものが管理するという決まりがある。

現在の院長はファンダリエマンスという翼人族の老人である。

彼は現教皇レオーネールの旧い友らしい。

院長は教皇の御意見番とされ、実質的にNO・2に位置している。

また、図書院の蔵書は主に3種類に区分されている。

- ・一般図書

絵本から物語・詩・図鑑などで、子供から老人まで幅広い層が通う

- ・古代図書

古代に書かれた文献を主に蔵書されており、魔法書もここに分類されている

- ・禁文書

思想的・実的に読むことを禁止されている文献
隠されている場所は司書しか知らず、教えることを禁止している
中には司書すらも知らない隠し場所もあるとか・・・

今ここに、3人の旅人が足を踏み入れる。

流れは止まらない、速くは無くとも少しづつ、しかし確実に速さを増している。

気付くものは少ない。気付く事が幸運なのか、それとも・・・

#33 酒場の主

ナバルデイ教徒は信条を3つ持つ。

『清』『聖』『静』である。

『いつも清純であれ』

『心に聖を携えよ』

『静を乱さず、求めるな』

いくら敬虔な教徒といえども、人間『静』だけでは生きていいくことは出来ない。

そのため、敬虔な教徒程、騒がしい酒場へとやつてくる。

~~~~~聖都 ギルド中央支部 1階 ミラの酒場~~~~~

ギルドが営む酒場は規模としては中級程度だが、

信用や食べ物の美味しさから、町の人から重宝されていた。

「ミラセーン！赤果獸ラグー・グリアンの煮込み3人前です！」

「ミラ料理長！カジキマンタの刺身2人前ですわ！」

「ミラ様！灼熱魚の地獄ステーキ7人前ですわ！」

従業員は次々と厨房に声をかける。

それに対しても厨房に立つのはただ1人のおばちゃんだった。

【ミラ＝アーヴネス】

クラリー 聖王國ギルド中央支部副支部長兼料理長

ギルドの副支部長と支部長は文官仕事の為、ほとんど仕事は無い。そのためミラは趣味の料理を追求し続け、ギルド内で酒場を開いたのだ。

「あいよ、ちよつと待つてな！・・・ おいあんた達！15番卓のお密さんが手を挙げてるよ。わっせと行って注文聞いてきな！」

「はーい！私が行きます！」

厨房からは手の先しか見えない程混雑しているにもかかわらず、それを見つけるミラに従業員達は感心する。

「はーい。お待たせしました。何にいたしましょうか？」

従業員は人の間を縫つて目的の卓へと辿り着く。

座っているのは3人の男女だ。

人のよれよれな男性、無口な少年と、はしゃいでいる少女だ。

「量の多そうな肉はあるか？」

「えへつと、では『カトリスのステーキ』はいかがでしょう？

「じゃあそれで」

「私はホロホロ鳥の手羽先とハルの実プリンをお願い」

「はい。分かりました。あなた様はどうしますか?」

従業員は青年を見る。

「俺は料理はいい、酒を貰いたい。ルツの果実酒は残ってるか?」

「はい!一昨日大量に入荷したんでいくらでも大丈夫ですよ!」

すると青年は微笑みを浮かべ、

「そつか、ならルツの果実酒を樽2個くれ」

「・・・え?」

「ん?騒がしいから聞こえなかつたか?すまんな。ルツの果実酒を樽2個くれ」

従業員は自らの聞き間違いではないと思い知り、声が自然と大きくなつた。

「わ、わかりました。ルツの果実酒樽2個ですね!」

ざわ・・・

辺りは従業員の突然の大声にざわめいた。

「おい、まじかよ、今の言葉」

「間違いねえよ、俺今聞こえたもん」

さわめきは辰巳ひさ、じつしたもんかと青年は考へていた。

(・・・抜くか?)

剣の柄を手を掛けた所で、

「畠暉はよしてくれよ。ガルム」

ふと後ろを振り向けば、両肩に樽を担いだリリカの姿があった。

「せひ、お望みの樽2個と料理だよ」

「おお、つまりだな。師匠、もう食べて良いか?」

琢磨は待ちきれないといった様子で尋ねる。

「別にいい。・・・それで何でお前が来たんだ? 廚房はどうした  
よ?」

ミラは椅子を他の卓から引つ張つてみるとガルムの対面に座った。

「私の聞き間違いじゃ無けりや、師匠つて言つたかい?」

「やう言つたよ。なんだ? 疊碌したか? その年で

「馬鹿言つてんじやないよ。私はまだ43だよ。ぴちぴちの乙女だ  
よ」

「ぴちぴちってそんな範囲広かつたか?ビリでもいいがよ。 . . 。 ん?」

ガルムは、ミラの後ろから近付く数人の男を見た。

「ようよう兄ちゃん。その酒俺たちにも分けてくれねえか?ま、断つても勝手に貰うがよ。げへへ」

「下衆な笑いをするなよ。耳が腐つて落ちちまうだろ」

「な、なんだとーおい、てめえらーやつりまえ!」

ガルムの返しに男は赤面し、背中に担いだ斧を握る。

「おい、いいのか?」

「なんだあ?今更謝つたって許はしないぞ?」

ダアアン!

「許はしないのはこいつだよー誰に許可貰つて喧嘩をおつぱじめる氣だい!」

ミラは男以上にゴシゴシした手で思い切り机を打ちつけ、男達を睨みつける。

女性とは思えない氣迫に、男たちは明らかにビビっているのが分かる。

しかし、今更引けないと思つたのか、男たちは武器を抜いた。抜いてしまった。

「手はいるか？」

ガルムは//ラの背中に声をかけた。

//サは振り返りずに落ち着いた声で聞き返す。

「本気で言つてんのかい？」の私に？手をだつて？」

ガルムは深く座り直して弟子たちの食事風景を眺める。

(こいつらも手を止めない、か。でかくなつたもんだ)

「落ち着いてるんなら良いぞ。激昂したら危ないしな、相手の命  
が」

「ふん、私への心配はないのかい？」

「それこそ本気で言つてるのか？お前に？心配？」

「うわ、いや、言つてんじゃねえよ！俺の斧を喰らいやがれ」

戦闘の男は身の丈もある戦斧を//ラに振り降ろす。  
それをにやついて見てるのは外から来た人間だけで、  
それ以外は我関せずといった様子で食事を続いている。

男も口先だけではない様で振り降ろす斧もそれなりに速い。

(クラスはCの上位つてどこかな)

ガルムは頬杖を付きながら戦いを見ていた。

//サは軽く鼻を鳴らし、軽々と斧を片手でつかむ。

まさか素手でつかまれるとは思つておらず、男の皿は皿を見開いた。

しかし、男も冒険者。すぐに斧を引いて力を込めるがピクリともしない。

### ピシピシピシ バカリ

ミリは氣迫を鬪氣に変え、斧を素手で握り割った。  
これには周りのよそ者も畠然とした様子でみつめる。

「てめえら誰の店で得物抜いてやがるー次この店で暴れるつて言つ  
なら問答無用で叩き潰すぞ!」

鬪氣は更には殺気に変わり、男達は戦意を喪失し逃げ帰つた。  
ミリは不愉快そうに椅子に座つた。

「おーおー、現役の頃よりも力上がつてんじゃねえか?」

「そりゃあね。私はギルド運営も任されてるんだよ。強いままなのは当たり前じやねえか」

「なあ師匠。何で・・・モグモグ・・・運営してたら・・・むしゃ  
むしゃ」

呆れた様子でガルムは琢磨に言つ。

「食べるか喋るかどっちかにしろ」

「・・・ゴックン。何で運営してたら強いなんだ? 戦線から離れてるから徐々に弱くなるのが普通じゃないのか?」

「いいかい、坊や。ギルドってのはね、出張所や見習い以外は元々冒険者なんだ。これは偶々何かじやなくて絶対的な決まりなんだ。現役時代Bクラス以上。勤めていてもCクラスを制圧するぐらいじゃないと受付にはなれないの。クレーマーも多いからね。そして私の役職は各国にあるギルドの頂点、ギルド中央支部の副支部長。流石に弱いと務まらない役職なのよ。そのために厨房にある調理器具は全て鋼鉄製、料理する度に鍛えられるのよ。どう?驚いた?」

「す」「いな。案外ギルド職員って大変なんだな」

「やつよ、Hリーントなのよ」

「さて、お前ら食い終わつたな。//」「悪いが外してくれないか?」「こから先は俺達の話だ」

//口を尖らせて文句を言つ。

「何よ、まだ全然話してないじゃない」

「しばらくはここに滞在する予定だ。話す時間は幾らでもある」

「分かったわよ、食器下げてもいい?」

「「お願いします」」

琢磨とアシヒルは頷いた。

//は食器を両手両腕に持つて立ち上がる。

「じゃ、ゆづくつしていつてね」

ガルムは軽く手を挙げてひらひらと振る。  
そして2人に向かい、真剣な目を向ける。

「さて、2人とも、これからについて少しばかり話そつか

## #34 足りないもの

「タクマ、アシェル。お前たちは今、自分達に足りないものがある。  
何か分かるか？」

ガルムは酒を樽半分近くを、  
まるで水を飲むかのように飲みほしてから本題に入った。  
・・・酒を口に運ぶ」とは止めずに。

「何つて、ギルドクラスですか？」

「お前らはもう△クラスだ。そつじやない」

アシヒルの答えをガルムは一蹴する。

「なら武具ですか？」

「今お前らが身につけている者以上の物となると、購入金額で国が  
傾くぞ」

アシヒルは服や武器をまじまじと眺める。

「武器はそこそこだがな。防具は超の付く一級品だ。王族でも手に入りにくい素材を使ってる」

「は～、私達はそんなにいい物を着てたんですねえ」

ガルムはコトリとコップを置くと、片肘を付いて琢磨の方を向く。

「せつときから黙つて俯いてるが、お前はどうだ？ タクマ」

「…………経験」

「……ふう。タクマの言つとおりだ。お前たち二人は圧倒的に経験が無い」

そこまで聞いてアショルは大きく手を挙げた。

「おしどりもー、質問がありまーす！」

「ん、どした？」

「でもせつきも言いましたけど私たちはクラスAですよ？ 十分経験を積んだと思つんですけど？」

アショルのその言葉を聞いたガルムは、眼光を鋭くした。

「アショル、パレイナの薬草は田向と田陰のどつねに生える？」

「え・・?ひ、田向？」

「田陰だ。中毒性のあるコア茸の禁断症状は？」

「…………」

「幻覚と平衡感覚の狂いだ」

アシェルの表情は暗い。

自分の失言に気付いたのだ。

ダアン！

ガルムは拳を思い切り机に打ち付けた。  
アシェルは体を縮込ませる。

酒場は異変を感じたのか静まり返っていた。

しかしガルムは一切の氣にも止めずに、

「アシェル、俺は修行中にも何回も言ったよな？『過ぎた自信は身を滅ぼす』と。お前は俺から何を学んだ？ああ？今のお前はな！アシェル！強さはクラスSにも並ぶぞ、お前の思うようにな。だがな！経験から言うとクラスCの連中にも劣ってるんだよ！俺が今までお前らに教えたのはなあ。」

ガルムは座り直し、自分を落ち着かせるように酒をあおる。

「・・・ふう。俺が教えたのはな？中級以上の魔物との戦い方だけだ。ゴブリン達とも遭つても俺は何も言わなかつた。あれは何もお前が正しい戦い方だつたわけじゃない。あんな奴らはミスしても死にはしないからな。困るのはミスして死ぬ可能性のあるやつらだけだ。数をこなすためにお前達には様々な依頼をもつてきてやつた。でもな？それは所詮は修行の一環なんだよ。別にさつきの言葉だって自分なりに何か学んでたならかまわなかつたさ。でもな？今言ったようなことは基礎の1つなんだよ。いいか？学ぶことに終わりなんて無いんだ。俺だつてそうさ。この世のどこにも全てを知る奴なん

んていのさ。もしいるといつなら、それは神ぐらいなもんさ。

分かつたか？アシェル、タクマも

「はい、『めんなさい』です」

アシェルは涙を流しながらもしっかりと返事をし、琢磨もガルムを正面から見返してしっかりと頷いた。

「そうか、分かつてくれたか。それでこれから的事だけどな？お前達には俺のもとを巣立つてもらつ

バツと2人は顔を上げる。

2人は驚愕と絶望を足して2で割つたよくな顔でガルムを見る。

「別に見捨てるわけじゃねえぞ、先に言つておくがよ

その言葉を聞いてほつとする2人。

「今言つたようにお前らには経験を積んでもらつ。この街は首都だから何でもそろつてる。特筆すべきは巨大な図書館だ。分からることは何でも調べたらいいさ。ちょっと興味の持つたことでも構わんさ。存分に利用するといい。そしてあらゆる依頼を受ける。草むしりから宝探しまでな。もし受けれるものがなくなつたら街を移動してもいい。一応こここのギルドには冒険者専用の部屋を2部屋取つてやつたから使え。ただ移動する際にはどこに移動するか受付に伝言を残してくれ。来るべき時が来たら俺が迎えに行くからよ」

「師匠、来るべき時つて具体的にいつなんだ？」

琢磨はガルムに疑問を投げかける。

「最低1年、長くて5年だ」

「そんなにですか！？」

アショルは叫ぶ。

「これでも短い方だ。昔は短くて10年とかもあつたんだぞ？俺はお前らには期待してるんだ。別に期待の応えとは言わん。でも失望はさせんぐれよ？」

「が、頑張ります」

「おつかれ、それじゃあ頑張れよ～」

「師匠は俺達と離れている間は何をするんだ？」

「ん？俺？俺は、ギルドの要請依頼と放置依頼を受けて回るつもりだ」

「なんだ？それ」

「あ～、要請依頼は『お前に合った仕事だからやつてくれないか？』って物で、放置依頼は『難しそう、か、割に合わないから放置されていい』って物だ。ギルドの場所によつては回せる冒険者がいることが多いんだ。だから無駄な死者を出すぐらいなら放置させて強い奴が来た時に回すことが決まりとなつてるんだ。お前らの修行のために一切の要請依頼は放置してるからなあ。プラチナとしての仕事をこなさなきゃあならんのだ」

「要請依頼つて放置してもいいのか？」

琢磨は眉をひそめてガルムを心配する。

「心配してくれんのか？ありがとな。まあ、放置したら本部の方から睨まれるよ、結論から言つとな。でもその程度気にすることはないさ。今回はお前達の修行のためだし代わりの依頼も多く受けてるしな。お前たちもAクラスだからこれからは要請依頼も増えてくるだろう。受けた受けないはお前達の自由だが、可能なら受けるといい。もしプラチナを目指すなら出来るだけ受けろ。そっちの方が良いことがあるかもな」

「受けなかつたら罰則はあるのか？」

「なあんにも。ただプラチナは勅命依頼つてのがあってな。総裁から直々のありがたい依頼が回つてくるんだよ。それは『受けない』つて選択肢が無いんだよ。面倒臭いことにな。もし断つたら・・・」

「断つたら？」

冷静に琢磨は聞き返す。

その様子にガルムは嘆息する。

「・・・はあ。もつと怖がれよ。変な所で可愛げのない奴だ。ま、その先はプラチナに昇進して総裁から直接聞きな」

ガルムは酒樽を直接つかむと一気にあおった。  
ビーヴヤーリもつ1個分飲み干したらしき。

「さて、と。お前ら聞いておきたいことはまだあるか？暫らくは聞けねえぞ」

「師匠、あと1つだけいいか?」

「おう、何だ?」

「図書館つてどうやって利用するんだ?」

「どうやつて?・・・あー、図書館は基本貸し出し禁止だ。入るのに身分証明書はいらん。後の詳しいことは図書でもひとつ捕まえて聞け」

ガルムは立ち上がり、誰の田も無いことを確認すると、素早く残った1樽を異次元へと保管した。

「じゃあな。愛する弟子達よ。どうか死ぬなよ。戦争じゃないから武運は祈らんからな」

そう言つてガルムは手を振つてギルドから出でていった。

残された2人はそれを無言で見送つていた。

これから活動について話していた琢磨とアシールの前に果実ジュースのコップが置かれた。

2人が腕を眼で巡ると、酒場の店主のミラフが立っていた。

「頼んでませんよ?」

眉をひそめた琢磨はミラフに申し訳なさそうに言った。

「サービスよ。宿の滞在費と暫くの最低限の食事代はガルムから貢つてゐるよ」

ミラフは空になつていたコップを他の従業員に渡して、自らは椅子に座つた。

「厨房のまづは良いんですか?」

今は口をまたいでしまつたが、酒場の活気はまだまだ衰えを知らない。

依頼に出ていた冒険者達が疲れを癒しに来るため、

今の時間は酒場としては稼ぎ時であり、アシールの疑問はもつともだつた。

「いいのいいの。私じゃなくとも厨房は回るしね。それとも私と話をするのはいやかしりっ?」

「や、そんな」とはあつませんー

首が千切れんばかりにアシエルは首を振る。

ミラはかわいいなあ、と呟いてアシエルをからかう。

琢磨の予想通りアシエルの頬に朱が差すのを見て苦笑した。

「ふふふ。それで君達はこれから予定は決まつたかい？」

「師匠の言つたとおり、さまあまな依頼を受けたつもりです。薬草摘みや鉱石掘りも含めて」

「それがいいわ。さて、それじゃあ本業のほうの仕事もこなしますか」

よいしょとミラは立ち上がると、

「付いて来な。あ、コップは持つてきていよい、今回だけだけど」

2人はお互に顔を合わせるも何の答えも出ないため、小走りでミラについていった。

副支部長はやはり偉いらしく、ミラを見咎めた職員達は、立ち止まって胸に手を当てて深く頭を下げる。

「お疲れ様です、副支部長」

「何かありましたら何なりとお申し付けください」

「ん」

ミラはそれらに軽く手を上げて通り過ぎる。  
やがてミラに付き従つた2人は4つの大きな掲示板にたどり着いた。

内3つはカラフルに装飾されており、ぞれぞれ大量の紙が貼り付けてあつた。

残る1つは少し離れた位置にあり、他よりもかなり小さかった。その掲示板には2・3の紙しか貼り付けてなかつた。

「いいかい？ 右の茶色いのが採掘依頼、左の緑色のが採取依頼、そして中央の赤いのが討伐依頼よ」

そこに1組の冒険者一行が現れ、一枚の依頼書を手に取るとソレを破つて受付に渡した。

「依頼書は今みたいに破りとつてくれたらしいからね。そしてこれを受付にギルドカードと一緒に出してくれ。そうしたら依頼開始だ。ここまでいいかい？」

2人が頷くのを確認すると、ミラは受付の女性から何かを受け取つて2人に見せた。

「これは<sup>ラバ</sup>魔王の角よ。ところでガルムは修行中戦利品をどうしてた  
？」

「戦利品ですか？ いつもは市場や薬師などに渡してましたけど・・・

」

「あー、そうかい。じゃあ一応。まれに希少性な部位を持つ魔物がいるの。それを剥いでギルドに持つてくると定められた額で買い取るので。それで一定のギルドポイントを加算・・・する」

ミラの説明は尻すぼみになり、宙を見つめて遠い眼をした。

「あー。だからギルドに譲らなかつたのか。もし譲つたらクラス昇格を早めちゃうもんねえ。相も変わらずガルムは・・・ってそれはいいや。まあ、そんな感じでギルドは買い取るからね。ちなみに買い取つた部位は必要な薬師や商人ギルドに卸してから安心してね」

「どんな魔物が希少品を持つんですか？」

「今見せた兎王<sup>ラバーン</sup>の角・薔薇蟻<sup>ローズアント</sup>の胃酸・槍大茸<sup>マタタゴ</sup>の笠、それから・・・多すぎて言えないわね。ねえ・・・」

ミラが受付嬢を振り向くと既に机の上には2冊の手帳サイズの本が置いてあつた。

「あら?仕事が早いわね、流石よ。はいこれ

ミラは2人の手に本を置いた。

### 【魔物大全・第3版】

著者：ヴァール＝ワーナー

シャルベ王国元師団長の記した魔物の全てを記した書物。  
故ヴァール氏は武術とともに絵描きとしても大成しており、4国の現王の肖像画も氏の作品である。

氏は齢60で大陸を旅し、10年掛けてこれを完成させる。  
記載内容は全長・体重・攻撃の種類・対処法・亜種の有無等である。  
また、冒險者にも重宝されている。

他に、【薬草大全】【海淵大全】【作物大全】がある。

アシェルは恐る恐ると言つた感じでミラに声をかけた。

「あの～、ミラさん。私これ持つてます。私もお師匠様の下に来るまでは冒険者をやっていたので」

そう、アシェルも元をたどればいつぱしの冒険者なのである。魔物大全は冒険者の必需品であるので、アシェルも当然ながら所持していた。

ガルムは、2人の修行の際には依頼を持つてきて2人にこなせるということしかしなかつたため、

琢磨は「コレを手に入れることはなかつたのである。

その上、アシェルも個人的「コレを使うことをガルムから言われていたため、

琢磨は存在すら、今の今まで知らなかつた。

「あら、 そろなの？ でもどうせボロボロでしょ？」ここにはまだ何十冊もあるから貰つときなさい。1冊が2冊になつたところで大きな差はないもの。それから坊やに言つておくわ。その魔物大全は1番新しいけれど完璧なものではないわ。なぜならどんな魔物も環境によって生態が変わるのである。だから書いてある内容と違つことを発見したら書き込みなさい。それがコツよ」

「そりなのかな、ならペンも用意しないとな」

琢磨はミラの助言を聞くと、用意するペンを売つている場所を町を散策していくときのことを思い出して、頭の中で探し始めた。

「そ・し・で?」のペンを使つといいわ

ミラは懐から鮮やかな赤と青の2本のペンを取り出した。  
見た感じノック式のボールペンだ。

「これは私が今の地位に付いたときに友人から貰つたものよ。私が持つていても仕方ないからあなた達にあげるわ。使われなきやのペンたちも可哀相だものね」

アシェルは赤いほうのペンを受け取ると、待ちきれないとばかりに手の甲へ試し書きをしてみる。  
しかし、ペンを傾けたり力を込めたりしても、一向にインクが出てこない。

更には魔物大全に書こうとしても、結果は同じだった。

「ミリさん、これインクがないか壊れていますよ」

がっかりと肩を落としてアシェルはペンをミリに向ける。  
ミリは無言でそれを受け取り、アシェルの手の甲にすりすりと書く。  
一瞬キヨトンとしたアシェルは自分の手の甲に残る赤いインクと、ミリの手にあるペンを交互に見つめる。  
確かにさつきアシェルが試したらインクは出なかつた。  
しかし実際に手の甲には赤い字が。

ミリは無言で意味ありげな微笑を送るだけである。

「これは魔道具の一種よ。マジックアイテム使用する魔力は最下級の属性魔法の数十分の1、気にする程度ではないわ。使い方は簡単。ペンに魔力を通わせるだけ。今書いたように赤いペンは赤を、青いペンは青の字が書ける

わ

得意げに語るミリは、昔やう友達に言われたんだけどね、と付け加えて笑う。

そこで琢磨は、

「・・・俺は魔法が使えないんだけど」

ミリサの言葉を聞いて、えつ、と驚きの声を上げる。

「そりなのー? ゴールドクラスだから魔法を使えるかと思つてたわ。  
・・・そうねえ、いいわ! 私の執務室に行きましょう。そこで魔法  
を教えてあげるわ」

ミリに連れられて2人は副支部長執務室へと足を向けた。

#36 魔法の力（前書き）

遅くなりました事をお詫び申し上げます

## #36 魔法の力

／＼＼＼＼ギルド中央支部 副支部長執務室／＼＼＼＼

支部長の執務室は最上階に、副支部長ミラの執務室はその下にある。執務室は本棚と仕事机、来客用のソファーとテーブルがある質素な部屋である。

執務机のさらに奥には大きな一面張りのガラスがあり、そこから大神殿、皇立図書館が見える。

支部は聖都では3番目の中の高さの立てもであるのだ。

このことから聖都ないにおけるギルドの重要性がうかがえる。執務室の隣の部屋はプライベートルームがあり、ミラはそこで寝泊りをしているらしい。

自らの執務机の中から1個の水晶を取りだしたミラはおもむろに話しが始めた。

「これは魔結水晶。水晶の中に5属性の魔素が均等に含まれてるの。ちなみにリア度は上から2番目のAクラスよ」

琢磨は無色で透き通った水晶を見つめながら、疑問を口にする。

「魔素っていうのは？」

「魔力を構成するものよ。5属性の魔素に加えて光・闇・無属性の魔素もあるわ。魔法師は自らの内魔力で空気中の魔素に働きかけて魔法を作り出すの」

ミラはそっと水晶を来客用のテーブルに置くと、琢磨とアシェルを

ソファーに座らせ、

自らも反対側のソファーに腰を下ろした。

「いい？人には魔法には向き不向きがあるわ。ほとんどの人は魔法師が使える属性は2種類まで。得意魔法は中級から上級、もう1種類は出来て初級が良い所。中には3・4種類使える人もいるけど1つでも中級が使えればその人は才のある人よ。また逆にほとんどいないけど魔力を全く持たない人もいるわ。その人は当然魔法を使うこともできないし、魔具を使うこともできないわ。あれは内魔力を引き出して使用するものだからね」

「・・・」

ぽつりと琢磨が何かを呟いた。

その呟きはミラに、隣にいるアシェルにさえ聞こえないほど小さかつた。

「ん？何だい？」

「師匠は・・・師匠はどのくらいなんだ」

その言葉に、ミラは眉をひそめ、腕を組んで何かを考える。その姿は部屋の空氣とともに合つており、一枚の絵になりそうなほどである。

暫らくしてミラはおもむろに口を開いて話し始める。

「トップクラスね。ガルムは剣術と体術を中心に戦って、魔法を使うところを見る人は殆どいないの。でも私はわかるわ。あの知識に対魔術、その魔法の射程距離・攻撃範囲・持続時間を知っていないと出来ない芸当が多すぎるの。私はプラチナクラスとの交流は少な

いからギルド最高戦力者達の実力はあまり知らないけれど、知っている中ではガルムが一番魔法に関しては強いだろうね」

「師匠は一番強いのか・・・」

噛みしめるように琢磨は一語一語ゆっくりと紡ぎ出す。  
その様子にミラは一抹の不安を感じて言葉を足す。

「あんたが今どんな気持ちなのかはわからないけれど、変な気は起  
こさないことだね。ガルムの強さははっきり言って異常よ。他のブ  
ラチナクラスと比べても、纏つてるオーラは劣っていても、その身  
に潜むオーラは全体が見えない。あれは『天才』や『鬼才』の類じ  
やないよ。もつと別の何かだ」

ミラはそこで一拍置いて、  
虚空を、しかし誰かを睨みつける

「アレに追い付く必要も、追い抜く必要もないよ。あんた達はあん  
た達の『強さ』を身に付けるんだ。それを今ここで約束しな。そう  
すればあんたに魔法を教えてあげる」

琢磨はゆっくりと領きを返し、

それを見たミラはひとつため息をついて笑顔になる。

「それは良かった。じゃあアシェルが退屈してゐみたいだから早速  
始めるよ、立ちなー」

「や、そんな」とはつ！

必死にアシェルは違うと言い張るが2人はそれを無視して立ちあが

る。

それに気付いたアシェルはムスッとした表情で座つたまま2人を見守ることにした。

「いいかい？魔素は血液中を流れて体の隅から隅まで流れてる。まずはそれを自覚して貰う。自然体になつて目を閉じなさい。そして体全体に意識を飛ばしなさい」

琢磨は言われたとおり自然体で目を閉じた。

人に見られていることもあり、しばらくの間は全身に力が入り、緊張させていた。

それを何度もミリに注意され、ようやく落ち着いて呼吸も緩やかになってきた。

そつと、琢磨は額に誰かの手が触れられるのを感じた。  
しかし誰の物かは考えられないほどに集中していた。

アシェルも琢磨の邪魔にならないよう口を引き締めて、  
決して声が出ないように心掛けた。

その行動は集中することのむずかしさを知っているが故だつた

その時、琢磨は自らの体を駆け巡る何かに気がついた。  
それは頭のてっぺんから足の先まで細かく駆け巡っていた。  
やうに右手につるつるとした感触がある。

ミリは琢磨の右手に水晶を挿ませると、  
もう片方の手でそつと琢磨の手の甲を包み込む。

すると琢磨の手と水晶が淡く光る。

次の瞬間、部屋に青の閃光が進つた！！

水晶は粉々に砕け散り、窓もまた割れて下に落ちる。本棚からは多くの本が部屋に散乱した。

突然の爆風に顔を手で覆っていたミラとアシェルは、我に返るとすぐに琢磨のもとへと走り寄つた。

「大丈夫！？」「怪我はないかい！？」

煙が晴れると、そこには青いオーラを身にまとつた琢磨の姿があつた。

それを目にした2人は目をこれでもかと言わんばかりに見開く。

「なんて・・・魔力量よ」

アシェルは信じられない様に言つた。

「ねえタクマ、あなたガルムの奴から何か貰つてないかい？」

琢磨は胸元から護石を取り出して見せると、ミラは思い切り壁を叩いて激昂した。

「あんの馬鹿ガルム！！なんて物を持たしてゐるのよーーー！」

「えつー？えつーーーーーー？」

ミラの変容に琢磨は困惑する。

「その様子じゃ何も言われずに持つてたみたいね。それは通称『神護石』。不死の神酒『エリクサー』、不老の神酒『ネクタル』、生命の源『賢者の石』、神の剣『其処に立つ物』、神の盾『其処に在る物』。創世神話でそれぞれ神の所持する物のことだけれども、それらは全て実在すると言われているわ。『神護石』は神の持つ装飾品。言い伝えでは神の指輪のことだけど、ガルムは胸飾りとして持たせたようね。『神護石』の効果は魔力の無限化。これの恐ろしさが分かる?」

「あ、ああ・・・。こんな物を悪人が手にしたら大変なことに・・・」

予想以上な品物であることを知った琢磨は動搖を隠せない。アシェルもまた同様だ。

ミラは小さく首を振る。彼女の顔は神妙だ。

「それだけじゃないわ。アシェルはともかくタクマ、あなたは魔法を使えないのよ。そんなあなたがもし魔力を暴走させていたら・・・」

「タクマは死んでしまう」

その先をアシェルが引き継いだ。

しかしあつ一度ミラは首を横に振る。

「もし魔力暴走を起こせば、この国は死滅するわ」

「！」

「神は獨力でこの世界を作り上げた。その源は魔力。神自身の魔力も凄かつたでしょうが、それを補助するこの魔具、いいえ『神具』もまた相当な魔力を持つている。それが一気に解放されればこの国は終わりよ。その上、他の国々も半壊ね」

琢磨は果然として自らの護石を見つめる。

「何で…・・・師匠は俺にこんな物を・・・」

ミラは通信水晶で、落ちた窓の回収と事態の收拾を下階の従業員に伝えると、

「それは分かるわ。神護石は体内魔力量を多くする効果があるの。きっとそのためなんでしょうけど、あんの馬鹿ガルム！ 魔法を教えてから渡せばいいものを！」

「神の持ち物なのに効果が分かつてゐるんですか？」

アシエルの質問に琢磨も頷く。

「ええ、各族長たちの言い伝えがあるの。それに神護石は一番数が多くて研究もされたことがあるからね」

「へえ、何個あるんですか？」

「4個だつた。それが今日認識が変わつて6個になつたわ。1個は教皇が、1個はジパングの先詠姫が、1個はギルド総裁イシュリド

が、1個は勇者の聖墓に。そして2個をあなた達が持つてるわ。ギルド側はイシュリド様の持つ神護石を研究してるの。わかったことは多くはないけどね」

「そうだったんですか・・・」

「さて、と。それは置いといて、タクマの属性は水、魔力量は不明。まあ、神護石が收まつてもオーラ纏つてたから体内魔力量もかなりの量なんだろうね。じゃあ次は鍛練場行くよ。そこで実際に魔法を教えてやろう。アシェル、お前も付いておいで」

3人は執務室を出て鍛練場へ向かつた。

・・・・それを遠くから眺める存在に気が付くことなく

#37 魔法指南（前書き）

約1月ぶりの更新にもかかわらず短いです・・・

／＼＼＼＼ 中央支部 特別鍛練場 ／＼＼＼＼

『特別鍛練場』

それはクラスA以上の冒険者のみが利用できる鍛練場であり、本部と、4国に一つずつある中央支部のみがこの施設を所持している。

一般の鍛練場との違いと言えば、ギルドの誇る【守護神】と呼ばれる冒険者の結界が張られている事のみであるが。

ただしこの結界は、クラスS以上の者達でさえ容易に破ることは出来はないのだ。

そういう訳で、この施設では誰であれ本気を出して存分に稽古することが出来る。

結界は地面・側壁・天井に張られており、結界の結合部には何重にもなっている。

また結界は対魔・対物両方と抜かりは無い。

「・・・とまあ、こんなわけで初心者のタクマでも安心して魔法の練習が出来るってわけさ。初心者はどうしても魔法の暴走が起きてしまうからね。それにクラスAのタクマの魔法の練習を他の冒険者に見せたくないしね」

「ここまで特別鍛練場のことを教師のように饒舌に語ったミラは、くつと振り返つて琢磨を見た。

琢磨は不思議そうに考えた後、

「何で俺の練習を見せられないんだ?」

「タクマは東方の出身でしょ? 童顔だもんね。でも東方の人間が童顔だって知る人間は決して多くないのよ。そしてタクマを見てこう思う。『あんなにも若いのにクラスAだと!』? その上魔法を使えないで? よし、本当に強いのか俺が試してやろう!』ってね」

面倒くさそうに、やだやだ、と言つてため息をついたミラに続いて、

「いい? タクマ。冒険者っていうのは己の力のみで生き残った連中だから、上位に行けばいくほど上の人間には寛容になるの。でも下位で留まってる人間や冒険者になりたての人間は、強者に対して理由のない嫉妬心を覚えるのよ。もちろん全員が、とは言わないけどかなり多いのは事実ね。だからそんな恨みを買ってたんじゃまともに鍛練なんてできないよ」

と、アシェルが補足をしたら琢磨は納得した顔で頷いた。

ミラは鍛練場の中心に立つと2人を近くに呼び寄せた。

「アシェルはもう必要ないだろ? けど一応聞いておきな

「は~い」

その返事にミラは満足げな様子で大きく頷く。

「つむ、いい返事だ。いいかい? まず魔法と言つのは神様に対してもう『お願い』をして、その『お願い』に相応する魔法を授けてもらう

つて言つものだ。『お願ひ』は『詠唱』と『魔力』の2つを捧げる事を指す。やつてみるよ、よく見ときな』

ミラは斜めに立つて右腕を地面に水平にかかげて目を瞑る。

「『我が求むるは小さき炎の弾丸、其れは彼を焦がし滅す物なり』」

古代語でミラが詠唱するのを2人は黙つて聞いている。  
琢磨もガルムが良く魔法を使うため詠唱を見慣れており、  
その言葉に宿る神秘性と魔力を確かに感じ取っていた。

ミラはそこまで咳くと目をカツと見開き、

「【ファイアー】」

瞬間、ミラの右手から直径1mばかりの炎の塊が打ち出され、  
ゴオオオという衝撃音を出しながら飛んで鍛練場の壁に激突して土  
煙が舞つた。

ウオオン

そんな奇妙な音とともに土煙が晴れる。

そこに見える壁にはどこにも焦げた後はなかつた。

ミラの放つたファイアーは、トロールやガーゴイルを一撃で屠れる  
だけの威力を持つていた。  
しかしそれをもつてしても焦げ目すらつかない。  
2人はあまりの非常識さに目を見開いていた。

「おやおや、そんなに驚くことかい？さつきも説明したり？」

は結界が張つてあるつて。ま、もし結界がなくたつて居間ぐらこの攻撃じやあの壁に焦げ目なんて付かないだろうけどね」

「え？ 何でだ？」

「あの壁にはここから南東にあるジェルレマ山の【退魔鉱】を練りこんで作つてあるからね」

### 【退魔鉱】

大陸で唯一ジェルレマ山でのみ採掘可能な鉱石。採掘量は少ない。魔力を分解して空氣中に分散させる効果がある。

また、その性質から魔法を使う魔物はこの山には少ない。

「で、よ。古代語で話した部分は省略が可能なの。もう一回見てなさい」

再びミラは手を瞑つて集中する。

「『我が手に小さき炎の弾丸を』【ファイア】」

再びミラの手に炎が顯現した。

しかし今度の塊は80cmほどと少し小さい。

「『』のよに短縮することによって魔法を放つことも出来る。しかし見ての通り魔法の規模は若干ながら小さくなる。次にやり方だ」

ミラは形だけ先ほど通りにして顔は2人のほうに向ける。琢磨も真似をして右腕をかける。

「そうよ。次に右手に魔力を集めて詠唱する、繰り返しなさい」

「『我が求むるは小さき炎の弾丸・・・』

「『我が求むるは小さき炎の弾丸・・・』」

ミラノ言葉に続いて琢磨も詠唱を紡ぎ出す。  
琢磨は自らの周りが熱くなるのを感じる。

「『其れは彼を焦がし滅す物なり』」

「『其れは彼を焦がし滅す物なり』」

琢磨は額につつさりと汗が浮かぶ。

「【ファイア】」

「【ファイア】」

琢磨の右手からは見ても分かるほどに不安定に揺れた炎塊が、琢磨の右手を離れてすぐに弾けとんだ。

その衝撃に琢磨は吹き飛ばされて尻餅をついた。

そこに右手が差し出される、アシエルが起こすために出したのだ。  
琢磨はそれを掴んでゆっくりと立ち上がりミラを見た。

ミラは予想していたのか表情に何も浮かべずに淡々と言つ。

「今のは魔力が纏まらずに放出したんだ。だからタクマの制御化を離れたその瞬間に暴発したんだ。それを防ぐための方法はただ一つ、集中だよ。魔力を一気に集め、一気に放つ集中力と制御力が魔法に

は必要なんだ。今日は暇だからじんじん教え込んでいくよー。」

琢磨は綿が水を吸収するかのよつにじんじんと知識と技術を覚えていった。

この1日で琢磨は、一般的魔道教導院の3年に相当するだけのことを学んだ。

それは天性の才能と並ぶべきものなのであらうか・・・。

それとも・・・・・・

## #38 ギルドの使い方（前書き）

貨幣を分かりやすく変更しました。

銅貨 = 100円程度

銀貨 = 1万円程度

金貨 = 100万円程度

白金貨 = 1億円程度

キーヴル記念硬貨 = 10億円

白金貨は滅多に市場に出回らず、組織間・国家間に流通します

## #38 ギルドの使い方

琢磨が魔法をミラから教授された次の日の朝早く、琢磨とアシェルの2人はギルド受付ロビーにて、ミラから呼びだされていた。しかし、いくら待つてもミラは現れない。

「タクマ～、ミラさんはまだ来ないの～？？」

アシェルは待ち疲れて、ロビーにおいてあるソファーにぐったりと寝転んで天井を見上げていた。

琢磨は、元の世界にあつた時計に似た『何か』を見上げて答える。

「指定された時間は朝の5時で、今は10時だから、5時間待つてことになるな。あの人も副支部長だからな。何か緊急の仕事があつたんだろうか。しばらく待つてよ～ぜ」

それから1時間ほどした後、事務員に肩を貸されながらミラがぐつたりとしながら受付奥の扉から出て来た。それを確認した2人は慌ててミラの元へと駆け寄った。

「どうしたんですか！？」

琢磨のその問いに答えたのは、ミラではなく肩を貸していた事務員の方だった。

事務員は申し訳なさそうな表情で2人に言った。

「じめんねえ。タクマさんにアシェルさん、実はミラさんは昨日からずっとお酒を飲んでいらしたの。まったく、ミラさん！翌朝に用がある時は飲まないでください、って前から言いつてるじゃないですか

か

う、と呻きながらミリは顔を上げた。

「悪かったよ。ガルムから貰つた酒がうまいもんだからさ。ついで一本空けちまつたのさ」

「それドリさん。私たちに何の御用があつたんですか？」

「ん？ああ、そうだつたね。・・・ジエーンーあいたたた

ミリは一日酔いなのだろう、叫んでもぐに頭を押された。

「はい。ミリさん、何ですかー？」

何とも間延びした声だ。ギルドの制服に身を包み、頭にスカーフを巻いたおつとりとした女性が、受付カウンターから身を乗り出していた。

「H 832の依頼書を持って来て頂戴！あと水もーー！」

すぐにジョーンと呼ばれた女性は、コップにそそがれた水と一枚の依頼書を持ってきた。

ミリはコップをひつたくると、一気にあおつた。

そしてコップを押しつけると、今度は依頼書を受け取った。

琢磨はそれをさらにミリから受け取つて眺めてみる。

依頼書には、まん中に薬草の影絵が、その下には『銅貨×10』の文字が。

そして一番上には『クラビ力草 求む』

ミラは若干青くしながらようやく一人で立つ。

どうやらまだ一日酔いから完全には立ち直っていないうだ。

ミラは事務員とジーンを戻して説明を始める。

「2人は依頼書を見るのは初めてだそうだね、ガルムから聞いたよ

「え！ そうなんですか！？ お2人ともAクラス冒険者ですよね？？」

ミラに肩を貸していた事務員が驚いてミラと2人を見比べていた。  
それに失笑したのはアシエルである。

「実は私たちは、お師匠様の持ってきた依頼をやるだけでしたから。依頼の受け方とか、報酬の受け取り方とか、さっぱり知らないんですよ」

「らしいね。まあ、すぐに覚えるだろうぞ。手続きは簡単だからね。まず、受付横の掲示板にこれと同じようなたくさんの依頼書が貼つてあるでしょ？ それを剥がして受付の『受注』にギルドカードと一緒に出して。そしたら依頼受注よ。今回ならクラビ力草の採取、数は・・・30ね。30本のクラビ力草を手に入れたら、受付の『達成』のところで、依頼数のクラビ力草とギルドカードを提出してくれ。採取依頼や採掘依頼は、品質によって受取不可の場合もあるから多めに採つておいた方がいいわ。そして、依頼が達成したと認められればギルドカードと一緒に報酬を渡すわ」

「ギルドカードは誰のを出せばいいんだ？」

「依頼受注者のだけでいいわ。他の誰かと一緒に依頼をする時は受注時に申請してくれるといいわ。ただし、依頼途中で随伴者が法を

犯すようなことがあれば、責任は全て受注者にかかるの。だから、急場でのチーム結成をする場合はチーム全員で受注をしてくれればいいわ。その場合なら、法を犯した者だけが裁かれるわ」

「ならもし、お師匠様が持つてきた依頼で何かミスがあつたら、裁かれるのは私たちじゃなく、お師匠様だつたんですか?」

ミラはアシェルのその言葉に顔を曇らす。

それに琢磨はいち早く気付いた。

「何か、師匠に実際にあつたんですか?」

「・・・ガルム本人からじやなく、人伝てに聞いた話だから断片的にしか聞いていない。だから私からは何も言えないよ」

「そんな・・・!」

「話は最後まで聞きな!」

悲しみの声を上げたアシェルを一喝するミラ。

「ガルムについて、私よりずっとよく知る方に接触してみるわ。その方から何とか情報を聞きだして、あなた達に教えてあげる」

「その人って誰なんですか?」

「言つても知らないと思うわ。それにあなた達では会つことは出来ない」

「お願ひしても・・・よろしいですか?」

「ええ、でも期待はしないでね」

「それじゃあ、薬草採取に行つてきます

ガルムの事はミラに任せで、2人は薬草であるクラビカ草を探しに出発することにした。

「ちょっと待ちな。ほら、これを持って行きな

そつまつ ハリラが取り出したのは、手帳サイズの一冊の図鑑であった。

「これは薬草の名前・写真・特徴・効能・使い道が事細やかに記されている本よ。クラビカ草は、毒草のレーラ草と似ているからね、注意しなよ

「はい、ありがとうございます。それじゃ、行つてきます」

「ああ、行つてきな

ミラは2人を見送ると、伸びを一つして私室兼書斎へと戻る。

「さて、と。どうやっての方と連絡を取ろうかしら。私の権限で  
行けるかしらね、まったく」

## #38 ギルドの使い方（後書き）

お待たせしました。

これからもまた、この小説をよろしくお願いします。

琢磨とアシェルが、ガルムから半独立して1月。

表の人間を置いてけぼりにしながらも、ギルドの裏では大きく動いていた。

「それで、私に何か御用でしょうか？」

映像通信機には人の良さそうな、1人の老女を映し出していた。

映像通信機。20年ほど前にギルド科学技術部によって発掘された超古代技術である。

現在では、国家間・ギルド間でのみ使用されている。とは言つても、実際に稼働しているのは発掘された12基のみで、ギルドはそれを開発して再び使用することが可能になったのである。

その上で、数基を各国に譲る代わりに、様々な国家間条約を締結することに成功した。

それから20年、未だにギルドは過去の技術を復活させる事には成功していない。

（それは、かの新旧『智神』であつても……）

ミラはそんな事を考えながら、本来の自分の立場なら話す事の出来ない相手に酷く憚っていた。

「お初にお目に掛かります。クラスSS、ギルド副総裁『聖母』ア

マーリア＝ベーラズール様「

そつ言つとミラは、深々と頭を下げる。

アマーリア＝ベーラズール。ギルドの副総裁。『聖母』『ギルドの魔女』他、様々な異名がある。異名の通り、魔法が得意なのは言うまでもなく、戦闘指揮・戦術指揮・戦略指揮の手腕も疑う余地はない。クラスはS Sであるが副総裁という立場や人柄から、その影響力は計り知れない。純粋な人間族でありながらも年齢は100歳を超えている。しかし見た目は70歳程度で、美の秘訣は自らを危機の中に置く、というのが彼女の名言らしい。

聖王国中央支部副長ともいえど、副総裁であるアマーリアとコンタクトを取る術はない。

それほどまでに、アマーリアとは天と地ほどの差があるので。

そんなアマーリアとコンタクトをとれるのは、総裁イシュリド・本部長・本部副長・中央支部長、それにクラスS S以上の者たちだけだろう。

それなのに何故、ミラがコンタクト出来たのか。

ミラは当初、上司である支部長を通そうと思っていた。しかし支部長は奔放な性格であるために、ミラでさえも行方はつかめていないのである。かといって本部長や本部副長は、多少の交流はあるものの、頼みごとが出来るような中でも無い。そこで、駄目元でアマーリアへ直接、伝令の為の使い魔を放つたのである。それが功を奏し、先程アマーリアから通信機による面会要請が入ったのだった。

「マリアで良いわ。ミラさん。それで、私に何の御用なのかしら?」

「はっ。マリア様にお尋ねしたい事があります。クラスSS『絶対強者』ガルム＝グラベルツのことです」

「あら、珍しい名前が出て来たわね。それで？」

「彼の弟子達、タクマ＝カワサキとアシェル＝グリードの事で。今まで彼らの受注依頼はガルム殿の代理受理で行われていました。その折、2人の失敗は規定通りガルム殿の責任として処断されるはずです。これは人伝に聞いた話なのですが・・・。ガルム殿に『裏』が差し向けられたと聞いたのです。それは

「事実無根です。もし『裏』、つまり暗殺部隊が送られているとしたら、彼はもうこの世に居ないはずです。例え彼等を追い払つたとしても、ギルドは彼を追放するでしょう」

その言葉にミラは堵の息を吐く。

「そ、そうですよね、やっぱり。ではやはり、討伐し損ねた魔物の大群のせいで街が2つ壊滅したという噂も

「ミラさん

マリアの目が細まった。通信機越しとはいえ、マリアの気迫がミラの背筋を凍らす。

「それは噂です。噂ですがそれ以上、・・・それ以上彼と親しくするのはお止めなさい。さもなくば、有能なあなたを失いたくはありません。あなたの事を少し調べさせてもらいました。ミラ＝アークス。現役時代はクラスAでSクラスの誘いも受けっていた。しかしその数日後に、大砂漠の『砂喰い』<sup>ワサンドワーム</sup>との交戦で利き手を負傷。現役を

引退してそちらの支部に受付嬢として就職。前は魔物のせいで利き手を負傷されたようですね。次は人のせいで利き手を失いたくはないでしょ？まあ、利き手だけで済めばいいでしょうが

「それは……一体……あなたは……何、を？……彼は、ガルムは！？」

「私からは以上です。これからもあなたの働きに期待していますよ。  
ミラ中央支部副長

それだけ言って通信は終了した。

ミラは呆然としながら真黒なスクリーンを見つめ続けていた。

「ガルム……。あんた一体、何なんだ……？」

#39 裏方事情（後書き）

2か月ぶりの本編更新です^\_^

毎回言つてる気がしますが、毎週更新を目指して頑張ります！

あと2・3話は裏の話にならうです

少し時間軸がずれる。

琢磨とアシェルを半独立させてから2ヶ月、ガルムはS級依頼を次々にこなして行っていた。

通常、S級依頼は、地域や国に関わらず、どのギルドであっても受注する事が出来る。  
なぜなら、依頼を受けられる人数は極端に少ないのに加え、目的を達成させる場所が広範囲に及ぶためである。

「ふーむ。これで5件目か。これで討伐系は全てこなしたな

「それでは、依頼量はこれまで通り銀行に入れておきますが、よろしいですか？」

「ああ、頼むよ」

クラスBになると、依頼による死亡事故も多くなることから、銀行を利用する事が出来るようになる。もし預け主が死んでしまうと、特に指定が無い場合は全て銀行の財産となる。

ガルムは、ある程度の路銀以外は全て銀行に預けていた。

しかしガルムは一度たりとも預金額を見ていないため、どれだけのお金が眠っているかは「べー一部の銀行管理員しか知らない。  
かしこまりました」と受付嬢が頭を下げるのに、軽く手を挙げてギルドを出ると、何となしに人のあふれる市場へと移動した。

人混みのため、結構な回数で往来する人達とぶつかって行く。

それがいつだつたか、気が付けば彼の手には一枚のメモが握られていた。

その中身を見ると、彼は颶爽と身を翻して市場を出、聖王国をも出立していた。

／＼＼＼＼ ハルナ商連 孤島／＼＼＼＼

さらに1月後、ガルムはハルナ商連にある、名もなき孤島に居た。その島はそれなりの大きさであったが、加工しづらい樹木で覆われた上に、Bクラスの冒険者に相当する強さの魔物が数多く住みついているため、どの商団も手を出せずにいた。

「これが、【<sup>カトシケイ</sup>百頭百足】か。でもあの形状、報告書とかなり異なっているようだが？そもそもこの報告書誰が書いたんだ？小等教導院の1年でも、もつとまともな文を書くぞ」

ガルムは隣に悠然と立つ老人、ギルド総裁イシュリドに尋ねた。

「【樹朋】だ。【白炎】のパートナーだな」

「樹・・・朋？ああ、最年少のプラチナクラスか。そいつは使えるのか？」

「センスは悪くないが、愉快犯な面もある。白炎と同様に使いづらい奴だ」

2人は崖上で、1体の魔物を見降ろしていた。

## 【百頭百足】ハカトントンケイル

それは全長50m程と報告書に記載されていた。

竜が闊歩するこの時代、50mは決して大きすぎる値ではない。しかし、見降ろした場所にいるこの魔物は、優に100mを超えていた。

「龍種とかゴーレム並の大きさだよなあ。そういうねえよ、こんな奴。それに形状はスライム状なんじやなかつたのか？普通に脚とか出来あがつてんじやねえか。合つてゐる点と言えば・・・」

視点をヘカトンケイルから周りへと移す。

そこには死屍累々の世界だつた。

魔物の種類は100を超える、数は3000にも及ぶ。しかし、その半数近くが骨しか残つていないのはどうしてだろうか？

それを察したのか、イシュリドは口を開く。

「北に【腐食】、南に【暴食】、東に【智神】ワイズを配置している。おかげで魔物の大半が原形を留めていない。まあ、この数だ。かさばらない分マシだろうよ」

## SSクラス【腐食】フロード【暴食】フォイル

供にギルド屈指の実力者たちである。

【腐食】はあらゆる物を腐らせ、【暴食】はあらゆる物をむしぼつ食べ。

2人の共通点は、無傷で骨を残らせる嗜好を持つ事だらう。

## SSSクラス【智神】ワイズ

ギルド最高幹部。ギルドに5人しかいない。  
あらゆる知識を内包しており、ギルド科学部の所長も兼任している。  
ちなみに、【総裁】イシュリード、【白炎】ガイラルード（愛称ガイ  
ル）もSSSである。

「 SSSが2人にSSSも連れてきているのかよ。それで、西には誰  
が？」

「・・・【黒風】だ」

その言葉にガルムはぎょっとしてイシュリードを見遣る。

「『裏』の隊長さんか！！」

## 【黒風】

ギルド暗部の隊長。

暗部は総裁直属の、密偵・諜報・暗殺部隊である。

本部長ですらも規模を把握できておりず、

副総裁でさえも暗部へのコネクションを持ち合わせていない。

「最初は黒い球体、その時はラビだとか、ゴブリンだとかの小物が。  
スライム状で足や頭らしきものが表層から出てきてからはアンデッ  
ドやオーケーが。そして頭が出てくると、分裂して50体のベカトン  
ケイルになり、オーガやワイバーンが。そして、ひとつの中には10  
数の手足、体の表層も硬く安定してから2ヶ月、さっぱり動きやし  
ない」

「それで俺を呼んだってわけか」

「さうじや、不測の事態に備えてのお

「それは別に構わねえがよ、後何ヶ月かかるんだ？」

「知らぬ！」

「威張つて言つてんじやねえよー！」

ゾクリ

2人は身を翻してヘカトンケイルに目を向ける。

「何だあ？この悪感は！？」

「殺氣・・・では無いようじやが

ゴボリ

ヘカトンケイルの周囲の大気が揺らめく。  
そこから、何百もの竜が姿を表す。

「竜種がこんなにも！…？全員に通達する…1匹たりともこの島から出すな！！」

火竜・水竜・風竜・土竜・雷竜・氷竜・樹竜・腐竜・魚竜・虫竜が、  
あらゆる方向に逃げようとする。

それを阻止せんと、

北では腐食が、爪を、鱗を、肉を、髪を、ブレスを腐らせて、  
南では暴食が、爪を、鱗を、肉を、髪を、ブレスを貪つていく。

東では智神が、竜に混乱や魅惑の魔法をかけ、他の竜を落としている。

西では黒風が、どのような術を使っているのか、次々と絶命をせり  
いつている。

逃げ場を失った竜達は、空をさよつけた拳銃、イシュリドとガルム  
に牙をむける。

コンマ数秒で、数100mの距離を詰めた竜は、イシュリドと田<sup>た</sup>が  
合<sup>あ</sup>つのが分かつた。

イシュリドの眼<sup>まなこ</sup>を見た竜達は、本能的な恐怖……を超えて絶望し  
た。

## #40 裏方事情？（後書き）

追記：次回更新は250~26日です

追々記：無理でしたۚ。27日、27日には・・・。

ギルドのプラチナクラスの圧倒的な強さ

次回は総裁イシュリド無双

どうして総裁はイシュリドなのかと言つお話

魔物

ラビ：鋭い爪と角の生えたウサギのような魔物。クラスはF

ゴブリン：様々な武器を扱う。個体差の激しい魔物。クラスはE~B

アンデッド：不死者。スケルトンとゾンビの2種類。クラスはC~B

オーク：巨大な人型魔獣。知能は低いが力は強い。クラスはC

ワイバーン：皮と骨と筋肉だけの細い亜竜。鋭すぎる牙が特徴。クラスはA

オーガ：筋力が超発達した人型魔獣。全てが凝縮しているため、体が小さい。クラスはA

竜：属種は多種多様。龍種は竜種の上位互換である。クラスはA~S

## 裏方事情？

竜達はその瞬間を理解できなかつた。

人間よりも知能が勝るとも劣らない竜達が、その出来事を理解するよりも先に絶命したのである。

イシューリドがした事はただ一つだけ。

竜達の体を切り裂いただけだ。

竜達とイシューリドが田を畠わせた瞬間、イシューリドの爪は膨らんだ。イシューリドの膨らんだ爪は人のソレではない。爬虫類のそれであつた。

「喧やかましい竜共じゃわい。お主は動かんのか？」

自身の手に付いた血を無造作に払いながら、その場から1mmも動いていなかつたガルムを振り返る。

「この程度、まだ不測の事態じゃないだろうよ。そんなにもあんたの腕は鈍つちまつたつて言つなら手助けしてもいいんだぜ？」

「ふん。抜かせ」

ガルムの軽口を切つて捨てる。

「我が本領、あの若竜共に見せてくれようぞ」

そう言つと、イシューリドは体を震わせる。

ボコッ ボコボコボコボコボコ・・・・・・

ガルムの体が次第に影で覆われていく。  
イシューリドの体が膨れ上がって行つて、陽の光を遮つているからである。

そうして十数秒後、そこにいたのは1匹の白銀に輝く巨大な竜であった。

イシューリドの体長は今、この戦場を跋扈する竜達の3倍を優に超えている。

『この世界に渡つて来た後悔するがいい。貴様らの命を狩りとつてくれようぞーー!』

イシューリドは空を駆ける。彼を止められる竜はないなかつた。どんな竜達も、彼の爪に、牙に、ブレスに墜ちるしか未来は無かつた。普通の者にとっては竜は強者であった。しかしこの場において、彼ら以上に弱い存在は存在していなかつたのだ。

1匹、また1匹と竜は絶命して地に落とされしていく。

そんな中、1匹の竜がガルムのすぐ側に落ちて來た。  
ガルムはまだ微弱ながら生きていたその竜に近付き言つ。

「馬鹿だなあ、お前たちも。この世界でも上位者になれるとで

も思つたのか？だとしたら勘違いもいい所だ。せめて元の世界で最上位者になつてから来いよ。覚えておきな。・・・といつても、お前は「こ」で退場だがな

そう言つてガルムは、いつの間にか抜いていた剣で竜の首を搔つ切つた。

竜は一言弱く鳴くと、ガルムの言葉通り、この世から退場することとなる。

ガルムは血を払い、剣をしまつと、空を跋扈していた竜達を蹂躪するイシュリドを見上げた。

あと1分もすれば全ての竜は地に伏すこととなるだろう。

「おーおー、流石だな。爺さんの腕は落ちてはいない、か。こりやあ竜達に多少同情するねえ。噛まれるだけならともかく、切り裂かれれば真っ二つ。プレスを喰らえば塵も残らない」

ガルムは心底、彼らに同情していた。基本的に、ガルムは好戦的だが死者へは敬意を払う。己が多くの死者の上に立つていると自覚しているためであった。

「1000年前の大戦時、竜人族の隊長。歴史上ただ1人【神竜】の称号を神より賜つた竜人」

神は存在する。その事実を知るものは非常に少ない。神の御言葉を聞ける聖王国の2大統治者である教皇王と巫女姫、各國の最高指導者達、それにギルド最高幹部もそうである。

歴史上最も新しく神が顕現したのは1000年前、公にはなつていなが、魔王の討伐後に神は顕現して英雄達に礼を言ったとされる。

その礼と供に、神は英雄達に一つ名を与えた。

シャルベ王国 建国の祖【救世神】ベルズング

クラリー聖王国 建国の祖【陽光の女神】ナバルディ

ギリウス帝国 建国の祖【豪傑の斧神】ヒルデグリム

ハルナ商連 建国の大祖【神使】???

その他に、連合軍総司令官、人間族隊長、亜人族隊長、竜人族隊長、遊撃部隊長にも二つ名が賜られた。

その時の竜人族隊長が、他ならぬイシュリドなのだ。

元来、竜人族の平均寿命は1000年であり、イシュリドほど長生きをしている竜人族は、彼の弟であり現竜人族長老だけである。

「さて、残る1体はあの薄気味悪いヘカトンケイルとかいう魔物だけか」

グル、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、アアア

ヘカトンケイルは先程から、一歩も動かずにただ叫んでいる。

それをいいことに冒険者たちは竜を駆逐しているわけであるが・・・。

この戦場に残るはヘカトンケイル1体のみ。ただし、その強さは未知数である。前回は【白炎】が最大の火力で消滅させたため、正確

な戦闘力は分からなかつたのだ。

アアアアアアアアアアア

叫び声が終わつた。

同時に殲滅が終わつたのか、イシュリドがガルムの元へと戻つてき  
た。

『さて、残るは大将のみじや』

「藪を突いた結果が分かるんだな。さて、蛇ヘラヘンオーガも鬼も出たんだ。残つ  
た藪はどんな怪物なんだ。期待外れで終わるなよ？せいぜい俺を楽  
しませてから死に晒せ」

**裏方事情？（後書き）**

み・・・短い

スランプです><

次ぐらいで裏方事情も終わらせたいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8212o/>

---

ガルディア大陸物語

2011年12月27日21時33分発行